

り抜きたい、求め合ふ世界をモウ一つ通り抜きたい。さうして悦び合ひ、感謝し合ふ世界まで行きたいので。急には行かぬでせうけれども、さういふ事を目標として行くより仕方がない。それを此處の經文に實に能く表はして居る。つまり終局の生き方ともいふものを實に能く表はして居るやうであります。

之を昔から研究した人が十に分けて、所謂十種の神力と申して居ります。マア大體の意味は以上申したやうなことで宜しいのでありますけれども、昔からの言ひ方もありまして、又さういふ言葉で言ひ表はして見るとモウ一層適切なやうであります。それで次には今讀みました所を十段に分けて、モウ一遍讀返すやうに致したいと思ひます。

出廣長舌

一、出廣長舌(二門信一)。「廣長舌を出す」といふのは佛様が舌を出されたのです。佛の説かれる所は洪大無邊なる法であるから佛の舌を廣長舌といふので、佛が舌を出して見せられたのは、其の説くことが眞實であるといふことを示すのです。此の舌を出して眞意の意を示すことはズツと昔からの習慣であつたやうであります。自分の言ふ事は偽りではない、又自分の約した事は必ず實行するといふやうに、眞實の心持を現はす時に舌を出す、斯ういふ習慣であつたのであります。

今こゝで釋尊が舌を出して見せられた、それから他の佛達も同時に舌を出したとありますが、これは要するに何れの佛でも其の説く所は一であるから、人々は絶対に之を信すべきであるといふことを表はしたのだと言はれて居ります。専門の語でいへば、これは「二門信一」を表はしたものだといふのです。二門といふのは前に申したやうに迹門と本門。法華經の前の方半分が迹門で、後の方半分が本門です。迹門はお釋迦様の御一代に教をお説きになつた大體の目的を明にするために説かれた。本門の方はお釋迦様が決して限りあ

本迹を通じ  
て一

る生命を持つた佛様でなくて、永遠の生命を持つた本佛の現はれたものだといふことを明されるのである。それで本佛、迹佛の間に輕重の別を立てなければならぬやうにも見えるが、さういふ區別を立て、本門と迹門とを別々のものに考へる必要は少しも無い。お釋迦様が若し吾々の眼の前に現はれなければ、本佛があつてもあるといふことを吾々は知らないでせう。又本佛の無限の慈悲がなければ、お釋迦様といふものが現はれていらつしやる筈もないのですからサウ考へれば、本門と迹門とに區別を立てる必要はない。現はれたものも尊いが、現はれる根本も尊いのであつて、現はれなければ根本のものがあつてもわからぬ、又根本のものが無ければ現はれもしないといふことであるから、本と迹といふものは要するに通じて一つのものと考へなければならぬ譯です。釋尊が舌を出したといふことはそれを表はすのだと言はれて居ります。本門も迹門も、つまり法華經全體を通じて信といふものは一つでなければならぬ。佛の教は眞實なものであるから、吾が佛を信するといふ心持も始終一貫して居れば、その信する結果として、だん／＼に心中の煩惱を除いて佛の境界に近づいて行ける。斯う考へられるのです。

それで信と解との關係を考へると、いつでも經文には「信解」とあるので、能く信じてその意味が能く解らなければならぬのであります。一體信と解と何れが本だらうかといふことは、實はむづかしい問題です。チヨウド卵が鳥を生むか、鳥が卵を産むかといふやうな話で、卵は鳥から出たのだが、鳥は卵の中から出たのである。一體一番初めに鳥があつたのか、卵があつたのか、誰も見た人はないのでありますから、これはむづかしい問題です。それと同じやうに、能く信すれば一生懸命で考へるから、能く解つて來るでせう。又能く解れば更に深く信するやうになるでせう。深く信すれば又更によく解るでせうから、要するに信が解

信と解



を産み、解が信を産んで行くので、チョウド鳥と卵のやうな關係に相違ない。それで一體初めに鳥があつたか卵があつたかといふことが判らないやうに、吾々の心の中にはどつちが初めに動いたのかといふことは容易に判らない。

しかしながら暫く宗教を離れて、吾々の稚い時からの生活について考へて見ますと、私共が一番初め赤ん坊であつた時から大人になるまでの間に、いろ／＼な事を習つて來ますが、その習つて來る初めはどういふものでせう。解つて習つたのか、習つて解つたのか。これは恐らく習つて解つたに相違ない。お辭儀をすることの意味は初めは解らないで、お辭儀だけして居たのです。大人がみなお辭儀をしるお辭儀をしると言ふからやつたのです。赤ん坊が母親の乳を飲むのでも、何か譯はわからぬが、口へ乳首をくつつけるから自然に飲んだのでせう。習つて解つたか、解つて習つたかといへば、吾々の生活に於ては習つて解つた。解つて習つたのではない、習ふ間に解つて來たのです。それがすべての事實でせう。一番初めに何故といふことが解つてやるものではない、初めは自然と周圍に倣つてやるのです。やつて居る間に自然に解つて來る。宗教のことも恐らくさうだらうと思はれる。何だか信ぜざるを得ない氣が起つて、嘘と思へないといふので自ら信ずるのでせう。さうして信じて行くから解るのでせう。初めから當てにならぬと思つたら解る筈はない。吾々が學校へ行つてもさうです。初めて小學校に通ふ時に、『この先生は出鱈目を言ふな』と思つたら、逆も覺えられはしないけれども、學校の門を潜る時に、『先生といふものは偉いものだ、先生は自分を良くして呉れる』と信じて行くから、『い』と言へば『い』と覺える。先生が『い』と言つても『ろ』かも知れないと思つた日には、覺えられるものではない。宗教のことも信に依つて解を産み、解に依つて信を強めることは事

習ふことか  
ら初まる

實であります、抑々初めからのことをいへば、先づ以て信じなければならぬ。これが眞實だ、これに依つて自分は救はれさうだといふ氣分が出なければ、テンで教を受けることは出來ないでせう。ですから信を本にするといふことに少しも不思議はない。今の教育を受けた人は、解らないものは信じられないと言ふけれども、しかし自分達が『いろは』を習つた時のことを考へれば、やはり信じて習つたので、嘘と思つて習つたのではないわけです。すべてさういふ風に考へれば、信が根本であるといふことは認められる。殊に宗教に於ては、何ものも信ずることの出來ない人間は、何ものも解らぬ人間であると確かに言へる筈です。それで『信一』といふことを一番初めに教へられて居りますのは、これは少しも無理なことではないやうです。その次には佛様の身から光が出たといふことがありました。

毛孔放光

二、毛孔放光(二門理一)。すなはち『一切の毛孔より光を放つ』とあります。光といふのは闇を照すものであつて、すなはち絶對の眞理に譬へるのであります。そこで毛孔より光を放つといふことは『二門理一』法華經の本門と迹門と、つまり法華經全體を通じて、そこに明される道理は一つであるといふことを表はすと謂はれて居ります。

方便を捨て眞實を説かれたのが法華經であるが、併し方便といふものは幾度も申上げるやうに、嘘ではない。方便はたゞ淺いだけの話で、決して嘘ではない。例へば東京から京都まで行く途中で、汽車が横濱に停つたり、静岡に停つたり、名古屋に停つたりする。これが即ち方便です。何故横濱に停つたり、静岡に停つたり、名古屋に停つたりするかといへば、京都へ行く人に乗せる爲でせう。京都へ行く途中として停るのであります。ですから横濱で降りて、それきりにしてしまへば京都へは行けない。静岡で降りたり名古屋で降りて、



それきりで止つてしまへば京都へは行けないと同じで、方便の教で止つてはいけないといふことが屢々説かれて居る。行先を忘れて途中で止つてはいけない。しかしながら横濱も静岡も通らないで京都へは行けない。だから静岡を通つたことも、名古屋を通つたことも、やはり京都へ行く爲の一つの避くべからざる道筋である。方便の教もその通りで、方便の教をだん／＼通つて行つて眞實の教に行くのですから、眞實の教に行くまでに方便の教を通るのは避くべからざるものである。若し京都へ行かうといふのに大宮へ行つたり、新潟へ行つたりしたのではないでせうけれども、同じ方角であれば横濱を通り静岡を通り、名古屋を通るといふことは、京都へ行く爲に役に立つて居る。佛の教に於てもさうです。佛がどんな浅い教をお説きになつても、一切衆生が佛に成るといふ大目的に役に立たないことは一つも仰しやらない。だからどんな浅い教でも、その浅い教はみな眞實の教に通ふ道を具へて居ると言へるのです。

それだから前の方便品以來その事を言つて居られる。佛に菩薩以外の弟子は無い。たとへ低い教を説いても、斯ういふことを説いて、こゝからだん／＼深入して菩薩の行を實行させようと思つて話して居るので、菩薩にしない弟子といふものは一人もありはしないと云つて居られる。本門に入つて佛壽の無量を説かれるのも、要するに人々をして其の信仰の根柢を固くして、菩薩の道を勵ませやうといふ爲に外ならぬのです。ですから道理は一貫して居る、即ち『理一』です。だから自分が佛様と同じに成らない間は努力を止めまいといふ決心が大事であつて、若しその心持がなくなつてしまへば、たとひ大乘の經典を學んでも、その心の持ち方は小乗的の心を持ち方であると言はなければならぬ。大乘といふのは要するに佛と一致すること、各自が完全になるといふことが大乘の目的です。ですから完全にならうといふ爲の努力をやめてしまつて途

## 教の浅深

中で止まれば、それはチヨウド神奈川で降りて晝寝をして居たり、大津で降りて晝寝をして居て、京都へ行けないといふのと同じことです。たとへ手前の方でやめても、先の方でやめても、兎に角途中でやめてしまへば佛に成れない。そこが大事な所です。『自分達は法華經を讀んだからモウ安心だ、彼等は法華經を讀まないからつまらない』と、さう思つてはいけません。法華經を讀んでも、唯だ讀んだだけで、そこで懈けてしまへば、讀まない人と格別の違ひはない。途中で居眠りをすれば、何處で居眠りをしても、先へ行き着けないといふことは少しも變らない。そこはお互ひにシツカリ考へなければならぬ事です。

でありますから佛の身から光が出て總てを照すといふことは、吾々はその佛の光に照されて、自分達も佛と同じに成りたいといふ心持を起さなければならぬといふことを意味するのであつて、その意味から言へば本門でも迹門でも、これを一貫した理といふものに變りはしない。佛様のお覺りになつたのが絶對の眞理であつて、その絶對の眞理を覺るために吾々もみな修行する。斯ういふことはチツとも變らないといふことが打明けられて居るのです。第三には一時に警教をしたといふことがあります。

三、一時警教(二門教一)。警教は聲を發すことです。聲を發すとは教へることを意味するのです。それでこれは『二門教一』を表はして居る。法華經の前半で教へられたことも、後半で教へられたことも、その教へられる趣意は歸著するところ一つであるといふことです。教へるのは何の爲かといへば、凡て弟子を教へるのは、弟子を自分と同じにする爲なのですから、教を惜むといふことにはない。それは方便品に明かに言つてある。自分が覺つて居ながら他の者に宜い加減な教へ方をするといふことは、それ慳は貪の罪を犯すわけだ、佛はさういふことは決してしないと云つてある。教へるといふ場合には、自分の知つて居る限りをみな

## 一時警教



教を惜まぬ

傾け盡して教へるのでなければ、本當に教へるとは言へない。尤も相手の力に依つて少しづつ教へて行くことはあるけれども、教へるのを惜むといふことは絶対にない筈である。だから最初に教へる時にホンの口元を教へても、これはズツと奥まで引張つて行つてやらうといふ心持を以て教へなければ、本當の教といふものにはならない。教といふものは一番初めから、最後の所まで引張るつもりであるべきで、すなはち教を與へる佛様御自身と同じになるまではいつまでも教へてやらう、斯ういふ心持を以て佛はいつも教へて居られる。此の御心持が迹門から本門まで一貫して打明けられてある。尤も相手の機根に依つて、ユツクリ教へると、眞直ぐに眞實の事を説くのととの差はあるけれども、苟くも教へるといふ以上はみな歸著するところは一つである。それが一時に致拂ひをしたといふことの意味であります。それから第四番目には指を弾いたといふことがあります。

俱共彈指

四、俱共彈指（二門人一）。これは日本と習慣が異ふものですから、日本では爪弾きをするといふのは非常に悪い事ですが、印度では彈指するといふのは物を請合ふことです。例へば約束をした時に、約束し終つて斯うやつて爪弾きをすると、確かにやりますと請合ふことになる。それでみなと一緒に彈指したといふことは、確かにやりますと、聽いた教はきつと實行しませうと約したことです。實行して行きさへすれば、此の穢い娑婆世界に極樂淨土が實現されるのであるから、それを實行しようといふことを佛が先づ範を示して、さうしてみなが同じ心持になつたわけです。それでこれは「二門人一」と申しまして、法華經に於て教へられるのは菩薩行に外ならぬことを明かにされたのです。此の行ひが一つだといふことは、よく考へなければならぬことで、吾々が己れを慎むといふ事と、人を教へるといふ事は全く別のことではない。それを異つた

舜の無爲

事と思ふのは大變な間違ひであつて、自分が本當に善い行ひをすれば、それが自然に手本となつて周圍を動かす。又人を教へようと思つたなら、自分が實行しないで口先だけで教へられるものではない。ですから自分を慎むといふ事と人を教へるといふ事は結局は同じです。

支那に舜といふ天子があつて、昔の名天子と言はれて居りますが、孔子が舜を批評して、舜といふ天子は何にもしない、己れを恭しくして南面するのみと云うて居ります。自分の行ひを慎んで南の方を向いてチャンと坐つて居た、唯だそれだけだといふ。實に良いことを言つて居る、流石に孔子であります。自分が立派な行ひをして眞直に南の方を向いて椅子に腰を掛けてジツとして居た、それで天下が治まつたといふ。眞の教化はそれではなければならぬ。徒に言葉を繁くし法律を面倒にして、さうして世の中が治まるといふものはない。人の上に立つ人が己れを正しくして、南面してジツとして居れば自ら天下は治まつて行くといふのは、これは當然のことである。吾々が若し自分の行ひを本當に佛様のやうにするならば、口で何にも言はないでも自ら周圍を感化して行くだらうし、又時として物を言へば、その言葉はみな周圍の人に大きな力を與へるであらう。一つ手を動かしても一つ足を踏み出しても、其の一舉一動はみな周圍の人に大きな力を與へるでありませう。要するに行ひといふものは一つで、人の爲とか自分の爲とかいふことはありはしない。自分を善くすることが人の爲であるし、又人に親切を盡すことが自分を更に善くすることになる。自他といふものが要するに融合して一つになる、それを考へなければならぬ。己れを慎まずして世の爲とか人の爲とかと言つて騒いだところで、それは空騒ぎになつてしまふ。教へる人も教へられる人と共に一つになつて、此の世に淨土を實現することに力を盡すべきである。本當に誠心を以てやつた行ひといふものは、世を動か

自他融合



し人を動かす力を有つて居るものである。斯ういふことは考へなければならぬ。世の中が忙しくなつて來ると、人間が氣が短くなるから、兎角結果を急ぐけれども、いくら急いだところで本當の結果といふものは、やはり自分の誠心から出たものでなければ得られるものではないのですから、さういふ意味から言つても『人一』といふことは常にシツカリと考へて置くべき事です。第五には六種に地が動いたといふことがありますが。

六種地動

五、六種地動（二門行一）。地面が動いたといふことは天地がみな感動したこと、すなはち人の心持が一切のものに及んだといふことであります。大乘の教が世の中に弘まつて、終には淨土がこゝに實現せらるべきものであるから、其の貴さに天地のあらゆるものがみな感動したといふ意味が、地の動いたといふことになつて現はれて居るのです。これはつまり『行一』で、人間は皆同じ所に到達し得らるゝものであることを現はすのです。人間といふ中には凡夫もあれば覺つた者もある。覺つたといふ中でも聲聞とか、緣覺とか、菩薩とか、上になれば佛とか、いろ／＼有るのでせう。けれども屢々申すやうに、如何なる惡人でも佛性を具へて居るのだし、如何に覺つた者でも初めから覺つたのではない、結局迷つたところから行くのだから、人の行ひは結局相通じて一に歸すべきものです。本當に考へれば善人として特に誇るべき者もなく、惡人として特に憎むべき者もないといふことが言へるでせう。前にも申上げたやうに、譬へば水を百度に熱すれば沸騰して水蒸氣になるし、水を零度に下げれば凍つて氷になる。氷と水蒸氣と比べればまるで性質が異ふやうだけれども、しかし百度の水を九十度、八十度、七十度……とだん／＼下げて行けば、やがて零度になつて凍る。氷を少しづつ温めて十度、二十度、三十度……と上げて百度に行けば沸騰する。成るほど極端と極

善惡は程度の差

端を比べれば異ふけれども、要するに水蒸氣と氷は續きだと言へる。吾々は其の真中どこかに居る。譬へて言へば百度を佛様とすれば零度は餓鬼畜生でありませうが、吾々共は真中どこかに居る。私などは二十五度か三十度の所でせう、なか／＼七八十度の所には行けませんまいが、一度上れば上つただけ熱くなる、一度下れば下つただけ冷くなる。氷にもなれゝば水蒸氣にもなれるが、それは皆續きです。だから一たび教を聞いたからと言つて、教を聽いたのに満足して、そこで止つてしまへばそれきりの話です。又今は教がわからないでも、求めて止まなれば結局佛の境界にまでも行けるのでありますから、眼の前で見る人々の境界にはさまざまの差があらうとも、佛様の眼から御覽になれば悉く自分の子であつて、悉く教へて行きさへすれば佛様御自身と同じものに成れると考へて居らつしやるに相違ない。それが即ち『行一』です。凡ての人は皆佛になることを目標として其の行ひを勵むべきものであります。さういふことをよく考へて見ると、本門を學ぶのと迹門を學ぶのとは共に菩薩行を學ぶのであるといふことが能くわかります。

その次には話が十分變りまして、今までは靈鷲山近邊のことであつたが、今度は靈鷲山に集つた大勢の者と、他の世界の者と、お互ひに様子がわかり合つたといふことになります。

普見大會

六、普見大會（未來機一）。十方の世界の衆生、或は阿修羅とか、迦樓羅とか、摩睺羅伽とか、人非人等が皆佛の神力を以て、この娑婆世界に於て一切の者が集つて居る様子を見たといふことがあります。これは何を表はすかといふと、境遇がそれ／＼異つても、又その知識の程度が異つても、或る時機が來ればみな一緒に正しい教に歸依すべきものだといふことを表はして居る。天の上に在るものも、地の底に在るものも、みな娑婆世界に佛様を中心として大勢が集つて居る所を見て、あゝ貴いナと思つたといふのです。これは『未



來の機一』で、これから後には必ず皆の機根が一致する時が来るといふことを表はしたと謂はれて居ります。機といふのは機根、すなはち教を求める心持であります。今の所では教を求める心持に異ひがある。一生懸命に教を求める人もあるし、慰み半分に教を聽いて居る人もある。研究のためにお經を讀むやうな人もある。或はまるで縁の無い人もある。今の所では人々の機根はみな異ふ。けれども佛様のお考へから言へば、みな救はるべき本性を有つて居る。たゞ早い晚いの別はある。早く佛の教に寄りついて来る者もある、或はなか／＼寄りついて来ない者もあるけれども、人間の生命は三十年や五十年で終るものではなくて、皆永遠の生命を有つて居るのであるから、何處かで種々の變化に遭つて、何處かで深く考へて、何處かで氣がつくに相違ない。氣がついて来ればきつと教を求めるやうになる。要するに今信じて居るか、信じて居ないかといふことは、早い晚いの問題であつて、未來永遠の先まで行けばきつと皆が教を求める心持になるだらうといふ、それが未來機一であります。

だから前にもあつたやうに、佛様は教をお急ぎにならない。聽きたくないと言へば、止めよと言はれる。前の方便品にありましたが、一團の人々が聽きたくないと言つて座を退いた時に、佛様はお留めにならないで其儘にして置かれた。それは甚だ慈悲の心が足りないやうに見えるけれども、決してさうではない。あの連中は聽きたくないと言つて出て行つたが、出て行つて自分流儀にやつて、きつと先の先へ行つて、行き詰つて困るであらう。困れば深く考へるであらう。考へれば又教を求めて来るであらうといふことを見透して居らつしやるから急がない。それは皆場合に依ること、急いで教へる必要があれば急いで教へるし、急いで教へても役に立たないなら突き放して置く。それでも人間といふものはみな佛性があるから、何かの機會

緩急宜しき  
に従ふ

があれば又目が覺めて寄りついて来る。だから急いで教へるのも一つの方法、急いで教へないで突き放して置くのも一つの方法、それは相手に依り場合に依るのであつて、それを見るのが本當に人を教へる人といふものである。その見透しがつかないで、突き放して置くべき者を無理に勧めたところが、なか／＼効果のあるものではない。そこはなか／＼むづかしい所で、佛様でなければ本當の見極めはつかないでせうけれども、吾々共のやうな凡夫が人を教へるのでも、やはりその用意は無ければいかぬ。早くすべき者もあれば、ユツクリすべき者もある。親切にして包容すべき者もあれば、放り出してしまふべき者もある。放り出したことが結局教に近づかしむる因であることもある。さまざまな者があるでせうけれども、結局は人間みな佛性があるのだから、早い晚いの差はあらうとも、みな佛の教に歸依して来るに違ひない。それが未來機一、先の先まで考へれば、結局のところ機はみな一つである。斯ういふことが十方世界と娑婆世界とが通じたといふことに依つて表はされたといふのです。第七には空中から聲が聞えたといふことがあります。

空中唱聲

七、空中唱聲（未來教一）。空中から聲が聞えて、十方世界の者に向つて、お前達はみな娑婆世界にお釋迦様が居られて法華經をお説きになるからこれに歸依の心を起せと言はれた。さうして十方世界のものがみな掌を合せて娑婆世界に向つて、南無釋迦牟尼佛といつて禮拜したといふことがあります。これは『未來の教一』、教は必ず一に歸すべきものだといふことを表はして居る。此の事は吾々佛教を信ずる者に取つては非常に重大な問題であります。世界の教がいろ／＼に分れて居ても、その教はみな人を善くし世を善くする目的で説かれて居るのであつて、みな同じ目的のために説かれて居るに違ひない。然るに同じ目的のために説かれて居る教が斯う分れて居るといふことは、要するにどの教も完全に説かれて居ないか、完全に信じられて



## 諸教の歸一

居ないからでせう。だから此等は自ら近寄つて行つて、結局一に歸さなければならぬ。人間を善くしようといふ目的は一つなので、永久に分れて居るべきわけはない。耶蘇教であらうと佛敎であらうと、マホメット敎であらうと天理敎であらうと、人間を善くしようといふ一つの目的のために敎が説かれて居る。その敎が一致しないといふことは、敎そのものが不完全であるか、或は敎を説き弘めるその方法が不完全であるか、何れかの原因によつてその間に行き違ひが出来て一致しないのでせう。結局其等の敎がだん／＼磨かれて、だん／＼進んで、眞實のことがわかつて来れば、結局何處かで一つにならなければならぬ。斯ういふことは確かに考へられます。そのことは前の『壽量品』に於て既に言つてある。佛様は佛でない姿で世に出て敎を説かれたこともある。又是から後も、佛と名乗らないで敎を説くことがあるだらうといはれる。それで聖人君子といふ名を以て説いたのも、佛の敎の一部分だといふことは『壽量品』にハッキリ言つてあります。ですから未來はすべての敎が一つになつて行く、さうして人間の敎は一つしか無いといふことが皆に認められる時が来なければならぬ。これを信じなければ、吾々は佛敎といふものに絶對の信仰を捧げることは出来ない。今は分れて居るけれども、結局は一つになる。斯ういふことを信じて、今私共が釋迦牟尼佛の敎に歸依して居るのは、末の末になれば人間を通じて唯一つの敎と認めらるべきものに歸依したといふことになる。斯ういふ確信を以て私共は佛敎に歸依して然るべきものです。是非ともさうでなければならぬ。

## 諸派對立の事情

少し話が脱線しますが、抑も敎が分れるのはどういふ事情で分れたか、この事を少しお互ひが考へて見なければならぬと思ふ。まア世界の宗教といふやうな廣いことは暫く措いて、例へば日蓮上人が出て法華經をお弘めになつた。その日蓮上人の敎を弘める者が後になつて十派にも分れて居るといふのは不思議ではない

か。何故分れて居るだらうといふことを能く考へて見る。其の分れた初めはどういふ考へであつたらう。分れるつもりで分れたのかといへば、決してさうではないでせう。どの派でも其の派を始めた人の精神では、斯う分れて居ては仕様がなから初めに戻らうといふのでせう。もつと遡つて言へば日蓮上人御自身でも、自分が一派を立てるつもりではなかつた。お釋迦様の御本意に遡らうと思つて奮起された。その他の人々も皆分れるのを止めようと思つて起つたのでせう。その時代に於ては多くの派が分れて居て、淺ましい争ひなどをして居るから、元へ戻らうと思つて奮起したに相違ない。ところがその人が偉い人だから、その人に歸依した人々が後までも一致協力して居る間に、自ら又一つの團結が出来てしまつて、それが他と對抗するやうになつたのです。それから又後に出た偉い人が、これではいけない、元へ戻らうと思つて努力すると、それが又一の團結を造ることになる。だから宗祖とか派祖とかいふ名前がついて居るが、若し今生れて來たら大に驚くこととせう。日蓮上人をお祖師様と言つて居りますが、日蓮上人が生れて來たら『馬鹿なことを言ふ、自分のことを何だつてお祖師様と言ふのだ。自分は一つの派の祖になるのではない』と言はれるだらうと思ひます。日蓮上人の後の何々派と呼ばれる其の初めの人が出て來ても、『自分を一派の祖と仰ぐなんて途方もない話だ、何を馬鹿なことを言ふか』と言はれるに相違ない。當然さうあるべきです。然らば分れるといふ筈はなくて、いつ迄も分れて居るのはどういふ譯かといふと、そこにいつの間にか私情が挟まるからです。自分の派とか、自分の宗とか、自分の團體とかいふものを、是非固めて行かうといふ私心がそこに挟まるから、そこで分れた間の境界がいつ迄も解けなくなつてしまふのです。そこで統合運動とか一致運動といふものが始終行はれて居ますが、運動がどんなに盛んになつても、申合せがどんなに完全に出來ても、人

私心を去る  
ことが第一



人が私心を捨てない間は、此の分離したものが一つになるものではない。或る派の人が私の心を以て、他の派と一緒にしようと言つても、其の人が他のものを一緒にして大に威張らうと思つて一緒になつたのでは、何にもなりはしない。しかしながら人はみな佛性があるのだから、結局はその私を捨て、一つになる時が来るといふことを理想として、お互ひが勵まなければならぬ。今のところは浅ましい状態でいろ／＼分れて居るけれども、今分れて居ると言つて愛憎を盡かしてしまふべきものではない、結局は一つになるのだ、といふ、斯ういふ大理想を捨てないやうにして行くことが大切であります。その次に十方世界のものが咸く皆佛に歸命して、南無釋迦牟尼佛と言つて拜んだといふことがあります。

咸皆歸命

八、咸皆歸命（未來人一）。歸命とは佛様に歸依すること。どの世界のものでも、此の地上のものでも天上界のものでも、如何なるものでも皆佛様に歸依する時が来る。それが『未來人一』で、未來に於て人々はみな一つになるといふことであります。今のところでは人々の程度が異ふ。悪人もあれば善人もある。同じ佛敎を信じた者の中でも、よく解る者もあれば解らぬ者もある。徳のある者もあれば足りない者もある。しかし結局すべての人は、佛様に歸依して信仰を勵めば、みな佛様にだん／＼近づいて、結局は同じになつてしまふと、斯ういふことであります。それは歸依することに依つてのみ出来ることです。自分の智慧分別でコッ／＼やつて居たのでは何時までも出来ないのだが、みなが佛様に歸依して、絶對の佛の敎を奉ずることに依つて、人々はみな一つになるのだといふことを、形に表はして居るのであります。

その次に天上界からいろ／＼の寶や何かを佛様に捧げた、それが空中をグル／＼廻りながら靈鷲山に落ちて來たといふことがあります。

遙散諸物

善惡の別

九、遙散諸物（未來行一）。『遙に諸物を散ず』といふ、これは未來に於て一切の人間の行ひがみな一つになつて來べきことを現はすので、即ち『未來の行一』を表はしたものであります。十方世界の者が此の娑婆世界に對している／＼な寶物を捧げる、それは此の娑婆世界の佛様を讚歎する爲であつたといふのです。要するに人間の行ひといふものは、みな佛の御心に叶ふことを目標として、一致すべきであるといふことです。一體善い惡いを人間は何で決めるか。この事はお互ひに眞面目に考へなければならぬことです。善いとか惡いとかいふことを勝手次第に決めて、どつちが善いといふやうなことを言ふけれども、標準を示さないでどつちが善いかといつては困る。つまり善い惡いといふことは目的に依つて異ふ。それだから夏になれば氷が善いし、冬になれば氷が善い。涼しくする目的のためには氷が善い。温かになる目的のためには氷より氷が善い。さうすれば人生の究竟目的がハッキリした時に、初めて凡ての事の根本の善い惡いが決まるのであつて、人生の眞實の目的がハッキリしないで善いとか惡いとか言つて見ても、その善い惡いは畢竟一時的のもので、假定的のものでせう。それで人間の行ひの善い惡いは結局何で定めるかといへば、佛様と一致することが善いのであつて、佛様に背くのが惡いことだと言ふより外はない。何故なら佛様は完全なものだから、完全なものと同じであるのが善いのであつて、完全なものと同じでないのが惡いのだといふより外はない。完全になることを目的として活きるので、初めて活きるかひがある。その他の善い惡いは途中のこととせう。人生は複雑だから善い事と善い事と衝突することも多い。其の時に如何して決めるかといへば、更に高い立場から見れば決まらねばならぬ。そこで又善い事と善い事と衝突した時には、更にモツと高い立場から見れば決まらねばならぬ。さうすると結局人生の眞實の目的に一致したことが一番



善い事になるに相違ない。さうすれば佛教を信ずる者は、佛と一致するといふことを善いといふ事の最後の目標と決めるより外に決めやうがない。それだからつまり十方世界のものが佛に歸依して物を捧げるといふのは、皆が佛と一致したい／＼と思ふことであつて、それに依つて將來は人間の行ひといふものが統一されなければならぬ。これは當然のことです。それから十番目には、十方世界が通じて一佛土になるといふことでもあります。

## 通一佛土

十、通一佛土（未來理一）。これは『未來の理一』を表はすので、前からいろ／＼いつてあるから此處で詳しく言ふ必要もない。絶對の眞理といふものは一つしか無い。眞實の事はどこまで行つても眞實です。だから眞實の事が眞實だと解つた時には、東も西もありはしない。つまり未來に於ては凡ての世界が一つになる。今のところは此の娑婆世界が穢いとか、東の方が良いとか、イヤ西の方が良いとか言つて居るけれども、結局はみな眞實の道を辨へて、眞實の眞理を體得した時に於て、西もなければ東もない、此處もなければ彼處もない。通じて一つになるといふことは考へられる。それを茲に表はされて居ると謂はれて居ります。

これは古來十神力といひ來つたことを其の通りに並べて申したのでありますが、以上の意味をよく辨へた時に於て、吾々の當然感すべきことはどうしても是れは急いではいけない、併しまた懈けてはいけないといふことです。結局は一切の人間がその具有して居るところの佛性を發揮することに依つて、一步々々佛の境界に近づいて行つて、何れの世界も皆淨土になるのです。娑婆世界に生きて居る吾々には、此の娑婆が淨土になるといふ方が適切だけれども、本當のことを言へば、此處が淨土になるばかりでは無い、凡ての世界がみな淨土になつてしまふので、此處も彼處もあつたものではない。

## 至淨無土

私は聖德太子のお書きになつた法華經の義疏を讀んで、實に驚いたことを言つて居らつしやる、さすがに聖德太子だと感じました。それは『至淨無土』と言はれて居る。斯んなことも私共はボンヤリは考へて居たけれども、斯んなハッキリした言葉で言はれようとは思はなかつた。『至つて淨きは土無し』言はれて見れば成程と思ふが、どうして斯う明確に言へたものかと思つて驚いたのです。本當に淨い所になれば、限られたる國土は無い。何處といふことはない。此處だの彼處だの、東だの西だのといふことはありはしない。本當に清淨に凡ての人間の心がなつた時には、何國もみな佛様の國である。だから至つて淨きは土無し。西に求めるの東に求めるの、この娑婆世界がどうだとか、別の世界がどうだとかいふ、そんなものでは無いと言つて居られる。私共もボンヤリそんなことを考へて居つたけれども、こんな強い言葉で言はれようとは思はなかつた。だから吾々の理想はそこに置いて宜いわけです。しかしながらサウ急に行くものではない。最も愚かなことは、早い成功を求めてさま／＼な方法手段に依り、淨くない方法で宜加減に妥協的にやることで、これは最も愚な事です。成功を求めて成べく早くやらうと思ふ人が多い。成るべく大勢の人間を集めて一度に勢力を作らうとか、自分の努力の結果を早く現はさうと思ふ。是れほど愚なことはない。それでは折角淨らかなことを穢くしてしまふ。と言つて、『吾々共は何も出来ないから、よろしくお願ひ申します』といふやうな考へで、懈けて居つては濟まぬでせう。どうしても是れは懈けてはいかぬが、急いでもいかぬ。無理やりに早く成功を求めたところが、それは殆んど意味がない。斷えず努めてさうして急がず焦らず、一步一步と人々の心にあるところの佛性が發揮されて、さうして佛に近づくのを促して行くといふことが本當ではないかと感ぜられるのであります。



勇猛といふこと

私はこの頃斯ういふことを考へるのです。勇猛精進といふ言葉があるが、此の勇猛といふことを一體どう考へたら宜いか。何でも彼でも艱難を排して突進するのが勇猛だと今までは一般に解釋されて居るのですが、併し突進するばかりが勇猛ではないだらうと思ふ。ヂツと堪へて、風が吹いても雨が降つても動かずに突つ立つて居ることは非常に勇猛ではないか。それを考へなければならぬ。たゞ飛び出して行くのが勇猛精進だといふ考へは間違つて居ると思ふ。飛び出して行く必要があればならぬ。火の中水の中でも飛び込むが宜いだらう。しかし突つ立つてヂツとして居なければならぬ時があつたら、山が崩れて來ても海が荒れて來ても、ヂツとして一步も動かぬといふことが大きな勇猛でなければならぬ。勇猛といふことは必ずしも飛び出して行くといふことを意味しない。それは場合に依るでせう、時に依るでせう。兎に角動かないこと、負けないこと、それが勇猛といふことでなければならぬ。それはその場合に依り時に依つていろ／＼異ひませうが、兎にも角にも自分達は佛に成れる貴い性質を有つて居るのだから、その性質を無にしてはならない。又一切の人間が佛となるべき本性を有つて居るのだから、それを無にして置いてはならぬ。此の根本をシツカリ捉へて置けば、その方法手段に至つては、或る時は急にして宜からうし、或る時はユツクリしても宜いであらう。私の心持を去つてやつた仕事ならば、みな貴い仕事だといふやうに考へなければならぬ。今この神力品を讀んで行きますと、何だかさういふことを大に教へられるやうな氣が致します。『十方世界通達無礙なること一佛土の如し』これが法華經の行はれた本當の理想の状態である。そこに行くまでの間の道筋といふものにはいろ／＼の曲折があるだらうと思ひます。併し互ひに偽りを捨て、出鱈目をやめて、眞實に求めて眞實に努めて行きますならば、それ／＼のところにて、斯様な理想の時代の開かれるために役に立つ働きが

出來て行くのだと思はなければならぬでせう。それから少し先の方を讀みませう。

爾時佛告。上行等菩薩大衆。諸佛神力。如是無量無邊。不可思議。若我以是神力。於無量無邊。百千萬億。阿僧祇劫。爲屬累故。說此經功德。猶不能盡。

爾の時に佛、上行等の菩薩大衆に告げたまはく、諸佛の神力は是の如く無量無邊不可思議なり。若し我、是の神力を以て、無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て、屬累の爲の故に此の經の功德を説くとも、猶ほ盡すこと能はず。

佛といふものは不思議な力を具へて居るといふことは誰も能く知つて居る通りである。其の佛の言葉を以てすれば、どんな深いことでも言へるけれども、しかしその佛の不思議な力を以て言つて見ても、末の世に至つてこの法華經を弘めることの功德だけは言ひ盡すことが出來ない。これは非常に強いことを言はれたものでありますが、此の一言を以て見ましても、今日の私共の生きて居るやうなこの末の世、即ち此の淺ましい争ひに充ち、悩みに充ちて居る世の中的一切衆生を、佛が深く憐れまれて、どうか此の苦しみの底に落ちて居る人間が心から甦つて、眞實の生き方をするやうにといふことを念ぜられた、その慈悲心の深さといふものがわかるわけです。

部分と全體

此より進んで天台大師の『五重玄義』といふものを立てられた、其の根本となる一段に入るのでありますが、其の前に一つお断りをして置きたいと思ふ。物を分けて説くといふことは、結局纏めて一つにするために分け



るのですから、そこを間違へないやうに願ひたい。分けたのを見て小さく離れ、に考へてしまつてはいけない。分けるのは一つにするためです。吾々が病氣をして醫者にかゝつた時に、醫者が身からだをよく診て説明をして呉れます。『脈は斯ういふ具合で、血壓は斯うで、腸が斯うで、胃が斯うで：』と、細かく分けて説明して呉れる。それは私の身の全體を完全にしたいから細かに分けて説明して呉れるのです。それを細かい方だけに注意して、血壓が幾らだと言つては心配し、脈が幾つだと言つて脈ばかり取つて居たのでは駄目でせう。佛教の教學といふものが間違つて來るのはそれなので、初めの人は細かに分けて、それから斯ういふわけだからと言つて、信心を勧めるのです。ところが此の一つの大切な點を放つて置いて、分けた方ばかり穿鑿して行くから、いつまで経つても途中でうろついて居る。さうなれば教學といふものは信仰に禍ひするのです。分けるのは一つにするためだといふことを辨へて聽かなければいけない。それを誰が五つに分けたとか、誰が十に分けたとかいつて之に拘泥して居てはならぬ。五つとか十とかいふのは便宜のことで、時によつて五つが六つになつても差支ない。たゞ説明に都合が宜いから分けただけの話で、結局歸著するところは心一つなのです。その心一つを外にして置いて、たゞ分けた方だけをいぢつて居てはつまらない。それです。から私は、自分の言譯をするやうだが、法華經に就てお話するのに、誰でもよくやる所謂科段といふことを殆んどやらない。やつて見てもそれだけの話です。結局心の問題で、自分の心をどう見るかといふことが最後の問題です。此の段は何を明し、此の段は何を明す：と、そんなことを空で覺えたつて仕様がなない。昔檀林などではさういふことを隨分教へたものです。二つに分けて、又それを三つに分けて：斯うやつて線ばかり引いて居る。これを名づけて『蜘蛛の巢すずめ學問』といふ。何の役にも立ちはしない。

心一つが大切

決して私は自分が科段を分けぬの言譯をするのではありませぬ。それは寫して來てお話すれば譯はないけれども、そんなことは今の吾々には何にもならない。要するに心の問題です。佛様はお前の心の問題だといふことを始終言つて居られるのでありますから、そのところを間違へないやうに、結局自分の心の土臺をシツカリと立て、行けば宜いのであります。言葉ではなか／＼明かに言ひ現はせない所が多いものですから、私の説明は極めて淺薄なものでありますけれども、どうぞシツカリ自分の心に落つて、心を佛様のお心持と一緒にするやうに努めて頂きたい。結局は壽量品の『一心欲見佛』です。これより外はないのです。自分の心一つで佛を見る。佛を見るといふのは佛の御心と相觸れることです。佛のお心と自分の心と相觸れることです。結局これより外にもありはしない。あとはそこに行く順序としていろ／＼なことを言ふのであります。『一心に佛を見たまつらんと欲す』是れだけです。佛と共に住む心持になる、いつでも佛様と一緒に居るやうになる。これが出來ないから吾々は焦つて居る。いろ／＼なことをやつて、天台を引張つて來たり、傳教を引張つて來たりするけれども、要するに之が爲です。ですから細かく分けることも必要に應じてはお話を申し上げますけれども、どうぞ細かに分けるのに囚はれないで、結局一つの所に行くのだといふことを忘れないやうにして頂きたいと思ひます。餘り煩瑣になると兎角間違ひが起り易いですから、この事を豫め申上げて置きます。

以要言之。如來一切所有之法。如來一切自在神力。如來一切祕要之藏。如來一切甚深之事。皆於此經。宣示顯說。



要<sup>ちやう</sup>を以て之<sup>これ</sup>を言<sup>い</sup>はゞ、如來<sup>にちらい</sup>の一切<sup>いっさい</sup>の所有<sup>しやうゆ</sup>の法<sup>ほふ</sup>、如來<sup>にちらい</sup>の一切<sup>いっさい</sup>の自在<sup>じざい</sup>の神力<sup>じんりき</sup>、如來<sup>にちらい</sup>の一切<sup>いっさい</sup>の祕要<sup>ひやう</sup>の藏<sup>ざう</sup>、如來<sup>にちらい</sup>の一切<sup>いっさい</sup>の甚深<sup>じんじん</sup>の事<sup>じ</sup>、皆<sup>みな</sup>此<sup>こゝ</sup>の經<sup>きやう</sup>に於て宣示<sup>せんじ</sup>顯說<sup>けんせつ</sup>す。

法とは何か

此の法華經の中に説かれてあるところの大體を、一つに纏めて言ふならば斯ういふことである。先づ『如來の一切の所有の法』が此の經の中に説かれてある。此の『法』といふのは單に教といふやうな意味ではなくて、教の内容をいふのです。すなはち佛様のお覺りになつた所の絶對の理をいふのです。『法』といふ字の使ひ方に就て、前に可なり委しく申しましたから、此處では簡單にいたしますが、先づ第一には法度とか法則とかいふ意味に使ふ。第二には教法といふ意味に使ふ。法を説くとか法を弘めるとかいふ時の法は、即ち教法のことです。それから第三には其の教法の内容たる理を意味する。或は理といはずに『實在』といつても宜いが、佛が覺られたのは此の第三の意味の法です。そこで此の經を妙法蓮華經といふが、妙法蓮華經といふ時の『法』は、つまりこの三つの意味をスツカリ含んで居るものだといふことは前にも申上げた。今此處に法とあるのもたゞ教といふ意味ではない、その教の根本であるところの絶對の眞理、宇宙に實在するところのすべてのものの本性である。斯ういふやうに考へなければならぬわけでありませう。これが元となつて人の法則も立ち、人の教も説かれる。斯ういふ根柢をもつた教でなければ、吾々が身心すべてを打込んで之を信ずるといふわけには行かないでせう。その意味で此處にも『法』と言つてあります。

如來の覺られたこと一切

『如來の一切の所有の法』といふ、此の所有は『あらゆる』といふ意味です。佛様の心の中にあること全體、すなはち佛のお覺りになつた絶對の眞理。さういふものが皆この經の中には説き顯はされてあるのだといふのであります。つまり法華以前のいろ／＼な教は、所謂方便の教でありますから、如來の覺られた一切ではない。佛のお覺りになつたことの一部分は何處にも説かれてあるのだけれども、法華經に至つては如來一切の所有の法、佛様のお覺りになつたその内容の全體がスツカリ説きあらはされてあると、斯う言はれて居るのであります。それが先づ一つの條件です。

佛の神力

それから次には『如來の一切の自在の神力』とある。佛はさういふやうな絶對の理を覺つて居らつしやるから、その覺りが現はれて一切の人を濟ふところの不思議な働きとなる。それが自在の神力であります。自在といふのは、何人に對しても、如何なる場合に於ても、如何なる時代に於ても決して間違ひのないことをいふのです。佛様の有つて居らつしやる一切の自在の神力、これも此の經の中に説いてある。

佛の教化の自在なる所以

それから『如來の一切の祕要の藏』。藏とは數多いこと、澤山といふこと、即ち限りないことです。佛様は人々をお教へになるのに、此の人間は斯うやつて教へた方が宜い、斯ういふ場合には斯う導いた方が適切であるといふことを一々考へて居らつしやる。それは普通の人間には出來ないことであるが、佛は前にもいつた通り、一切の事物の眞相をスツカリ知つて居られるから、其の洪大なる智慧を以て凡ての人の心を照して見て一々適切なる教を與へられる。どんな場合にも適切な、どんな場合にも聽く者の力となるやうな教を説き得べき種が、佛の胸の中に貯へられてある。それを一切の祕要の藏といふ。佛のことを正徧知といふのも之が爲である。だからその宜しきに應じて教が説かれる。佛様は所謂諸法の實相を知り、如何なる事でも知らぬものはないのであるから、その祕要の藏に基いて、一々其の場合に應じて適切なる教を説かれる。その佛の心の中に蓄へられて居るところの一切を祕要の藏といひます。



佛の實行せられたこと

それから『如來の一切の甚深の事』。事といふのは佛様が實行なさる事をいひます。いつでも事といふのは實際の方です。事と理と相對していふので、理が現はれたものが事です。即ち事とは實行といふことです。佛様が御實行になつた事の一切が此の經の中に打明けられてあるのです。佛は口で教を説かれるだけではなない。お生れになつた時から、修行を積んで覺りを開かれて、それから久しく佛をお説きになつて御入滅になるまで、佛の身に行はれた一切の事の悉くが吾々のお手本である。吾々は佛の行はれたことを習つて行きさへすれば、凡夫から佛の境界にまで到達し得られることが請合はれて居るのであります。其の佛の身に御實行になつた所が悉く此の經の中に示されてある。それは甚深の事で、普通の人間が考へたのでは到底推し測ることの出来ないやうな左様な奥深いものです。斯ういふ事が『皆此の經に於て宣示顯説す』で、此の法華經の中に能く説き明かしてある。だから此の經をよく讀んで見ると、佛といふものを明かに知ることが出来るといふのであります。

此の經文は短い言葉であります、天台大師がこれに基いて五重玄義といふことを説いて居ります。

所有之法(妙名)

自在神力(妙用)

祕要之藏(妙體)

甚深之事(妙宗)

宣示顯説(妙教)

これは宗教の専門の學問をする者でなければ知らないでも宜いやうなことですけれども、昔から名高いこ

妙名

とですから一通り其の名前だけを申し上げます。所有の法といふのは妙名である。この『名』といふのはたゞ名前といふことではない、名といふ時には、其の名づけられるものをいふのです。例へば『妙法蓮華經』をお題目といふやうなもので、題目といふのは名前のことだけれども、題目を唱へるといふのは、名前だけを言ふことではない。名といふのは名づけられるもの、すなはち佛様の覺られた絶対の理、それを名の字で表はして居ります。それは最も奥深いものであるから、それを妙名といふ字で表はして居ります。名といふ字があるから名前だけだと思ふと大變な間違ひになる。お題目を唱へるのも唯だお經の名前を言ふのだと思ふから、『何でもかまはぬ、日に一萬遍唱へたらよい』、『三萬遍唱へたらモットよい』といふやうなことになつて、遂には鼻唄でも唄ふ心持で唱へて居る人もありますけれども、名前だけ言つたのでは何の役にも立ちません。名といふものは名づけられる所の内容をいふのです。それで佛様のお覺りになつた絶対の理、所謂所有の法は妙名であるといふのです。

妙用

それから『妙用』といふのは、不思議なはたらき。さういふやうに絶対の覺りを開いて居らつしやるから、自在の神力、即ち一切衆生を救ふ所の教を説くはたらきが具はるのです。次に『妙體』といふのは其のお説きになります事の内容です。妙體と妙名とは歸する所同じことだけれども、見方が異ふ。佛は一切衆生の爲に教を説かれる、この説かれることの内容を妙體といふ。佛はどういふことをお説きになつたか。それは實に奥深い、聽けば聽くほどだん／＼有難さが増すやうなことをお説きになる。即ち有らゆる事物の真相を説いて、吾々の迷ひを除かれるのです。其の覺られたる絶対の理が現はれて一切の事物となるのでありますから、佛の教を學ぶものは終に人生の眞の意義を知り、一切の迷ひを離れることが出来るわけです。

妙體



それから『妙宗』といふのですが、宗は手本として仰ぐことです。お釋迦様の御實行になりましたことを吾々が手本として仰いで、さうして佛様のお歩きになつた跡を一步々と踏んで行くやうに努める、それが即ち宗であります。言ひ換へれば吾々の修行の目標をいふのであります。今では禪宗とか、日蓮宗とか、眞宗とかいふと或る團體の名になつて居るが、宗といふのは本来今いふやうな意味でなければならぬ。仰いで範とするものが宗なので、たゞ理窟を覚えるのが宗ではない、又たゞ儀式をやるのが宗ではない。どうもこの頃では仰いで範として行ふといふことは宜い加減にして置いて、或る型ばかりを重んずるやうになつたが、それはまことに浅いものです。宗とは仰いで範として實行する事柄をいふのです。さうして以上のことを、この經に於て宣示顯説してあるといふのは即ち『妙教』であります。これは佛の御心の全體が形にあらはれたものであります。佛の覺られた所を此の通り言葉で示されたのが即ち教であります。

この五つが大事であるといふので、天台大師はこれに五重玄義といふ語を使つて居る。これは宗學の方で申すとなか／＼面倒な問題で、一々詳しく説明すれば随分手間を取ることでありませうけれども、吾々實行のために此の經を學ぶ者としては、大體これだけのことで宜からうかと思ひます。要するに五つに分けて見ても六つに分けて見ても、歸着するところは一つで、此の經はこの前言うたやうに、佛様がお覺りになつたことを打明けて説かれたので、吾々が此の佛様の眞實の教を學ぶことに依つて佛と一つになつて行く。斯ういふことが主要の事でありませう。宗教の極致は全くそれより外にない。凡夫である吾々がだん／＼佛に近づいて、結局佛と一つになつて行くといふことである。又吾々がお經を讀んで見ても、或は人の話を聞いて見ても、或は題目を唱へるといふやうな修行をやつて見ても、その時の心持がどんなであつたら最も良いかと

いへば、即ち前に申した『見佛』であつて、佛とともにある心持、本當の宗教生活はこれではなければならぬ。たゞ佛様の教の理窟が深遠だとか、お經の文句が面白いとか思つて居る間はまだ本ものではない、本當は見佛です。佛と相接して居る心持、佛とともにある心持、それが本當の宗教生活です。さうなりたいと思つてみな骨折つて居るのだといふことを壽量品の中に、『一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まざ』と言つてある。これが宗教生活の極致です。しかしなか／＼容易にさうなれるものではないので、私も法華經の講釋などはして居るけれども、なか／＼佛と共に居るといふ心持は客易に起りはしない。『これは面白い理窟があるナ』、『成るほどうまいことを言つてあるナ』と感ずることはあつても、實はそれではまだ／＼遠いのです。本當に佛と共に居るやうな心持、それが本當の宗教生活でありませう。さうなるのが根本であります。それを分けて言へば斯ういふやうにも分けられるといふのです。

前の段の終りにも申しましたが、分けるのは幾ら分けても宜いが、分けるのはつまり一つものを捉へるために分けるのだから、分けた方に囚はれてしまつては一向役に立たぬことになる。料理の獻立ばかり調べて居て實際食べないやうな事では仕方がない。『吸物は何で、刺身は何で……』と、いくら精しく知つて居ても、食べなければ何にもならぬ。腹をへらして獻立の評議ばかりして居たのでは始まらない。併しよくさういふ事がある。宗教はそれではいかぬ。それで今茲に説かれることは佛のお心持を打明けられたのであるから、これを深く信じて實行するやうにするのが何より大切であります。それだからその次に、

是故汝等。於如來滅後。應當一心。受持讀誦。解說書寫。如說修行。



是の故に汝等、如來の滅後に於て、應當に一心に受持、讀誦、解説、書寫して、説の如く修行すべし。

一心に修行

斯うハッキリ約めて説いてある。斯ういふわけであるから佛様の仰しやつた通り修行しなければいけない。その修行するには、讀誦するとか、人のために説くとか、或は書き寫すとかいふやうなことをやるけれども、要するにそれは修行の爲である。自分の身に實行して、凡夫の境界から一步でも二歩でも佛の境界に近づき得るやうに努めて、力を打込んで行くといふことを主にしなければならぬ。斯う言はれて居るのであります。『一心に受持、讀誦、解説、書寫』で、特に一心にと言つてある。そんな事は固よりわかりきつたことだけれども、世間で佛敎を説いたり弘めたりして居る人の多くは一心でない、他の事のために説いて居る。斯ういふ事を言つたら人が感心するだらうとか、斯う言つたら自分の宗旨が繁昌するだらうとか、そんなことでやつて居るのは一心にはない。飛んでもない料簡で、讀誦し、解説し、書寫しても役には立たぬ。それはいかぬ、必ず一心にやれ、他の心持を雜ぜないでやれと、斯ういふことを言はれて居るのであります。さういふやうにして本當に心に信じ、身に行ふといふ人がありますれば、末の世の險惡極まる時代に於ても此の敎が弘まつて行くに違ひないのであります。

所在國土。若有受持讀誦。解説書寫。如説修行。若經卷所住之處。若於園中。若於林中。若於樹下。若於僧房。若白衣舍。若在殿堂。若山谷曠野。是中皆應起塔供養。

所在の國土に、若は受持、讀誦、解説、書寫して、説の如く修行すること有らん。若は經卷所住之處、若は園中に於ても、若は林中に於ても、若は樹下に於ても、若は僧房に於ても、若は白衣の舍に於ても、若は殿堂に在りても、若は山谷曠野にても、是の中に皆應に塔を起て供養すべし。

方々の場所に、若し受持し讀誦し解説し書寫して、説の如く修行するものがあつた所には、或は又經卷所在の處にはとありますが、この『經卷』といふのは即ち敎のことです。法華經の敎がそこに弘まつて居る所には、園の中でも林の中でも、或は樹の下でも、或は僧房といつて出家の人の居る所でも、或は白衣の舍とありますが、白衣といふのは在家の人のことです。或は殿堂にあつても、或は山や谷や廣い野原であつても、其處にこの敎を信じて實行する者があり、又この敎の廢れずに居る所には應に塔を起て供養すべきである。

敎を弘むる方法は一様ならず

こゝは唯だ如何なる所でもといふ意であるが、それを餘りに細かく言ひ過ぎてあるやうに見えますけれども、敎を學び敎を弘める方法は決して一種ではないのでありますから、その時と場合に應じ、その人の性質に應じて種々の方法があつて宜いわけです。山の中に入つて一人で修行したのでは世の中のためにならない、是非とも世の中に出て敎を弘めると、斯ういふことが頻りに言はれて居る。殊に日蓮宗とか法華宗とかの人は多くさう言つて居る。それは大體に於てさうですが、時あつて山の中に引込んで修行することがあつても、やはり世の中の人を濟ふ心持でやつて居れば、自ら世の中を動かして居るのである、いつでも街頭へ立つて敎を説かなければならぬときめる必要は少しもない。それはあまり偏つてはいけないと思ふ。



林の中でも宜い、森の中でも宜い、街の中でも宜い。何處でも宜いとチャンと佛様は言つて居らつしやる。それは其の場合に依るでせう。鎌倉の大町小町の辻で説法したのも日蓮上人なり、身延の山に引込んで弟子を教育したのも日蓮上人であつて、世の中を救ふといふことに變りはない。身延の山に引込んだのも世を救ふべき人物を養成する爲だと言つて居られるのだから、志はやはり國の爲です。『街頭へ出て説かなければ國の爲にならぬ…』そんな理窟は決してない。そんな風に狭く考へることは非常に教を傷けることになるだらうと私は思ふ。時あつてか自分で引込んで、モウ誰にも會はないで十日でも二十日でもお經を讀んで暮すといふことも、それもやはり世の中の爲、人の爲になつて居るでせう。さうでなければ自分が空虚で人を教へようとしても教へられるものではない。たゞ人を教へようといふことばかり考へて、自分を空虚にして置くならば自分の爲にもならず、人の爲にもなりはしない。そこは餘程考へなければならぬ。

斯ういふ經文はよく讀んで味ふべきで、此處に斯ういふことが説かれてゐるのは實に結構なことだと思ひます。森の中でも林の中でも宜い、街でも宜い、王様の御殿でも或はそこらの小屋でも、何處でも宜い。本當に教を信じて修行する場所があるなら何處でも宜い。これは實に有難いことだと思つて塔を建てるとある。これは何も唯だ塔を建てることを勧められたのではありませぬ。その教を有難いと思つて永く記念することが大切だといふ意味であります。

所以者何。當知是處。即是道場。諸佛於此。得阿耨多羅三藐三菩提。諸佛於此。轉於法輪。諸佛於此。而般涅槃。

何以は何ん。當に知るべし、是の處は即ち是れ道場なり。諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、諸佛此に於て法輪を轉じ、諸佛此に於て般涅槃したまふと。

眞の道場

何故ならばこの法華經が信ぜられ、又説かれて居る所はそれは道場、すなはち佛の覺りを開かれた場所と同じである。佛の覺りを開かれた道場は佛陀迦耶の菩提樹の下だけれども、菩提樹の下ばかりが道場ではない。いつでもこの法華經の中には佛の魂が籠つて居るのであるから、その佛の魂を籠められた教を眞に學んで眞に信じようと努める場所は何れも道場である。それはやはりお釋迦様のお覺りになつた場所と同じ場所と心得てよろしいと、斯ういふのであります。但しそれは前にあるやうに、一心に讀誦し解説し書寫する場所のことですから、一心でなくて宜い加減な料簡で物を軽く考へて、口だけで法華經を讀んで『此の所は道場なり』と言つて威張つてもそれはいけない。經典を自分に都合の宜い事に使つて居て、こゝに『是の處は即ち是れ道場』と書いてあるではないかといつてもそれはいけない。一心に信ずる所でなければ道場ではない。是れは前後をよく注意して讀むべきであります。

諸佛も此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得られるとあります。お釋迦様ばかりではない、有らゆる佛様の教といふものは結局一つに歸するのだから、この法華經の本當に信じられる所は凡ての佛様が覺りをお開きになつた場所だと心得てよろしい。他にさういふ場所はない。又『諸佛此に於て法輪を轉じ』、即ち多くの佛が教を説かれ、又『諸佛此に於て般涅槃したまふ』。多くの佛が最後まで此處に居られると考へてよい。約めて言へば此の教の榮える所がすなはち佛様の居らつしやる所である。だから佛の居らつしやる所を他に探さず

諸佛の住する所



要はない。この法華經が弘まつて、法華經が本當に一心に信じられる所、そこが佛の居らつしやる所であると思ふべきである。斯ういふことを説かれまして、更に偈を以て説かれます。

爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言。諸佛救世者。住於大神通。爲悅衆生故。現無量神力。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説きて言はく、諸佛救世者、大神通に住して、衆生を悦ばしめんが爲の故に、無量の神力を現じたまふ。

この偈は大體前のことが繰返されてありますけれども、又異つた意味の所もありますから丁寧に讀んで行きます。『諸佛』といふのは釋尊をはじめ十方世界の佛、この靈鷲山に集つて居る佛様のことを申します。その諸佛はみな救世者、世の中の人を救ふところの力を有つて居られるものである。その佛様は不思議な神通力を有つて居らつしやつて、『衆生を悦ばしめんがために無量の神力を現じたまふ』のである。何故衆生を悦ばせるかといへば、此の教に依つて如何なる凡夫でも佛に成れるといふことがわかる、又今は汚い穢土でも終には淨土になるといふことがわかつたのでありますから、其のわかつた人の悦びほど大きな悦びは無い筈です。人々に眞實の悦びを與へるといふことの中に、お前は佛に成れるぞ、この娑婆世界が淨土になれるぞといふことを教へられる、これより以上の大きい悦びは無いわけせう。だから神通力を現はしたのはそれが爲である、人々に眞實の悦びを與へるために不思議の力を現はしたのだと、斯ういふのであります。

最大の悦び

舌相至梵天。身放無數光。爲求佛道者。現此希有事。

舌相梵天に至り、身より無數の光を放ちて、佛道を求むる者の爲に、此の希有の事を現じたまふ。

佛道を求むる者

廣長舌を出してそれが梵天に至り、身より無量の光を放つた。これは前にあつたことを繰返したのです。それは何の爲かといへば、佛道を求むる者の爲である。大乘を學ぶ者は皆佛道を求むる者でなければならぬ。たゞ宜い加減な事ではいけない。佛様の御實行になつたことを自分も實行したいといふ心持の人、それが佛道を求むる者である。自分が大きな智慧を具へて、一切の人を濟ふやうな働きをしたい、斯ういふことを求めて居る者が菩薩道を實行するのです。イキナリ佛様には成れない。菩薩道を行ずといふことは佛道を求めるといふと同じことです。吾々は凡夫だからイキナリ佛道は行ぜられない、菩薩道を行ずる所から行かなければならぬ。菩薩としてどういふことを行すべきかといふことは、法華經を初めいろ／＼な經典に説いてあります。その菩薩道を行ずるのです。その菩薩道を行ずることが即ち佛道を求むることです。結局佛の境界に到達して一切の人を濟ふやうになりたいと、斯う思つて勵むのです。さういふ人のために、『此の希有の事を現じたまふ』。不思議な神變を現はして、此の穢土が淨土になるといふことをよく教へられたのです。

諸佛警欬聲。及彈指之聲。周聞十方國。地皆六種動。

諸佛警欬の聲、及び彈指の聲、周く十方の國に聞えて、地皆六種に動ず。



これは前にあつたことですから説明は略しませう。此の如き神力の現はれたのは何故であるかといふに、その理由は次に説かれてあります。

以佛滅度後。能持是經故。諸佛皆歡喜。現無量神力。

佛滅度の後に、能く是の經を持たんを以ての故に、諸佛皆歡喜して、無量の神力を現したまふ。

それは佛が亡くなつて後、世の中が末になつて、所謂末法の世の險惡な恐ろしい時代に、必ずや此の法華經を持つて、眞暗闇な世の中を明るくするところの頼もしい人が出て來るといふことを佛様は知つてゐらつしやるから、それで佛様は喜んで無量の神力を現はし、必ず末の世に至つてこの教は弘まるぞ、又この教を弘めるために力を盡す者の功德は限りないぞといふことを示されたのだといふのであります。

屬累是經故。讚美受持者。於無量劫中。猶故不能盡。是人之功德。無邊無有窮。如十方虛空。不可得邊際。

是の經を屬累せんが故に、受持の者を讚美すること、無量劫の中に於てすとも、猶故盡すこと能はじ。是の人の功德は、無邊にして窮りあること無けん。十方の虚空の邊際を得べからざるが如し。

是の經を屬累するといふのは、どうぞお前達、末の世に至つて此の經を弘めて呉れといふことを頼むのです。『屬』は頼むといふこと、所謂囑託するのです。『累』は面倒をかける、煩はすといふ意味です。面倒だら

努力して弘  
めよとの佛  
命

うけれども、骨が折れるだらうけれどもやつて呉れと、斯ういつて頼むのです。佛様の方から面倒だらうけれども頼むと、斯う仰しやるのだから、吾々もその積りにならなくてはいかぬ。宜い加減に懈けて居たのでは濟まない。佛は決して懈けて居ても弘まるとは言はれない。骨が折れる、非常に難かしいことだ。けれどもそれに依つて世の中が直るのだ。一つ力を入れてやつて呉れ。斯う言つて屬累されるのですから、それを屬累されながら懈けて居たり、自分一身の利益を計つたり、綺麗な着物を着たり大きな家を建てたりするやうな事ばかり考へて居たのでは、何のための屬累だかチットモわからない。實に濟まない事です。佛様の方から面倒だけれどもやつて呉れと、斯う言はれるのですから、その氣にならなければ濟まない。斯ういつて屬累せんが故に受持者を讚美したまふ。これはモウ非常に骨の折れることであるから、その骨の折れることを思ひ切つてやるのは非常に貴い事だといつてお讚めになる。それは如何に永い間讚めても讚め盡せないほど貴いことである。この人の功德は無邊にして窮りあることなく、宛も大空の境がないと同じやうである。末の世に至つて斯ういふ貴い教を弘める人のその功德は、實に限りないものだといふことです。

能持是經者。則爲已見我。亦見多寶佛。及諸分身者。又見我今日。教化諸菩薩。

能く是の經を持たん者は、則ち爲れ已に我を見、亦多寶佛、及び諸の分身の者を見、又我が今日、教化せる諸の菩薩を見るなり。



佛と共に在るといふ自覺

この『見る』といふのは心が通つて居るといふことです。本當に法華經を自分が信じて、更に之を世に弘めて一切の人間を濟はうといふ心持で努めて居る人は、お釋迦様とも心が通つて居り、多寶佛や十方世界の佛様とか、いろ／＼の菩薩とも心が通つて居るのであるといふのです。これに基いて、日蓮上人が身延に居られて書かれた『撰時鈔』といふ御遺文の一番終に、『釋迦牟尼佛や多寶佛や、いろ／＼な佛様が自分と一緒に居て下さらなければ、自分は片時でも此の苦しみに堪へることは出来ないであらう』と言つて居られるのは、實際此の所を能く考へられたのでありませう。本當に自分は佛様と一緒に居るのだ。それでなければとても自分の力一つで以て六十年の間有らゆる困難に耐へて、或は佐渡へ流されても凍え死にもせず、龍の口で斬られさうになつても少しも驚かず、さうして無事に身延に入つて、心を安んじて弟子を集めて教を説くといふやうなことは出来るものではない。自分の心が佛様に通つて居るから出来るのだと感謝して居られるのであります。それは本當にお經を身延のやうな所で靜かに讀んで居られると、さういふ心持になることだらうと思ひます。

能持是經者。令我及分身。滅度多寶佛。一切皆歡喜。十方現在佛。并過去未來。亦見亦供養。亦令得歡喜。

能く是の經を持たん者は、我及び分身、滅度の多寶佛をして、一切皆歡喜せしめ、十方現在の佛、並びに過去未來、亦は見亦は供養し、亦は歡喜することを得しめん。

この經を持つて世に弘めて呉れる者があれば自分が喜ぶのは勿論であるが、多寶佛や有らゆる佛がみな喜ぶ。さうして本當に法華經を信じてそれを實行する者があれば、十方の有らゆる佛を見ることが出来る。又現在、過去、未來の佛といふものがみなその人の前に現はれる。現はれるといふのは目に見えるのではない。其の心が佛に通ひ、其の人の胸の中に佛が現はれて、さうして其の人をして、非常な喜びを感じしむるのである。

諸佛坐道場。所得祕要法。能持是經者。不久亦當得。

諸佛の道場に坐して、得たまへる所の祕要の法、能く是の經を持たん者は、久しからずして亦當に得べし。

誰でも初めから佛には成れないけれども、此の法華經を本當に持つて、一切衆生を濟はうとして力を盡して居る者は、だん／＼自分の心の迷ひが無くなつて来るから、終には有らゆる佛が道場で覺つたところの、その深い覺りを自分の覺りとする事が出来る。これほど貴いことは無い。

能持是經者。於諸法之義。名字及言辭。樂說無窮盡。如風於空中。一切無障礙。

能く是の經を持たん者は、諸法の義、名字及び言辭に於て、樂說窮盡無きこと、風の空中に於て、一切障礙無きが如くならん。



教を説くに  
無障礙

本當にこの法華經を持ち、心に之を信じて身に之を實行するやうな人があれば、その人は人に對して教を説くのに、必が自由自在に説ける。いろ／＼な教の深い意味、或はその言葉とか、文字とかいふやうなものに就ても、みな相手の心によく深く入ることの出来るやうに、自由自在に説いて、少しも障りが無いであらう。

これは何も上手に喋るといふことではない。一體能く説けないといふのは、つまり深く知らないからです。吾々は始終さう思ふのですが、自分一人で本を讀んで居ると大分わかつたやうな氣がするけれども、人の前に立つて説いて見るとどうも充分には説けない。充分に説けないといふのは、本當に知らないからで、本當に知つて居ることなら説けない筈はない。『二と三と加へて幾つか』と問はれて、『五だ』と返事の出来ない人はない。それを『チョット待つて呉れ』と言ふ人は、全くわからない人です。『いろはにの次は何だ』、『ほへとだ』といふやうに、本當に自分のものになつて居れば、自由自在に口に出て來なければならぬ筈です。それを話しくいとかが、説きにくいとか、どうもうまく言へないといふのは結局わからないからで、本當にわかつて居たら説ける筈のものでせう。自分達も本當にわからぬから、時々どう言つていゝか困るけれども、困るといふのはまだ本當にわかつて居るのではない。ですから本當に法華經を信じて自分のものになつて居れば、その中の意味の細かいことでも、如何なる言葉を用ひ如何なる説明をし、如何に説いたならば適切かといふことは、それは一切自由自在でチツとも障りが無い。チヨウド風が天空を吹いて居て、風を遮るものが無いと同じことで、自由自在に教を説くことが出来る、斯う言はれるのです。それは確かにさうだらうと思ふ。まだ／＼今の吾々共にはわからないことですが、それは略々想像がつきます。

於如來滅後。知佛所說經。因緣及次第。隨義如實說。如日月光明。能除諸

幽冥。斯人行世間。能滅衆生闇。教無量菩薩。畢竟住一乘。

如來の滅後に於て、佛の所説の經の、因緣及び次第を知りて、義に隨ひて實の如く説かん。日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟して一乘に住せしめん。

此の間に五つの事柄が含まれて居りまして、日蓮上人はこの文を深く案ずることに依つて教、機、時、國、序の所謂『五綱』といふものを思ひつかれたといふことであります。よく考へて見ると、こんな短い言葉の中にスツカリさういふ事が含まれて居るやうであります。

日蓮上人の教は大體二つの部門に分れて居て、その初めの方の部分は法華經を信ずる者の爲の準備的の教。その後の半分は法華經を中心としての本論のやうなものになるのであります。その法華經を信じなければならぬといふことを明にするために五つの簡條を分けて説かれたのが所謂五綱であります。今ではこれを『教機時國序』と言つて居りますが、この『序』は後に至つて意譯したので、日蓮上人御自身の書かれたものには『教法流布前後』とあります。日蓮上人は體裁などを整へるといふことは一向かまはないで、たゞ思ふ通りを言はれたのでありますから、教、機、時、國、教法流布前後と五つにして言つて居られる。ところが後の世になつて教學といふものが出來てから、何でも體裁を整へるといふ所から、教、機、時、國と言つ

日蓮上人の  
五綱



て、その次に教法流布前後ではどうも調子が悪いといふので、これを序の字に直して、教機時國序といふやうになつたのです。

## 第一、教

そこで五綱の中の第一は『教』。佛は御一代五十年の間いろ／＼な教をお説きになつたが、その教の中でも一番魂を打込んで居られるところの部分はどこかといふことを、ハッキリ知らなければならぬ、それが即ち『教』であります。

これは附だりに申上げますが、法華經が一番大事だと言はれながら、日蓮上人の御書を讀むと、法華經以外の經文などを自由自在に引いてあるが、これは一體どういふ譯だといふことを疑ふ人が随分ある。吾々の友達でもさういふことを言ふ人があります。法華經以外に何も要らないと言つて置きながら、他の經を引張り出すのはどういふ譯だといふ疑ひです。それは一應尤もですが、法華經以外のものはいらぬといふのは、それは自分の心の中心を決める時のことです。家の中の事に喩へて見れば、兄さんも姉さんも尊敬しなければならぬ、お祖父さんもお母さんも尊敬しなければならぬが、併し家の主人は父親である。佛の御一代の教の中に於て何處を中心として、何處を眼目として、何處を目當てにして吾々の信仰を決めたら宜いかと斯ういふ時には、その教の中の一番決定的のものを選ばなければならぬ。それは法華經より外にない。それで『教』に就ては、法華經の中の教がそれだと言はれる。しかしながら、その中心が定まれば、その信仰を助けるために、或はその教を説明し、或はそれを證するためには、有らゆるお經の言葉も自由自在に引いたところが一向かまはない譯である。又その爲に多くの經を讀むことも結構なことであります。それで教の中に於て釋尊の一番魂を籠められたのはどれか、又末の世に於て信仰の中心となるべきものはどれかと、斯ういふ

## 第二、機

時には、その教は法華經の教だと言はれるのであります。

その次に『機』といふのは機根で、教を學ぶ者の心持であります。これが又いろ／＼あるわけです。例へば程度の極く低い者に非常に高い教を説いたつて役に立たない。又非常に深いものを求めて居る者に、つまらない教を與へれば、馬鹿にして受けつけない。凡て教を弘めるのには、教を受ける人の機根をよく考へなければいけないといふのであります。

それなら今のやうな末法の世、佛の亡くなつた後の極めて複雑な世に於ての機根は低いか高いか。これが日蓮上人と念佛を唱へる人々との意見の岐れ目であつて、念佛宗の方では末法の人の機根は低いと言ふ。世が末になると萬事が忙しくなるから、なか／＼教ナンといふことばかり考へて居られない。即ち教を聽く人の機根が低いのである。一般の人の機根の低い時には、法華經も結構だし華嚴經も結構だが、そんな難かしいものを弘めても弘まるものではない。だから一般の人の機根に適するやうな、簡單明瞭な教で行かなければならぬといふのが、念佛を弘める人の着眼點です。しかし日蓮上人はさうは思はない。成るほど世の中が忙しいから一般の機根が低くなつたやうに見えるけれども、世の中が複雑になつて來ると、人間は簡易な、宜い加減な教では承知が出来ないといふのです。これは非常に良い着眼點だと思ふ。

今の世は正しくさうです。宜い加減なことでは誰でも承知が出来ない。今の若い人などを捉へて話をしてみると、宗教のことなどはまるでわかりはしない。けれども、なか／＼批評は鋭い。『お前達朝早く起きて神様佛様を禮拜して、それから庭に水を打つて……』と言ふと、『なんだ馬鹿々々しい』と横を向いてしまふ。『忠義が大事だ、孝行が大事だ』といふと、『そんなことは昔からわかつて居る』と撥ねつけてしまふ。凡て



批判的の氣風

の人が皆なか／＼批判的になつて居る。確かりわかりはしないが、批判的になつて居るから、宜い加減なものでは受けつけない。だからどんな疑問を持つて來ても、どんな疑惑にぶつかつても、サラ／＼と解決の出來るやうな深味を持つて居る教でない、斯ういふ複雑な時代の若い人などを相手にして説くことは出來ない。何事でも深みのないものはみな撥ねつけてしまふ。それだから末の世になつて教を弘める者は、世間がみな非常に批判的になつて居るといふことを考へなければならぬ。どんな問題を持つて來ても解決の與へられるやうな根柢を有つて居る教でない、末の世に弘まることは難かしいのであります。それだから末の世になつて機根が下ると思つて低い教などを説いて居ても、本當に受けつけられないぞといふことです。

眞の愛國者

それからモウ一つの理由は、世の中が苦しくなつて來ると心から世を憂へる人が出て來る。これは無論少數であります。千萬人中に一人です。けれども心から世を憂へて、世の中がこれではならぬ、何とかしなければならぬといふ人が出て來る。大多數はまア享樂主義か何かで居るけれども、中には深く考へる人が出て來る。斯ういふ人は眞劍に教を求め、さういふ人は今までの行掛りは一切捨て、眞實なる教を求め、さういふ人は自分の家が念佛宗だとか、日蓮宗だとかいふ一切の行掛りを捨て、しまつて、心の底から最もよい教を求める。さういふ人が極く少數ではあるが出て來るのであります。さういふ人の求めに應ずべき教といふものは、佛が魂を打籠められた教でなければならぬ。求める方が眞劍でありますから、決して宜い加減な教では満足しない。その意味で、法華經を求める機根の者が、大勢ではないが末の世に至つて必ず出て來る。それは無論最初に於ては少數であります。初めから頼もしい人が多くあるものではない。けれどもそれは本當に貴い人です。心から教を求める人は貴い人です。その貴い人の求め得た信仰が元になつて、いつか

知らぬ間に、まつ暗な世の中がだん／＼明るくなつて來る。だから經の中にもその本當に心から教を求めて居る人のことを繰返し／＼讀めてある。たゞ出鱈目に信じて居る人を讀めて居るのではない。これは如何にも難かしいことであるから、六難九易といつて、いろ／＼な難かしい事を澤山列べて、これは法華經を信ずることに比べればまだ／＼易しいといふ意味のことが言はれて居る。本當に難かしいことです。しかしその少數の人の力が次第に大きな力になつて、險惡な世の中が終にひつくり返つて良くなる。斯ういふことを言はれるので、これが『機』についての説明であります。だから末の世に至つて、急に大勢信する者が出て來ないでもよろしいから、眞實の教を求むる所の、本當に深い機根のある人のために此經を説いて、よく之を導かなければならぬ。さうでなければ、世の中は決して濟はれない、と斯ういふのであります。『どうもこれはチト難かしさうだから易くしよう』といふので、成るべく易くして成るべく聽く人の多くなるやうに……そんなことばかり考へて居てはとも駄目です。

第三、時

それから『時』は時節で、凡ての物には言ふまでもなく時節があるから、時節に應じて教といふものも説かなければならぬ。今の世は如何なる時節であるかといふことをよく考へて、之に適應するやうに教へなければならぬ。斯ういふのが所謂『時』です。

第四、國

それから『國』といふのは、國にはそれ／＼國民性といふものがあるのを考へることです。深い教の入りないやうな國民性を有つた國民もあるし、又非常に深い教でなければならぬ國民性をもつた國民もある。日本の國は聖德太子が法華經をお弘めになつて以來法華經に深い縁がある。但し世の中はいろ／＼變るから日蓮上人當時の日本は淺ましい、つまらない者のみ多かつたが、本來の日本人といふものはつまらないもの



ではない。法華經のやうな深い教に縁のある國民である。それ故に今聽く人が少いからと言つて法華經を説くことを止めてしまつてはいけない。如何に難かしくても此の經は本當に日本の國民に縁があるぞ、本當に弘めなければならぬぞといふことを言はれてるのであります。

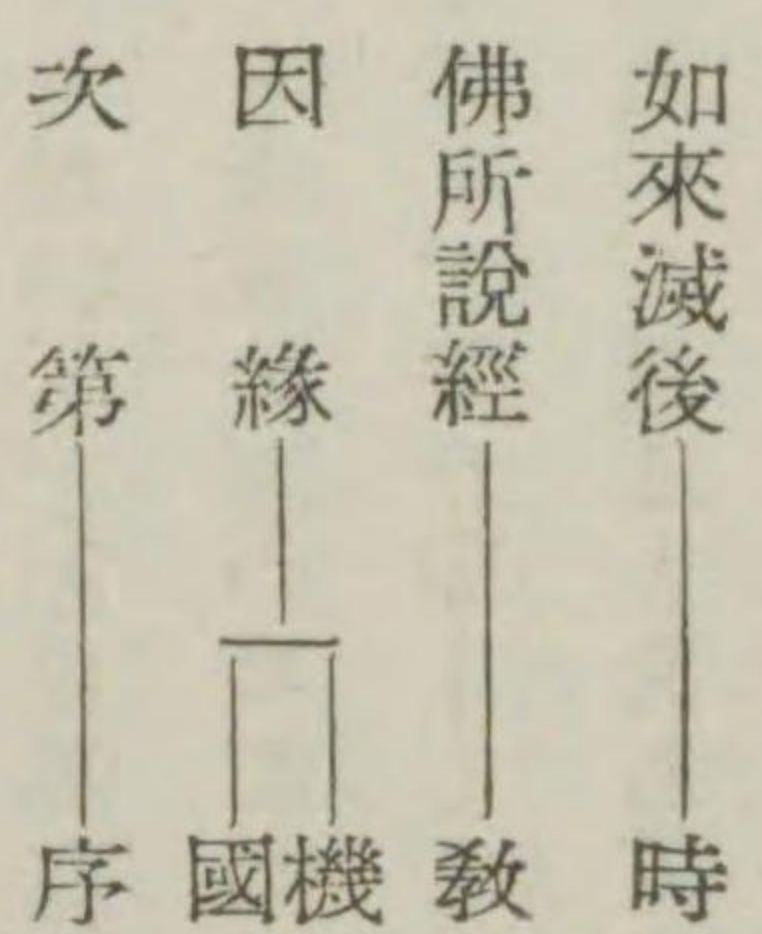
第五、序

それから『序』といふのは、日蓮聖人御自身の言葉では『教法流布の前後』であります。これは非常に考へなければならぬことであります。何でも後戻りといふことは決して出来ないものです。善い教の弘まつたあとで、悪い教を弘めてもそれは弘まらぬ。先へ先へと行くのが自然の勢で、後戻りといふことは決して出来るものではない。だから一度大乘の教が弘まつたならば、そこに小乗の教を弘めようとしてもそれは順序が違ふ。そんなものは決して弘まるものではない。一時は榮えるだらうけれども、決して永く榮えるものではないといふことをスツカリ見極められたのが、所謂『教法流布の前後』であります。

尙ほこの事はまた詳しく申上げる機會もあらうと思ひますが、大體日蓮上人が五綱といふものを立てられましたのはさういふ意味で、あらゆる佛教を批判して、さうして今の世に適する、又今より後の世に適するものはどれだといふことを選ぶための標準を示されたのが所謂五綱といふものであります。それだから日蓮上人は決して無理をしないのです。これで納得が行くかどうか、納得が行つたら法華經を信じたがよからう。と斯ういふのであつて、決して無理を言つて強るのではないのであります。日蓮上人は随分激しい言葉を使つて、聲を勵まして説かれるから、高壓的に説かれたやうに解する人もあるけれども、日蓮上人の説かれたものを見ると決してさうではない。吾々の心に入るやうに言つてある。

此の日蓮上人の五綱といふことは、神力品の『如來の滅後……』といふ所に能く合ふのであります。すな

はち、



『如來の滅後に』といふのは時である。それから『佛の説く所の經』とは、すなはち佛の教である。それからその教の弘まつて來る『因緣』とあるが、因緣とは今までのその教の弘まつた状態であります。その因緣は如何なる人に、如何なる場所で説いたかといふことです。から、機と國とに分れる。どんな人がどう信じたか、その結果どんな國にどう弘まつたか、これが即ち因緣であります。ですから因緣を二つにして、聽く人の程度と弘まつた國の様子といふ風に分けて考へられる。それから『次第』といふのは今申したやうに前後の順序次第です。さういふことをスツカリ知らなければ説けない。たゞ出鱈目に教を説いても役に立たぬ。如來の滅後に於て、佛の所説の教の因緣、すなはち如何なる人にどう信じられ、如何なる國にどんなに弘まつたかといふことをよく知つて、それからその次第、即ち初めにどんな教が説かれたか、その次にはどんな教が説かれたかといふ次第をよく知つて説くべきです。

さうして『義に隨ひて實の如く説かん』といふことが大切です。自分の勝手に混せてはいかぬ。佛様の眞實の意に隨つて、佛様の御心持の通りに説かなければならぬ。どうも昔から教を説くといふ場合には、いろいろなもの混ざると見えます。だから始終斯ういふ風に戒めてあるのでせう。斯うやると早く人が信ずる

眞の教を説く人



だらうとか、斯うやると自分に都合が宜からうとかいふので、ツヒ誤つた思想が混つてしまふ。純粹なものはない。それを充分戒めなければならぬのです。

義に随つて實の如くに説くならば、それが本當に教を説く人であつて、さういふ人は『日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く』である。日月の光が出ると暗闇がなくなるやうに、この人は自分の私の心持を捨て、佛の御心持を自分の心持として法華經を説くのであるから、斯ういふ人は『世間に行じて能く衆生の闇を滅し』といふ結果が得られる。大勢の人間の心の闇を滅し、其の心の迷ひを取除いてやる事が出来る。さうして能く大乘の教を世に弘める。即ち佛様の魂を打込んだその教を弘めるのでありますから、『無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん』とある。これは前に『聲聞の弟子無し』と方便品にあるのに照應して居るのです。佛教を信じて居る者はみな菩薩でなければならぬ、大乘を學ぶ者でなければならぬ。それは初め小乗の方の低い教を學んで居る者もあるけれども、それで終るものでなくして、低い方の教を學ぶのは、更に進んで深い教を學ぶべき準備であり、階梯である。だから小乗の教を習つてそれで止めてしまつたのは、折角佛の教を習つた甲斐はない。佛様が弟子を見られた時に、これは低い方で止めて置かうと思ふ弟子は一人もない。どんな馬鹿な人間でも、どんなつまらぬ者でも、今は此者はつまらぬ者だが、だん／＼教へて行くと大乘の深い教がわかつて、一番終ひには佛と同じに成れると、斯ういふ見込を立て、教へて居られるのであります。

## 師たるの道

人を教へる者はさうあるべきでせう。縁あつて自分の教を聴くのですから、此者は宜い加減にして置けとか、此者は突き放してしまへとかいふことはあるべきものではないのです。この頃の學校のやうに、學生が何か間違ひをやつて學校に都合が悪いと、『右の者本校に關係無之候』とやるのは實に怪しからぬ話です。關係無之どころか、昨日まで關係が確かに有つた。それを都合が悪いと直きに放り出して關係無之といふ。實に淺ましい言ひ方であります。左様なことで教育が出来るものではない。佛様はみな佛にしてやらう、途中で突き放しはしない、低い方で止めさせはしないといふことを言つて居られます。斯くあつてこそ眞に人を教へ導くことが出来るのであります。

## 一乘に住す

ですから聲聞や緣覺といふやうなものは、それは皆途中であつて、結局みな所謂菩薩の道を行じ、大乘を信ずるものでなければならぬ。それで末の世に法華經を弘める者があれば、大乘の修行をして行く者がだんだん出来て来て、數限りない大勢の人々をして畢竟して一乘に住せしめる。一乘に住すといふのは己れを佛にし、人を佛にする其の教に、スツカリ自分の心を打込んで修行することです。己れを佛にし人を佛にする教、それが即ち一乘です。自分が佛に成らなければ仕方がない。又人を佛にしようと思つて教へるのでなければ本當の教へ方ではない。そこまでの決心がつかなければ、要するに信仰するといふことは戯れ事になつてしまふ。少しばかりものがわかつたから、是れで宜いといふのは、それは要するに佛を信ぜぬ人です。佛様の方で『我と等しくして異ること無からしめん』と言つてゐらつしやるのに、自分の方で、佛に成らぬでもよろしうございますと言ふ。そんな人には本當の信心といふものはありはしない。是非とも己れを佛にし、人を佛にしなければならぬ。それが即ち一乘であります。だから骨が折れるぞといふことを繰返してある。骨が折れるのがいやなら、初めから佛法を學ばぬ方が宜い。大變亂暴なことを言ふやうだけれども、人間の永遠の生命の問題を解決するのですから、骨の折れるのは覺悟しなければならぬ。そこで本當に法華經を末



の世に弘めて行くといふ人があれば、『無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん』と言はれたのです。

是故有智者。聞此功德利。於我滅度後。應受持斯經。是人於佛道。決定無有疑。

是の故に智有らん者、此の功德の利を聞きて、我が滅度の後に於て應に斯の經を受持すべし。是の人佛道に於て、決定して疑有ること無けん。

眞の智者は必ず佛に成る

この故に智慧があつて深く考へる者でなければいけない。宜い加減に考へる者ではいけない。智有らん者といふのは、本當に深く考へる者のことです。本當に考へる者が此の功德の優れてゐることを聞いたならば、我が滅度の後に於て、それは末法の世で随分困難が多いことであらうが、その困難の多いことを覺悟して、此の教を受持して、即ち之を心に信じ身に行つて、此の貴い教を自分のものにすべきである。それでなければ折角佛の教を學んだ甲斐がない。さういふ事が出来さへすればキツト佛の境界にまで到達し得られる。それは必ず出来ることだと、斯う明言して居られるのであります。ズツと此の文章を読んで見ますと、此經を信ずれば必ず佛に成ると請合はれてある。しかしそれは骨が折れるぞと言はれて、更に之に就て心の持ち方が細かく説かれてあるのであります。そこを能く一字々々と看逃さないやうにして見て行くことが肝要です。自分に都合の宜いところだけを見てはいけません。多くの法華經を読む人は自分に都合の宜いところばかり探して、『是の人佛道に於て決定して疑有ること無けん』といふ

輕々しく讀んでばならぬ

やうなところばかり見て、何でも法華經を讀んで居れば佛に成るといふ。併しそれには、一心にやれ、つまらない心を持つてはいけないといふ條件がある。その條件を考へないで、何でも法華經を讀んで居れば佛に成ると思つては間違ひです。是れは本當に一大事である。五十年や六十年の生命ではない、永遠の生命を如何にするかといふ一大事であるのでありますから、本當にこの一字一句でも軽く視ないで、これを自分のものにしていふ覺悟がなければならぬことでもあります。經を讀むのに自分の氣に入つた所だけ讀んだり、都合の宜い所だけを讀むといふやうな讀み方をしたのは、佛の御精神といふものは決してわかるものではない。一字々々を本當に心に引き緊めて讀んで初めてわかつて行くのであります。

それでこれまでは菩薩の中の殊に機根の勝れた菩薩、所謂地涌の菩薩といふやうな人々に對してのみ説かれて居つたのであります。しかしながら佛が明かに一切の人間をみな佛にしてやると仰しやつた以上は、特別の人間だけに教を説いて、特別の人間だけに努力させて濟むべき筋のものではない。それは速く悟るのもあり遅く悟るのもあるでせう。しかし生命のあるものはみな佛様のお弟子である。さすれば生命のあるものはみな佛様に濟はれて、みな終には佛の境界に近づかなければならぬのでありますから、其等の中で無暗に甲乙を付けてはいけません。遲速の差はあつてもみな佛様の弟子だから結局はみな濟はれなければならぬ。

それだから今度は次の屬累品になつて、あらゆる菩薩に對して屬累されるのであります。又末の世に生れ合せた吾々共でも、此の大乗の教が非常に貴いことを感じまして、力は足らぬけれども菩薩の道を勵んで行かうと思ふ者は、やはり佛の屬累を受けて居る者だと考へなければならぬ。さうなつて來るとそれだけに自分の責任も重くなるわけだし、自分も宜い加減なことをしては居られないのであります。



天台の訓戒

天台大師が法華經を弘めるのに殊に功勞のあつたことは申すまでもないのでありますが、天台大師は斯う言つて居られます。法華經を弘める者が身持を宜い加減にして居てどうなるのか。小乗の低い教を説く者でさへも、佛の戒めぐらゐるは守つて居るではないか。況んや菩薩の道を行じようといふ者が佛の戒も守らないで、放埒な行ひをしてそれで教が弘まるものではないといつて居ます。それで戒も守れぬやうな者は『用に堪ゆる所なし』とあります。例へば皿や鉢に金や銀で綺麗な模様が描いてあつても、その皿や鉢が割れてしまへば、それに何も御馳走を盛ることが出来ないやうに、どんなに多くの本を讀んでも、自分の行ひ、自分の心持が佛と一致しないやうな淺ましいものであつては何にもならぬ。模様の美しい皿や鉢が割れて用に堪へぬやうなもので、『用に堪ゆる所無し』。まるで役に立たぬと言つて居ります。これはお互ひに餘程考へなければならぬことだらうと思ひます。徒に高遠な理窟を並べて、チツともそれを實行しようと努めないで、さうして自分は法華經を讀んで居ると言つたところが、それは用に堪ゆる所無しで、實際役に立つものではない。どうも世が末になりますと、自ら省みて行ひを慎しむといふことが足りなくなつて來て、徒に理窟ばかりに趨るやうになります。天台もそこらを憂へて斯様な戒を遺されたことだらうと思ひます。今こゝを讀んで見ると、眞に法華經を行ずる者は佛様のお讃めを蒙つて、まことに有難いのでありますが、有難いだけに又已れを慎まなければならず、又天台の言ふやうに用に堪へる所が無いやうなものになつては相濟まぬわけで、今後に於ても餘程お互ひに戒め合つて行くべきものだらうと思ひます。

## 屬累品第二十二



屬累品第二十二

屬累品第二十二

神力品と屬累品

これから屬累品ぞくるほんに入るのでありますが、この前の神力品と屬累品の關係に就ては、昔からいろ／＼難かしく論ぜられて居ります。神力品の方では、上行菩薩等の特別に徳の高い菩薩に對して、この經を弘めることを勧められた。それから屬累品の方では、これから讀みますやうに、其處に教を聽く爲に集つた一般の人に對して、この教を弘めることを勧められた。だから神力品の方を別付屬べつぷぞくと言ひ、今から讀まうとする屬累品の方を總付屬そうぷぞくと言つて、この間には大變な差があるのだ、といふやうなことが、隨分今までも言はれて居ります。併し私はさう等差を立てるのにはあまり賛成しない。少し異を立てるやうですけれども、私は此の説にあまり賛成しないのです。何故かと言ふと、佛様は一切衆生を皆佛にしてやらうといふ事を屢々言はれて居る。又如何なる者でも自分の弟子でない者は無いといふことを屢々言つてゐらつしやる。勿論それは程度之差はありませう。頭腦の良い者もあり、悪い者もある。速く解る者もあり、遅く解る者もあるから、速く解つた者が先に立つて弘めて、それより劣つた者はそれに續いて行くといふ、先と後との區別は無論ありませう。併しながら如何に機根が劣つて居ても、どれほど愚かな者でも、皆佛性があり、佛に成る本性を有つて居るといふことは、これは吾々が勝手に決めたのではない、佛様がハッキリ明言されたのであるから、その間にあまり甚しい區別を立て、或る一部分の者を特別扱ひをするといふことは、佛様の大悲の御精神とは一致しないと私は思ふ。そんなに特別ばかり考へないでも宜い。總ての人間が皆佛様の教を信じて行



くのでなければ、この娑婆世界が極樂淨土のやうなものになることは望めないのでありますから、先づ順序としては先輩が後輩を導くことは宜しい。特別に機根の勝れた者が機根の劣つた者を率ゐて行くことには無論私も異議はない。けれども其の間に無暗に區別を立て、しまつて、『こつちは特別だ、そつちは劣つてゐる』といふ風に、あまりに甚しい差を立てるといふことは、佛様の大慈悲に於て缺けたやうになつて、甚だ佛様に對して相濟まぬことであらう、斯う思ふのであります。でありますから私はそんな面倒な區別を立てないで、本文の儘に讀んで参ります。何人でも佛の付屬を得て、さうしてこの教を世に弘める責任を負うて居るものだといふ風に考へる方が宜からうと思はれます。それだけの事を前以て申上げて置いて本文を讀むことに致します。

艱難を覺悟して弘めよ

それで『屬累』といふ言葉に就て前にも申しましたが、『屬』とは頼むといふこと、お前達此の教を弘めよと、弘めることを委託すること。『累』とは煩ひを掛ける、面倒を掛けるといふことです。だから屬累といふのは、面倒だけれども弘めて呉れといふことです。モット進んで言へば、どんな苦しい事があつても、辛い事があつても、さういふ事は覺悟して弘めて呉れといふ意味が含まれて居る譯です。無論人に教を説くといふのには、自身が何も能く解らぬでは説ける譯はありません。それで自分が修行して、自分が相當な智慧を具へ、相當な分別を具へるやうになる迄には隨分骨が折れるに違ひない。骨の折れるのが嫌だと思へば、初めから佛教を學ぶことを思止まるより外はない。さういふ事は到る處に説かれて居りますけれども、この屬累といふ語にはとりわけ其の意味が充分に酌み取れるのであります。骨が折れてもやれ、骨の折れるのを厭はないでやれ。斯ういふ意味が無論そこに現はれて居る譯であります。一體何でも善い事をするのに、骨が

折れないで出來ると考へるのが抑々間違である。その所は初めからシツカリと考へなければならぬことだらうと思ひます。さういふやうな意味で讀んで行きますれば、この本文は能く解るのであります。

爾時釋迦牟尼佛。從法座起。現大神力。以右手摩無量菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付屬汝等。汝等應當一心。流布此法。廣令增益。

爾の時に釋迦牟尼佛、法座より起ちて大神力を現じたまふ。右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩て、是の言を作したまはく、我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付屬す。汝等應に一心に此の法を流布して、廣く增益せしむべしと。

釋迦牟尼佛は法座より起つて大神力を現はし、さうして右の手を以て無量の菩薩の頂を摩でられた。手を以て頂を摩でるといふことは、印度の習慣としてはお前に委せるといふ意味です。日本ではまア子供なら兎に角、むやみに大人の頭などを摩でれば、人を馬鹿にしたといふことになるけれども、印度の習慣では、人の頭を摩でるといふことは信任して委せるといふことです。だから佛様が大量の頂を摩でるといふことは、佛はお前達を信じて委せる、どうぞ佛の亡い後でも大量の人の力に依つて、この佛の教が弘まるやうに骨折つて呉れ。又骨折ればキツトその効果があるといふ意を以て、頭を摩でるといふ事をされたものと思はれるのであります。

佛の依囑



それから此處には『無量の菩薩摩訶薩』といつてあります。これは無論菩薩であれば摩訶薩であるべきですが、誰でも大乘の教を學び始めた時から既に菩薩の修行をして居るのでありますけれども、學び始めた時には、そんなにシツカリした覺悟は有たないでせう。けれども大乘の教を學んで段々經つて行けば、佛の御心持もよくわかり、自分も佛様と同じに成れるのだといふ事を佛様に依つて請合はれて居るのだから、大に奮發して修行を續けて行つて、結局世の中の一切の人を救ふやうな者になりたいといふ志が立てられる筈であります。その志を立てたならば、それが所謂摩訶薩です。『摩訶』は大きいといふ事で、『薩』は人といふ事です。ですから、合せていへば大きな人です。大きな人とは大きな心持を有つて居る人、すなはち『大心の士』でこれを略して『大士』と申します。一切の人を救ひたいといふのですから大きい心に違ひない。併し自分が自分を救ひ得ないで、人を救ふことは出来ないから、自分が佛と同じ智慧を具へ得るやうになりたいといふ大きな理想を有つて居る者が即ち大心の士といふべきであります。さういふ人であつて初めて教を世に弘めることが出来るのであります。

大心の士

そこで澤山の菩薩摩訶薩の頂を摩でられて、さうして斯う言はれる。自分は無量百千萬億阿僧祇といふ非常な長い年月の間に於て、習つて段々に修行を積んで佛智を具へ得るやうになつた。これはなか／＼容易に得られないものである。宜い加減な修行では佛の智慧を得ること、即ち絶對の眞理を捉へるといふやうなことは無論出来ない。釋尊は非常に長い年月の間に段々と修行を積んで、得た所の阿耨多羅三藐三菩提、即ち佛智を以て、一切の人間を教へ導くために教を説かれたのですが、此の教を今悉くお前達に付屬すると仰せられたのです。お前達がこれを學んで、これを世に弘めることを委せると、斯う言はれたのであります。

得難き法

この事は簡單に聽いてはならぬことであります。自分が長い間骨折つて苦心に苦心を重ね、修行に修行を重ねて得た所を説いた、この教をお前達に委せるから弘めて呉れと、斯う言はれるのです。斯ういはれよば其の委せられた者は、これを宜い加減なことで解るとか、宜い加減なことで弘まるとか思つてはならぬ筈です。この御言葉を聽けばさう思ふ筈はない。これはモウ前から、始終斯ういふことが繰返されてあるのです。之を輕々しく思つてはいけません。お釋迦様御自身がそんなに手輕に悟つたのではない、苦心を重ね努力を重ねて、漸く悟つたものだから、その漸く悟つた事を習へと言ひ、又之を實行して、之を世に弘めよと言ふ以上は、皆それ／＼に一生懸命にならなくてはいかぬ。宜い加減なことで出来るものではないといふ事は、繰返し／＼言はれたのであるが、今この付屬の時に又その事を言つて居られるのであります。だから宜い加減にお經を讀みさへすれば自然に佛様と同じになれるなどと、そんな心持を起しては濟まない譯であります。これ程に丁寧と言つて居られるのですから、吾々も坐り直して、シツカリ考へなければならぬ筈でせう。

さういふ譯であるから、是れは非常に貴い教である。之を世に弘める爲には、骨が折れても、骨折り甲斐は必ずある。骨折つて自分で修行して悟つて、さうして悟り得た所を人に教へ、世に弘めるならば、この汚い土地の上の娑婆世界が、後には淨土、即ち淨らかな明るい世界に變つて行くに違ひない。此の事に力を盡すのは非常に大きな功德である。どうぞ之を委せるから、末の世に至つて皆が力を協せてこれを弘めて呉れ。それには生ぬるい心持ではいけないといふので、『汝等應に一心に此の法を流布して廣く増益せしむべし』と仰せられた。『一心に』といふことを特に言はれて居ります。一心にやらなくてはならぬ。『一心に』といふのは、如何に骨が折れても教が弘まれば宜い、人が救はれよば宜いといふことばかり思詰めて、教を弘めるこ

一心に弘めよ



とです。それでなければ一心に弘めたとは言へない。ところが世の中で教を弘めるといふやうなことをやつて居る多くの人を見ると、一心ではなくていろいろな氣持がそこに混つて居る。これを弘めたら勢力が得られようとか、これを弘めたらお寺が立派になるだらうとか、これを弘めたら地位が高くなるだらうとか、いろいろな考へを混ぜ込んで教を弘めるのだから、それで一心に弘めたのでも何でもない。『どうも科學が進んで信仰心が緩んだ』などと言つて居るが、自分達が一心になりもしないで世の中のみを恨んでも仕様がなない。弘める者が本當に一心に世の爲人の爲とのみ考へて教を弘めて、それで弘まらなかつたならば兎も角も、自分達の力が緩んで居て、世の中を恨むといふことは間違つて居る。自分達がどれ程眞面目になつて居るかを反省しなければならぬ。

廣く増益せしむ

さうして又一心に弘めるに當つて、何を目當に弘めるかと言へば、『廣く増益せしむべし』とあります。廣くといふ以上は智慧のある者も、智慧の無い者も、善人も悪人も、凡そ命の有る者には残らず教へて、残らず利益を與へて、皆共に佛の境界に近づいて行かせる。斯ういふつもりでなければならぬといふことであります。是れは短い言葉であります。凡そ世の中に立つて教を弘めるといふ業に従事する人は、この言葉を忘れてはならぬ。『一心に此の法を流布して廣く増益せしむべし』。これが本當に實行されて居れば結構ですが、どうもこれが實行されて居ない。一心でなくて心が方々に散つたり、廣く増益しないで、都合の好い人ばかりを相手にして見たりして居るのであります。實際經典の語といふものは一字一句と雖もシツカリ考へなければならぬ。

如是三摩諸菩薩摩訶薩頂。而作是言。我於無量百千萬億阿僧祇劫。修習是難得。阿耨多羅三藐三菩提法。今以付屬汝等。汝等當受持讀誦。廣宣此法。令一切衆生普得聞知。

是の如く三たび諸の菩薩摩訶薩の頂を摩で、是の言を作したまはく、我無量百千萬億阿僧祇劫に於て、是の得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を修習せり。今以て汝等に付屬す。汝等當に受持讀誦し、廣く此の法を宣べて、一切衆生をして普く聞知することを得しむべし。

自行と化他と相並ぶべし

さういふ事を三度仰せられて、三度菩薩の頂を摩でられて、それから又斯う仰しやつた。自分が斯ういふことを悟る迄の間には長い年月を重ねて、命に懸けての修行をして漸く解つたのである。今此の法を以て汝等に付屬する。だから汝等は之を受持讀誦して、廣く之を世に弘めるが宜い。斯う仰せられたので、『汝等廣く此の法を宣べ』といふに就て、『受持讀誦して』と斷つてある。自分でやつてから人に教へよと言つて居る。自分でやらない事を人に教へても役に立たない、自分の心に能く納得が行く迄は、繰返し／＼學んで、自分のものにして、さうして之を廣く世の中に弘めなければいけないぞ、と、斯ういふ風に斷つてある。さうして『一切衆生をして普く聞知することを得しむべし』とある。一切衆生と言へば善人も悪人も、金の有る人も金の無い人も、身分の高い人も身分の低い人も、みなすべて其の中に含まれて居るでせう。そのいろ／＼の人にこの教を聽くことが出来るやうにしてやれといつてある。それには自分から先づ之を實行しなければ



いかぬ。自分の身を修め、自分の心を修めないで出来ることではないから、先づ受持讀誦して、それからその自ら信ずる所を以て普く一切に弘めよといふのであります。

所以者何。如來有大慈悲。無諸慳慳。亦無所畏。能與衆生佛之智慧。如來智慧。自然智慧。如來是一切衆生之大施主。汝等亦應隨學如來之法。勿生慳慳。所以は何ん。如來は大慈悲有りて諸の慳慳無く、亦畏るゝ所無くして、能く衆生に佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與ふ。如來は是れ一切衆生の大施主なり。汝等亦應に隨ひて如來の法を學すべし。慳慳を生ずること勿れ。

佛には惜む心無し

何故こんな事を特に頼むかと言へば、佛は一切衆生を救ふことを自分の望とするものであつて、大慈悲を有つて居る。それは虚空の下に覆はれないものがないと同じやうに、佛の慈悲心の下に覆はれないものはない。佛は大慈悲を有つて居る。さうして『諸の慳慳なし』。折角自分が骨折つて習つた事だから、人に容易くこれを教へるのは惜しいといふやうな考へは一つも有つて居ない。此の慳慳なしといふことは、大乘の戒律などを説かれる場合は屢々繰返されて居る事でありますが、よほど困難な事です。私共が學校などで物を教へて見ると能く判る。どうしても人に教へるといふ時に慳慳の心が出て来る。自分が長い間骨折つて研究して解つた事を、サツ／＼と人に知らせてしまふのは惜しい。せめては骨が折れたといふことを知らせたい。斯う思ふから焦らしてなか／＼教へない。斯ういふ意味から日本では、いろ／＼の藝に昔から口傳とか奥義

とか、中許とか奥許とかいふやうなことが出来て居て、なか／＼教へない。折角自分が習つたのだから、そんなに急に種明しをしては詰らぬと思ふからでせう。それが即ち慳慳です。併しながら能く考へて見ると、世の中は段々忙しくなつて来るのだから、自分が十年掛つた事をやはり十年掛つて教へたのでは役に立たない。自分が十年掛つた事でも一月で覚えさせるやうにする、自分が三十年掛つた事でも一年で覚えさせるやうにするのでなければ普く世の中の人を救ふといふ事は出来ない。だから佛様は自分が苦心努力して命を懸けて修行した事を、成るべく骨が折れないで、成べく速く解らせるやうに努めて居られる。さうかと言つてあまり易しくは皆が骨折らないから、『難かしいぞ、シツカリしろ』と始終言はれる。これは實に有難い事です。出来るだけ解るやうに教へて置いて、難かしいぞ、シツカリしろと戒を與へられて居る。それで皆本當に一生懸命になつてやるから、自然に能く解つて来る。その所が實に貴いのです。だから吾々が一生懸命になつて修行して行きさへすれば、それはモウ佛様がお請合になつたことであるから、必ずや久しい努力苦心を積む間にはシツカリ解つて来ることでありませう。

佛は畏れぬ

佛は慳慳なく、自分の覺つた事を惜んで人に教へないなどといふ心持は少しもない。さうして又『畏るゝ所なし』。畏るゝ所がないといふのは、相手の如何に依つて教を變へるといふことではないのです。畏るゝといふのは憚るといふ事です。斯ういふ事を言つたら氣に入らないだらうとか、斯ういふ事を言つたら世間に流行らないだらうとかいふことはチツトもないといふのが、即ち畏るゝ所なしであつて、畏るゝ所なしといふのは唯だ怖がらないとか、元氣が良いとかいふ意味ではない。更に畏れ憚らない事です。本當の事は最後に勝利を得るにきまつて居る。本當の事が負けた日には世の中は潰れてしまふ。一番善いものが最後に勝つに



定まつて居る。佛はそれを確く信じて居るから畏るゝ所なしで、世間に流行らないでも少しもがっかりしない、世間に受けが悪くても何とも思はない。本當の事を出来るだけ解るやうに説いてやるが、世間の人間が間違つて居てそれを受け付けないでも畏るゝ所はない。斯うやつたらチツトは流行るだらうと言つて、教の根本の精神を傷けても流行らすといふやうなことは斷じてしない。解るやうに説いてやるけれども、どんなに解るやうに説いても、根本の精神を傷けるやうな説き方は決してしないのであります。それは大事なことであります。

世が末になつて來ると、自分の宗旨を流行らせる爲に、教の根本を傷けて世間に迎合するやうなことをやる人も多いが、それは世間を畏れるといふもので、佛の精神とは違つて居る。佛にはさういふ事は決してない。どんな低い教を説いても、どんな通俗な教を説いても、根本の精神に於てチツトもかはりはしない。斯ういふ事は經典を讀んで見ると常に感じられるのであります。人によくわかるやうに説くことは宜いが、大事な所は間違へないやうにしなければならぬ。相手次第に依つて易しく説くのは宜いけれども、相手に依つて十あるものを五にしたり三にしたりして、宜い加減にして渡すといふ事は、それは安い物は手を抜くといふ職人の根性と同じになつてしまふ。これは五錢だから十錢の品より半分も手を抜いて、後で壞れても構はぬといふのは卑しい考へです。ところが動もすると教を説く人にそれが出て來るので困る。佛は如何なる場合でも惜しみもしなければ畏れもしない。但し人に解らせる爲に種々の方便を用ゐるといふことはあるのであります。

さうして結局はと言へば、總ての人に、佛と同じ智慧を與へてやる。如來の智慧を與へてやる。自然の智

根本は動か  
せぬ

佛の智慧

慧を與へてやるのである。これは佛の智慧を三つに分けて言はれてゐるのですか、結局同じものです。何故三つに分けて言つたかと言へば、『佛の』といふ時には一切の人を救ふ働きを主にしていふのです。即ち『救護』を主にする時に、『佛の』と言ふ。世間の人は皆苦しみ悩んで居る。誰でも苦しみのない者、悩みのない者はない。その等差はあらうけれども、誰でも心の中には、『これでは困る、何とかしたいものだが』といふ要求を有つて居る。唯その有つて居る要求が心の底に動いて居つても自分では氣が付かない者もある。其等のものに教を與へて、皆を救つてやる、護つてやるといふことが所謂佛事です。だから佛の智慧といふものは一切の者の悩み苦しみを救ふ力となるべき智慧といふことであります。吾々も本當の智慧を磨く時には斯う思はなければならぬ。自分が斯ういふ事を習ふのは、大勢の人の苦しみを救つてやる爲に、大勢の人に本當の道を示してやる爲に役に立つのだと思つて、自分の智慧を磨かなければ、本當の智慧は得られないでせう。

如來の智慧

それから『如來の智慧』といふのは佛の悟りのことです。今の言葉で言へば、絶対の眞理といふやうな意味です。人を救ふといつても、自分に本當のことが明かになつて居ないと救へるものではない。本當の悟りを得たものが即ちそれが如來であります。本當に悟つて、絶対の智慧を具へて居るのが如來であります。だから如來の智慧といふのは人を救ふといふことの根本に入つて、自身が絶対の悟りを得て居る事です。一體人間といふものは何の爲に存在するのか、天地萬有は何の爲に存在するのか。苟くも物が在るといふのは何の爲に在るのかといふ事をシツカリ本當に捉まへる。さういふ智慧が所謂如來の智慧です。人間は知りたいたいふ本性を有つて居る。人間ばかりではないでせう。凡そ生命の有るものは知りたいたいふ本性を有つて居るのでありますから、本當の事を知るといふことは、自分の本性を全うする道である。だから今直ぐ此處で役に



立つことばかり知れば宜いといふのは淺薄な考へです。今日知つたら直ぐ明日役に立つやうにしたい、昨日知つた事は今日直ぐ役に立てたいといふ風に、さう淺薄に考へないでも宜い。知る事その事が貴いのです。知りさへすれば何時かは役に立つ。さう考へて行きますと、知る事の貴さがわかります。

知ることが  
貴い

今の時代のやうに氣の短い人の多い時には、餘程そこを考へて置かなければならぬと思ふ。何か一つ知ると直ぐ役に立てたいとばかり思はず、習つた事を使はないで少しは藏つて置くのも宜い。何でも習つた事を直ぐに役に立てようといふやうな考へでは、本當の事は出来るものではない。支那の昔の賢人は、『良賈は深く藏して虚しきが若し』と言つて居ります。本當の良い商人は藏の中にしまつて置いて店に何も並べて居ないといふのです。淺草の仲店へ行つて見ると、店には一杯並んで澤山品物があるやうであるが、奥に入つて後ろの唐紙を開けると、裏の露路へ出てしまふ。あれではいけない。何でも今直ぐに役に立たぬでも、吾は永遠の命を有つて居るのであるから本當の事を求めて行く爲に力を盡して、直ぐに役に立たぬでも宜しい、本當の事を知つて居れば何時か役に立つに違ひないといふ、シツカリした心を有つて居なければならぬ。永遠に亘つて變らない眞實のものを知り、さうして其の智慧を永く有ち續けるやうになれば、本當に貴い譯であります。

自然の智慧

それから『自然の智慧』。これは今迄にも度々いつた通り、人間は本來皆佛性といつて、佛となるべき本性を有つて居ります。此の本來有つて居る本性がだん／＼發展して行つて、さうして出來上つた智慧、これが自然の智慧であります。だからこの三つは、結局同じことを言つて居るので、佛の智慧を唯三つの點から見ただけのことです。一切の人を救ふべき智慧、それから又絶對の眞理を悟るべき智慧。モウ一つは自分の生

伸び行く力

れながらに有つて居る本性を十分に伸ばして、得た所の智慧といふ風に、三點から見たのであります。

それで物の本性が發揮されるといふ場合には、有ゆる困難を冒して行く力が具はるものだといふことを吾は考へなければならぬ。私は何時でも春先になつて、地面の下から芽が出て來るのを見る度にさう思ふのです。私の家の庭などは地面が非常に硬い。而もその硬い地面の下から、筍が生えて來たり、木の芽や草の芽が生えて來る。その地面の上に伸びた芽を見ると實に軟かです。この軟い芽がどうしてこの硬い地面を突抜けて上に伸びたかといふことは、一種の不思議な事です。地面よりも芽の方が軟いのに、この硬い地面を突抜けてどうして出て來るか、而も出てからでもまだ軟い。どうしてこの軟かい芽が斯んな硬い地面の下から之に打克つて出て來たかは、實に不思議なことです。しかしさういふ事が現にある。何故ならこれは伸びる本性を有つて居るのだから、その本性が發揮される時に、あの軟い芽があつた硬い地面の殻を破つて出て來るのです。私は春毎にそれを見て、『えらいものだ』とツク／＼思ふ。自分の有つて生れた本性を伸ばして行く力といふものは實にえらいものです。吾々ともさうで、吾々に自分の本來有つて居る性質を十分に發揮する決心があるなら、有らゆる硬いもの、難かしいことを突破つて行ける筈です。それなのに己れを欺いたり、人を欺いたり、色々な事をやつて行くから、難かしい所を突抜けて行けない。人として有つて生れた本性を全うするといふ事に心を向けるならば、有らゆる困難を突破して、その本性を充分發揮することが出来るに違ひない。さういふ心持で佛は一切の人を教へ導いて、佛の智慧を與へ、如來の智慧を與へ、自然の智慧を與へようとして居るのだと言はれる。

それ故に『如來は是れ一切衆生の大施主なり』といはれるのです。凡そ命の有るものに皆この教を與へら



佛は大施主  
 れるのです。施主といふのは施しを興へる者のことである。施しといふことは物質的にもやれますけれども、併し物質の施しには限りがありますが、教を興へるといふ此の施しは限りがない。だから佛の教を興へるといふ、これ程大きな恵みはない。これに就て涅槃經の中に面白い譬があります。長者が大勢の人間を集めて食物を興へる。さうすると早く来た者は新しい物を澤山食べられる。遅く来た者は残りしか食べられない。中にはまるで食べられないで歸る者もあるし、中には又不味くなつたのを食べて歸る人もある。品物を興へても、初めに来た者は餘計貰つて歸り、遅れて来た者は少し貰つて歸る。唯だ法の施しにはそんな事はない。一番初めに来た者も、遅く来た者も同じやうに教を受けて、同じやうな悦びをもつて歸れる。だから法の施しのみが平等だといふことを涅槃經の中に説いてありますが、それは確かにさうです。教の恵みは平等です。昨日聴いても今日聴いても同じ教で、後から行つたからと言つて減るといふことはない。だから佛といふものは大施主である。人に教を興へ、人に救ひを興へる、これ程大きな恵みはないのであります。

佛は一切衆生の大施主であるから、佛弟子たる者は皆佛の心を以て自分の心としなければならぬ。それで『汝等亦應に隨ひて如來の法を學すべし』とある。『隨つて學べ』とあるので、勝手次第に習つてはいけない。佛に隨つて習はなければならぬ。貴い教を自分の方に引下して勝手次第に習ふなら、それは習ふとは言へない。隨つて習はなければならぬ、佛様の教へられた通り習はなければならぬ。佛様の心を自分の心として習はなければならぬ。明かに隨つて習へと言つてあります。吾々は往々にして隨つて習はない。自分に都合の好い所だけ習つて、都合の悪い所は宜い加減にして置くといふ事があるからいけない。佛の御心持に隨つて、佛の教を學ばなければならぬ。さうして『慳慳を生ずること勿れ』。凡夫の習ひとして、自分の習つた事

を人に教へるのを惜むが、それは佛の御心に背くことであるから、慳慳の心を生じてはいけないといはれるのです。

於未來世。若有善男子善女人。信如來智慧者。當爲演說此法華經。使得聞知。爲令其人得佛慧故。若有衆生。不信受者。當於如來餘深法中。示教利喜。汝等若能如是。則爲已報諸佛之恩。

未來世に於て、若し善男子善女人有りて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此の法華經を演說して、聞知することを得しむべし。其の人をして佛慧を得しめんが爲の故なり。若し衆生有りて信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て示教利喜すべし。汝等若し能く是の如くせば、則ち爲れ已に諸佛の恩に報するなりと。

未來の世に於て、若し善男子善女人が有つて、如來の智慧を信する者があるならば、其の人々の爲に此の法華經の中に説いてある事を説いて聽かしてやつて、皆佛の境界に到達するやうに導いてやるが宜い。さうして後には必ず一切の人を救ふやうな力を具へるやうになれといつて勵ましてやるが宜い。さうすれば法華經の本當の精神を解し得るものが次第に多くなるから、それは實に大なる功德である。併しだん／＼世が末になつて行くと、初めから難かしい事を説いても聽かない者があるだらう、『信受せざる者』があるだらう。法華經に説かれたやうな高遠な、非常に深い教を最初から説いても、これを信じて身

信受せぬ者  
 のある場合



に行はうとしないやうな者があるであらう。さういふ場合には、『如來の餘の深法の中に於て』法華經の中で説かれないことでも宜しい。これ以外にも佛の心を籠めて説いた教が幾つもあるから、さういふ中で相手に適するやうなものを選んで、示教利喜して、さうしてだん／＼後には法華經の教に入るやうにしてやるが宜しい。

示教利喜

この『示教利喜』といふことは、人にものを教へる場合の順序としても大切であります。又自分ものを習ふ順序としても同じく大切であります。『示』といふのは先づ斯ういふものだといつて、其の大體を示すのです。さうでない人は習ふ氣を起さない。先づ佛様の心持は斯ういふものだ、大乘の教とは斯ういふものだといふやうに大體を説き示す。これは至て貴いものだ、人間としては是非學ばなければならぬものだといふやうに、其の大體を示して能く呑み込ませる。これが即ち示です。それから次には『教』で、その中の細かい事を細かに教へて行くのです。初めから細かい事を言つても、それが大體どんなものだから解らないでは、それを習はうといふ氣が起らないから、先づ示して、次に細かく教へる。教へてそれから之を實行させる。唯だ教へただけではいかぬ、解つたら自分でやつて見ると言つて、之を實行させる。それを『利』といひます。即ち利益を得せしむるのです。唯だ習つただけでは利益は生じない。例へば慈悲が貴いといふことが解つたら、やつて見なさい、近所に困る者があつたら情を掛けなさいといつて勧める。それを實行して見ると初めて人を救ふことの貴さがわかる。本當に役に立つて有難いナと感ずるやうになる。斯ういふことがだん／＼積り重なるると、『喜』といふことになる。其の實効のあつたことを喜ばずには居られなくなる。斯ういふ順になるのでありますから、どうしても示教利喜といふ四つが缺けてはいかぬ。人に教へる時もさうで

すが、自分で習つて行く時もさうです。自分でも先づ大體を捉まへて、それから細かい事を習つて、それを實行して見て、その有難いことが解る。結局は何にも代へられない喜びを感ずるといふ順序であります。簡単な言葉であります。『示教利喜』といふ順序は大變に良いことでもあります。何を教へるのでも、何を學んでも、示教利喜といふ順序で行けば狂ひがない。

それで法華經が初めから難かしいといふならば、法華經以外のものでも宜しいから、それからだん／＼示教利喜して、それが解つて來れば、結局法華經といふものが佛の教の結論に當るものであるから、他の教から段々深入りして、結局此の法華經の中で説かれたやうな事を習ふやうになる。

眞の報恩  
若し是の如くして教を弘めることに努力するならば、則ちこれ已に諸佛の恩を報じたものである。これは前にも言つたやうに、佛の恩を報ずるためには、佛様に何もして上げないでも宜しい。佛は一切衆生を愍んで、一切衆生を救ふことばかりを念として居られるのであるから、世の中の慙れな者を一人でも救つてやる、世の中の迷つて居る者を一人でもその迷を除いてやるといふことが、佛様の恩に報いる最良の途である。他に何も佛様は報を要求されない。佛が命懸けて教を説かれたのが有難いといふ念が幾らでもあるならば、その恩に報いる爲に、この教を世の中に弘めて、世の中の人を皆悟らして行つたら、それが最善の報恩の道だと言はれるのです。

時諸菩薩摩訶薩。聞佛作是説已。皆大歡喜。徧滿其身。益加恭敬。曲躬低頭。合掌向佛。俱發聲言。如世尊勅。當具奉行。唯然世尊。願不有慮。



時に諸の菩薩摩訶薩、佛の是の説を作したまふを聞き已りて、皆大歡喜其の身に徧滿して、益々恭敬を加へ、躬を曲げ頭を低れ、合掌して佛に向ひたてまつりて、俱に聲を發けて言さく、世尊の勅の如く當に具さに奉行すべし。唯然世尊、願くば慮ひ有さざれと。

諸菩薩の歡喜

その時に諸の菩薩達は、佛様が斯ういふやうにお説きになつたことを聽いて、皆大いによるこんで、『大歡喜其の身に徧滿し』とあります。非常に喜んだといふのですが、これは實に貴い事です。大變に骨が折れるぞと言はれてそれで喜んだのです。普通の人なら、この事は易しいと言はれれば喜ぶのですが、骨が折れるぞと言はれて喜んだといふのですから、聽いた方も偉いのです。菩薩としてはさうならなければならぬ。『これは易しい事だからチョットやつて呉れ』と言ふなら誰でもやる。『大變骨が折れるぞ、命懸けでなければ容易に出来ないぞ』と言はれて、喜び身に滿ちたといふことは、これは聽いた方も偉いものです。苦勞が多い程功德が大きいのでありますから、斯くして佛の恩に報いることが出来る。だから喜び身に滿ちまして、何とも言へない有難い事だといふのです。これは子供のことを考へると能く解ります。小さい子供に重い物を持たせると子供は喜ぶのです。あなた方もお子さんを育てゝらつしやるからお判りでせうが、何か少し重いくらの物を子供に持たして、『これに向ふ迄持つてお出で』と言ふと、子供は非常に喜ぶ。軽い物を持たせると喜ばない。やはり人間はさういふ本性があるのです。重い物を持たせれば『この位の物は持てると思はれて居るナ』と思つて嬉しい。軽い物を持たせると、『馬鹿にして居る』と思ふ。重い物を持たせられて喜ぶのが人間の本性です。稚い時にはその本性をもつて居るが、多くの人はそれを途中で自分で傷けてしま

ふ。世の中に立つて居る間に利害損得ばかり考へるやうになつて、其の貴い本性を傷けてしまふ。子供の時は利害損得など知らないから、重い物を持たせると喜ぶ、それが人間の本性です。餘り軽い物を持たせると、人を馬鹿にしたと思つて喜ばないのです。吾々も早く本性に戻つて、重い物を持たせられて喜ぶやうな心持にならなければならぬ。骨が折れるぞと言はれると有難い。そんな骨の折れることが出来ると思極められたのだから、自分ながら有難いといふ氣持になるのが本當です。誰でも本性に戻れば、さういふ心持はキツト出来る譯です。

それで喜びが身に滿ちまして、益々恭敬を加へて、一層感謝の意を表した。斯んなことを委される程、佛様は自分達を信じて下さるのだ、自分達も佛の命に隨つて、努力して行けばキツト此の重任を果すことが出来ると思ひましたから、益々恭敬を加へまして、躬を曲げ頭を低れ合掌して、佛に向つて俱に斯ういふ事を言つた。如來の仰せられた如く、『當に具さに奉行すべし』。自分達は皆力を協せて、骨折つて佛様のお心持に背かないやうにこれから實行致します。『唯然世尊、願はくば慮ひ有さざれ』どうぞ御心配下さいませなどいつたのです。こんなことが言へれば偉いものです、なか／＼言へるものではない。私共がやりますから御心配に及びませぬ。斯う佛様の前で言へる人は實に貴い人です。吾々がさういふことを言はうと思つても、ウツカリ請合つたらどんなことになるか自分でも判らないから、なか／＼言へるものでない。併し菩薩摩訶薩といふやうな本當に徳の高い人でありませうから、そんな事が言へたのであります。どうぞ御心配には及びませぬ、末の世に至つて必ず自分達がこの教を弘めませうと申しました。

諸菩薩の覺悟



諸菩薩摩訶薩衆。如是三反。俱發聲言。如世尊敕。當具奉行。唯然世尊。願不有慮。

諸の菩薩摩訶薩衆、是の如く三反俱に聲を發けて言さく、世尊の勅の如く、當に具さに奉行すべし。唯然世尊、願はくば慮ひ有さざれと。

諸の菩薩が三度繰返して俱に聲を出して言ふのには、どうぞ御心配には及びませぬ。末の世に至つてはキツト自分等の力でこの教を世に弘めませう、一切の人を救ひませうといふ事を申しました。

爾時釋迦牟尼佛。令十方來諸分身佛。各還本土。而作是言。諸佛各隨所安。多寶佛塔還可如故。

爾の時に釋迦牟尼佛、十方より來りたまへる諸の分身の佛をして各本土に還らしめんとして、是の言を作したまはく、諸佛各所安に隨ひたまへ。多寶の佛塔還りて故の如くしたまふ可しと。

その時に釋迦牟尼佛は、十方より來れる所の分身の佛様を各々本土に歸らしめようと思はれた。モウ末の世になつてこの教が弘まるといふ事の見極めが付いたのでありますから、十方から來た佛様も本土に歸つて宜しい。『諸佛各所安に隨ふべし』佛は銘々自分の身を安んずる所がある。今は此の靈鷲山に於て法華經を説かれる、その證人に立つ爲に來られたのであるから、この事が濟んだ上は、十方から來た佛様は各々その所

に歸られた方が宜しい。多寶佛の塔も故の通りになつて宜しい。モウこの法華經が末の世に弘まるといふ見極めが付いたのであるから、モウ元の通りになつて宜しいといふ事を仰しやつた。

說是語時。十方無量分身諸佛。坐寶樹下。師子座上者。及多寶佛。并上行等。無邊阿僧祇菩薩大衆。舍利弗等。聲聞四衆。及一切世間。天人阿脩羅等。聞佛所說。皆大歡喜。

是の語を説きたまふ時、十方無量の分身の諸佛の寶樹の下の師子の座の上に坐したまへる者、及び多寶佛、并に上行等の無邊阿僧祇の菩薩大衆、舍利弗等の聲聞四衆、及び一切世間の天人阿脩羅等、佛の所説を聞きたてまつりて皆大に歡喜す。

大衆の歡喜

このお言葉を仰しやる時に、十方無量の分身の諸佛、寶樹の下の師子座の上に坐したまへる者、及び多寶佛、並に上行等の澤山の菩薩、それから舍利弗などの聲聞、それから尙ほ一切世間の天人阿脩羅等も皆喜んだ。誰も喜ばない者はなかつた。これはつまり有らゆる力が集つて、結局この世の中が淨土になることが明らかになつたからです。他に淨土を求めるには及ばない。この娑婆世界に求めれば宜い。此の娑婆世界に住んで居る者の心が皆佛の御心に近づいて行くに従つて、此處が淨土になるに違ひないといふ事が明かにされたのでありますから、佛も喜べば菩薩も喜ぶが、佛や菩薩が喜んだだけでは不十分。聲聞や一切世間の天人とありますから、まだ充分解らない者もあるが、それ等も結局同じ境界に到達し得られるのだといふ見極め



が付いたから皆喜んだ。つまりは決して隔てはない。佛様でも、菩薩でも、聲聞でも、緣覺でも、まだくそんな事の解らない者でも、速い遅いの異ひはあるが、詰りは皆具有する所の佛性を發揮して佛と同じものになれる。此の娑婆世界が淨土に變るのだといふ先の見極めが付いたから、佛は無論喜ぶし、菩薩も喜ぶが、まだ菩薩の行の出来ない者でも喜んだ。今迄自分は懶け者であつたけれども、今から自身達も勉強して怠らなければキツト佛や菩薩にも成れるのだと、斯う思つたから、皆佛の所説を聽いて感激したのであります。吾々共は洵に力の足らぬ者であるけれども、苟くも世の中に立つて教を弘めようとか、教を弘める緣を作らうといふ心持を有つて居る人は、この心を失はぬやうにすべきものであります。佛も菩薩も喜ぶが、つまらない者も一緒に喜んだではないか。若しつまらない者は突放して、彼等の喜びを無駄にして、一部分の人が教を私するといふことがあつては濟まない。教といふものが一部分の人に私されるといふ事になりますと、教は本當に弘まりませぬ。皆が喜ぶ爲の教、皆を佛にする爲の教だといふ根本の事を忘れないやうにして行かなければなりません。

照應の妙

以上で法華經は一段落するのでありますが、一番初めの序品を今から振返つて見ますと、釋尊が靈鷲山で教をお説きになるのを聽聞しようと言つて集つた者には菩薩もあれば、聲聞もあれば、緣覺もある。その他經文に列べてあるやうに、天地の間の命のある者は皆悉く集つた。といふのは苟くも命の有る者はみな佛の教に緣があつて、速い遅いの差はあつても結局は救はれることが解つて居るから、或はハッキリ解らないでも、自然さういふ心持になつて居るから皆集つたのでせう。それと此處で照應して、菩薩も緣覺も聲聞も、その他人間界の者でも天上界の者でも、皆結局佛に成れるのだといふ事が解つて喜んだといふことで結んで

あるのであります。

因縁を説く  
必要

ところが人間といふものは、道理は解つてもなか／＼さういふ修行をしようとか、さういふ努力をしようとかいふやうな氣分になりませぬ。そこでこれから後には所謂因縁を説くと申しまして、法華經の修行をする範ともなるべき人々の事蹟を説いて、斯ういふ行ひをした者もある、これだけ人を救つた者もあるといふやうに、過去の事實を説き示す。さうして人々の奮發心を促さうといふのが、これから後の大體なのであります。どの經にもさういふ事は必ずある。どうも私共は道理の上で解つたのみでは、やらうといふ氣にならな。これは人間の通情であります。ところが昔こんな骨折つた人もあつたぞ、斯ういふ場合にこれ程恩に報ずる爲に力を盡した者もあつたぞといふ事實が澤山に擧げられて参りますと、それでは一つ自分もこれから奮發してやつて見ようといふ心持になれる。それでありますから、法華經といふ經典は、一通りの意味から言へば今の屬累品で終つても宜いやうでありますが、これが學問上の書物か何かであればそれで宜いのでありますけれども、宗教は實行が大事であつて、實行する爲にはどうしても理窟が解つただけではいけません。それで今度は生きた事實を擧げまして、さうして人々に實行したいといふ氣分を大いに作らせやうといふのが、これから後の諸品であります。それでやはり法華經といふものは、いろ／＼古來から説もありませんが、今日私共が読んで見ますと、二十八品何れも上下はないのであつて、屬累品迄で一通りの教の括りが付いたが、これからは活きた事實に依つて信仰の力を養つて行かうといふ、その用意は實に貴いものだと思います。



藥王菩薩本事品第二十三



藥王菩薩本事品第二十三

藥王菩薩本事品第二十三

此より藥王菩薩本事品に入るのですが、是れは藥王菩薩の實行した事を擧げまして、大乘の教を學ぶ人の信念を固めることが主となつて居ます。其の中に此の法華經が必ず末法の世に弘まるといふ豫言のあるのは特に注意すべき點でありませう。此から本文を読んで行きませう。

爾時宿王華菩薩。白佛言。世尊。藥王菩薩。云何遊於娑婆世界。世尊。是藥王菩薩。有若干百千萬億。那由他。難行苦行。善哉世尊。願少解說。諸天龍神。夜叉。乾闥婆。阿脩羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。人非人等。又他國土諸來菩薩。及此聲聞衆。聞皆歡喜。

爾の時に宿王華菩薩、佛に白して言さく、世尊、藥王菩薩は云何して娑婆世界に遊ぶ。世尊、是の藥王菩薩は若干の百千萬億那由他の難行苦行有らん。善哉世尊、願はくば少しく解説したまへ。諸の天龍神、夜叉、乾闥婆、阿脩羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等、又他の國土より諸の來れる菩薩及び此の聲聞衆、聞きて皆歡喜せんと。

その時に宿王華菩薩といふ菩薩が佛に申すには、藥王菩薩は如何にして娑婆世界に遊ぶでありませうか。



遊行自在

——遊ぶとは所謂遊行といふことで、これは始終言つてありますが『遊』の字の意味は自由といふことで、厭だとも思はなければ、又強めて求めもしないといふ意味です。本當に悟つて居れば、どんな境遇に在つても厭はない。『こんなことは出来ない』『こんな境遇はつまらない』と思ふことは決してない。けれども自分の仕事を罷めさせられたら罷めるだけのことで、決して之に執着はない。即ち厭はず、求めないのが遊行です。必ずしも厭はない、又強めて求めない。爲すべき事には全力を注いでやる。罷めなければならぬ時には早速罷めて退く。斯ういふのが即ち遊行であります。吾々も世の中に於ける自分の地位とか職業とかに就ては、何時でもこの遊行の心持であるべきだと思ひます。地位も與へられたら充分にやるが宜い。自分を信じて任されるのだから、全力を盡してやるが宜い。併し罷めなければならぬ時には、そこにいつまで執著して居なくても、サツサと罷めるが宜い。國の恩に報じ佛の恩に報ずべき場所は至る處にある。斯ういふ心で居ますならば、何處も安樂の天地であるべきであります。ところが凡夫といふものは執著が多いので、さういふ態度が取れない。現在與へられた仕事がつまらないとか、厭だとか言つて居ながら、罷めさせられると又愚痴を言ふ。『どうもこんな仕事は骨が折れて詰らぬ』と言ふ、それでは罷めたら宜からうと言つて罷めさせれば、今度はまた『どうもむやみに人を罷めさせて酷い』と言ふ。やりたいのか罷めたいのかチツトモ解らない。丁度これは遊行の逆です。愚痴を言ひながら罷めたくないのと、愚痴を言はないで、罷めても平氣だといふのは大變な異ひです。

所謂自由自在の心の持ち方が『遊ぶ』といふことであります。そこで娑婆世界に遊ぶといふのは、此の娑婆世界にあつて、縁に隨つて人を救ふことで、藥王菩薩はいつもそれを實行して居るのだが、さういふ自由

難行苦行の結果

自在の働きが出来るといふのは一體どういふ譯なのでありませうか。その藥王菩薩はどうして此の如きことが出来るのでありませうか。斯う言つて佛様にお尋ねしたのです。併し聽く方の人も宿王華菩薩といふ菩薩の難行苦行有らん』と斯う言つて居る。さう容易く遊行の境界に到れるものではない。どんな境遇にも負けないで平氣で居るといふことは、なか／＼出来ない事なのだから、キツと難行苦行を重ねた爲であらう、今まで苦んで色々苦勞した結果斯うなつたのでありませう。そこをどうか話して下さいといふのですから、聽く方もなか／＼頭が良い。悠然として驚かないやうな人を見た時には『あれ程ユツクリするやうになるのは今まで随分苦勞があるだらうナ』と斯う思ふのが本當でせう。人が悠々として居るのを見て『彼奴は金持のお坊チャンで食ふに困らぬから悠然として居るのだらう』と言つてしまつてはいかぬ。本當に悠然として居る人は、それ迄に大に苦んで居る。苦しまずして悠然とした心になるものではない。そこを通り抜けなければ、驚かず動かぬといふ所には行けないものです。今藥王菩薩が娑婆世界に遊んで、何處でも人を自由自在に救ふといふ程になるには、定めし難行苦行を経たのであらう。自分達もさういふ難行苦行を積まなければ、あゝいふ風にはなれないと思ふから、自分達の教訓の爲に、藥王菩薩が難行苦行して來たことを委しく教へて戴きたい。斯う言ふのであります。

『善い哉世尊、願はくば少しく解説したまへ』とあるが『少しく解説したまへ』と言つて居るのも良いことです。スツカリは説き盡せないでせうから少しでも結構です。又自分達もスツカリ其の通りに實行し得られないでも、その一部分でも實行しませう。どうぞ自分達の修行になることですから、そこを一つ説いて聽か



して下さいと言つて居る。斯ういふ經典の語といふものは、一字々々注意して讀むと非常に味があります。いゝ加減に讀んで行つてはならぬものです。

皆歡喜す

諸の天、龍神、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人——これは前にもありましたやうに、世の中の有らゆる命の有る者の名を並べたのです。又佗の國土よりの來れる菩薩達、それから此所に居る聲聞の人達も『聞きて皆歡喜せん』難行苦行の事を聽いて皆喜ぶだらうとある。普通ならば喜ばない譯でせう。難行苦行の骨の折れる事などを言はれると厭になつてしまふ筈です。それを聽いたら喜ぶでせうから話して下さいといふのは貴い心掛けです。教を聽く時には斯ういふ風な心で聽かなければいけない。一方は佛に對して願ひ、一方は他の者を勵ます語です。藥王菩薩が過去にいろ／＼な苦しみを重ねて悟りを開いた、その事を伺つたならば皆歡喜するであります。斯う言つて藥王菩薩の過去のことを伺つたのであります。

爾時佛告宿王華菩薩。乃往過去無量恒河沙劫有佛。號日月淨明德如來。應供。

正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。

爾の時に佛、宿王華菩薩に告げたまはく、乃往過去無量恒河沙劫に佛有しき、日月淨明德如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊と號けたてまつる。

その時に佛様が宿王華菩薩に告げられるには『乃往過去』ズツと過去つた前の世、無量恒河沙といふやうな永い年月の昔に佛があつた。それは日月淨明德如來といふ佛様であつた。それから以下に例の佛の十號を

連ねてありますが、これは屢々申したことですから説明を略します。是れは佛の徳を色々な點から讃めたもので、要するに日月淨明德といふ名の佛様があつたといふのです。

其佛有八十億大菩薩摩訶薩。七十二恒河沙。大聲聞衆。佛壽四萬二千劫。菩薩壽命亦等。彼國無有女人。地獄。餓鬼。畜生。阿脩羅等。及以諸難。地平如掌。瑠璃所成。寶樹莊嚴。寶帳覆上。垂寶華旛。寶瓶香爐。周徧國界。七寶爲臺。一樹一臺。其樹去臺。盡一箭道。此諸寶樹。皆有菩薩聲聞。而坐其下。諸寶臺上。各有百億諸天。作天伎樂。歌歎於佛。以爲供養。

其の佛に八十億の大菩薩摩訶薩、七十二恒河沙の大聲聞衆有り。佛の壽は四萬二千劫、菩薩の壽命も亦等し。彼の國には女人、地獄、餓鬼、畜生、阿脩羅等及び諸難有ること無し。地の平かなること掌の如くにして、瑠璃の所成なり。寶樹莊嚴し、寶帳上を覆ひ、寶の華旛を垂れ、寶瓶香爐國界に周徧せり。七寶を臺と爲して一樹に一臺あり。其の樹の臺を去ること一箭道を盡せり。此の諸の寶樹に皆菩薩聲聞有りて、其の下に坐せり。諸の寶臺の上に各百億の諸天有りて、天の伎樂を作し、佛を歌歎して以て供養を爲す。

その佛様のお弟子には、八十億といふやうな澤山の菩薩、即ち大乘の教を修行する者、及び七十二恒河沙の數ほどの聲聞、即ち小乗の低い方の教を修行する者があつた。それから佛の壽は四萬二千劫、菩薩の壽



佛の教化の及ぶ所

命も亦それと等しい。さうしてその國には女人や、地獄や、餓鬼や、畜生、阿修羅も無く、その他色々な難が無い。これは前にも幾度もあつた事ではありますが、佛の徳が自ら周圍を感化して行けば、結局はそこに穢れたものや、罪のあるものが無くなる譯でありますから、その事を述べてあるのです。さうして地面が平らかだといふこともやはりその通りの意味で、佛の徳が周圍を動かし、周圍の人を感化して、さうして有らゆる苦しい事や穢ない事がなく、至て平和になつた有様です。それから瑠璃を以て出來た寶のやうな美しい樹が並び、美しい幕が上に垂れ、それから旛なども垂れてあつて、その外色々な寶ものが澤山ある。此等は他の所にも例がある、所謂淨土の形容ですが、この中でチョット注意すべきことは『臺を去ること一箭道』とあります。一箭道といふのはどれ程の長さか、これは能く解りませぬ。弓を射て箭の通ふだけの道筋といふ意味でありまして、それが何町であるとか、何里であるとか、いろ／＼な説がありますけれども、何れに従ふべきか能くわかりませぬ。

此の諸の寶樹の下には皆菩薩や聲聞が坐つて居る。諸の寶の臺の上には各々百億の諸天が居て、天の伎樂を作して、佛を歌歎し以て供養を爲す。斯ういふことは今迄にも幾度も繰返されてありました。何時の場合でも斯ういふ事が言つてあります。人間が佛の教に依つて救はれるのみならず、天上界の者も救はれる。だから人間が佛を供養歌歎する時には、天上界の者も佛を供養歌歎するのだといふことが、繰返し／＼言つてある。何故そんなに幾度も繰返すのであらうか。今の吾々から見れば、そんな事を何遍も言はないでも宜いやうに思はれる。併しながら印度には兎に角永い間婆羅門教といふものが弘まつて居りまして、婆羅門教に於ても、來世に天に生れるといふ事を理想として難行苦行をやつたものであります。婆羅門教の中に

天に生れる理想

も九十五種とか、六種とか色々あつたやうで、中には大變に難かしい哲學上の議論をして居る者もあります。そんな哲學上の議論をやつたり、研究をやつたりしたのは一小部分でありまして、大多數の者が婆羅門の教に歸依したのは、後の世に天上界に生れることを望んだからです。この天上界は苦勞もない惱みもない所だといふことは、これは印度創まつて以來信ぜられた所であります。此の世は苦しい所だから、後の世には天上界に生れて苦勞のないやうになりたいといふのです。種々難行苦行をするのも、この世で苦んで置けば後の世は樂になるだらうといふことでやつたのです。釋尊以前の婆羅門の大多數は、天上界に生れることを理想として教を説いて居つたのであります。佛教が起つて初めてその迷ひを打破つた。

天上界に生れることが何故幸福であるか。この世が苦しいから、天上界に生れたら樂だらうと思ふけれども、それは初めは樂で宜いかも知れぬけれども、そんな所に永く居れば嫌になつてしまふ。樂な所に永く居れば樂な事が却つて苦になる、何かやはり仕事欲しくなる。無事といふことは決して幸福でないといふことを、お釋迦様が出て來て能く教へられた。佛蘭西語にアンニユイといふ言葉がありますが、無事だとそのアンニユイを感じるのです。動ける人間が動かずに居る程苦痛はありませぬ。吾々も時々さういふ經驗をします。誰か偉い人の所へ訪ねて行つて、應接間で三十分も待たされるとアンニユイを感じる。仕方がないから障子の骨でも數へて、縦が幾本、横が幾本、みんな何本といつて掛算などをやつて居るけれども、動くことが出來ないので實に嫌になつてしまふ。昔のお大名なども動きたくても動けない、苦を経験したくても出來なかつた。こんな詰らぬ事はありませぬ。人間界にも考へ方によつては樂がある。たゞ天上界へ行つて何もしないといふのは詰らぬ。人間はいつでも世の爲に、他の者の爲に力を盡すといふことを樂しむとすべ



きである。それより外に眞の樂みはありはしないといふ事を、佛教では能く教へられて居る。だから人間も天上界の者も共に教を聽かなければならぬ。又皆教を求める念が其の心の底には動いて居る。決して宜い加減生きて満足するものではないといふことを徹底的に説かれて居る。これは本當に有難いことであります。どんな人でも、國王から乞食に至るまで、教を求めず、道を求めないで意義有るやうに生きることは出来な。斯ういふ事を佛教ではよく説いてあるのであります。それですら娑婆世界に出て來た佛様に對して、人間も供養する、天上界の者も供養するといふことを繰返し説かれるのであります。

爾時彼佛。爲一切衆生喜見菩薩。及衆菩薩。諸聲聞衆。說法華經。是一切衆生喜見菩薩。樂習苦行。於日月淨明德佛法中。精進經行。一心求佛。滿萬二千歲已。得現一切色身三昧。

爾の時に彼の佛、一切衆生喜見菩薩及び衆の菩薩、諸の聲聞衆の爲に法華經を説きたまふ。是の一切衆生喜見菩薩樂習苦行を習ひ、日月淨明德佛の法の中に於て、精進經行して一心に佛を求むること萬二千歲を滿じ已りて、現一切色身三昧を得。

その時に其の佛様が一切衆生喜見菩薩及び諸の菩薩や聲聞衆の爲に法華經をお説きになつた。これは屢々あることでありますが、法華經を説くといふのは、佛様が自分で悟られたことを打明けて、少しも藏さず説かれたことで、今の此の字で書かれた法華經ばかりが法華經ではない、佛の御心を打明けて、教へられたのが法華經であります。お釋迦様がいろ／＼教を説いてその最後に、自分は斯う悟つて居るのだ、自分は斯

眞の法華經

う思つて居るのだといふことを、チツトも藏さず打明けて説かれるのが法華經です。他の佛とても其の通りです。それをどんな文字で現はすかといふことは抑々末であります。字を讀んだのみで解るものではない。言葉を聽いたので解るものではない。結局は佛の御心と自分の心と通ひ合つて、佛の御心持はこれだナと解つた時が、本當の法華經を讀んだ時である。それ以前に法華經を讀むといふのは、準備的に讀んで居るのみである。吾々は斯うして法華經を何十遍讀んでも、眞に法華經を讀んだとは言へない。七十歳まで生きて後か、百歳まで生きて後か、或は又他日生を更へ、世を更へた後の世で、本當の法華經を讀む時があるかも知れぬ。なか／＼本當に法華經を讀むことは出来ない。それまでは其の準備的に讀むだけのことです。本當の法華經なるものは、佛の御心持が解つた時に初めて解るものであります。併しながらその本當の法華經の解る縁を成すものだから、文字で書いた此の經も貴いには相違ない。だから法華經を説かれるといふことは幾度もありますが、つまり佛の本心を打明けて説かれたといふ意味であります。

そこで、この一切衆生喜見菩薩が『樂ひて苦行を習ひ』とあります。この佛様が、法華經を説かれたのを聽いて、一切衆生喜見菩薩といふ菩薩が自ら進んで苦行を習つたとあります。して見れば法華經を一度聽いてそれで悟れるといふ筈はない。『成る程有難い、自分も努めさへすれば佛に成れるのかナ』と思つたから、どんな辛い事でもキツトやらうと決心して、苦行を習つて修行したと言ふのであります。さうして日月淨明德佛の教を受けて熱心に修行して、非常に久しい間唯だ自ら佛の境界に到達せんことのみを求め、其の苦心努力の結果として現一切色身三昧を得た。『現一切色身』といふのは、相手に應じて、其の相手に適當なる姿を現はし、相手に適當なる教を與へる力、それが現一切色身です。此の色身といふのは言語動作等をいふの

現一切色身三昧



で、喜んで教を與へるのが適當な者には喜んで教を與へ、叱つて教へ導くのが適當な者には叱つて教へる。優しくすべき者には優しくし、厳しく教ふべき者には厳しく教へる。それが現一切色身で、相手に皆それぞれ適當な方法で教を説く、其の力をいふのです。三昧とは心が動揺しない状態を言ふのですから、斯ういふ所では力といふ意味に取つて宜しい。一切の色身を現はす所の力を具へることになつて來たといふのです。

私共は少しばかり自分の子供に物を教へたり、學校の學生に物を教へて居るけれども、相手に適當な姿を現はすといふことは迎も出來るものではない。此方が腹が立つて居ると、優しくすべき相手にボン／＼叱言を言ふ。此方が何か嬉しいことがあると、叱るべき相手にもニコ／＼笑つて物を言ふ。吾々の言ふのは、自分の氣持次第でやるのですからまだ／＼駄目です。相手に適當なやうに、厳しくやるべき時に厳しくやり、優しくやるべき時に優しくやるといふことはなか／＼出來るものではない。叱言を言はなければならぬナと思つても、自分が良い氣持だと笑つて居る。優しくしなければならぬと思つても、自分が氣持が悪いと厭な顔をしてしまふ。それでは人を教へ導くことは出來るものではない。それは難行苦行を重ねて、心が本當に練れて來て初めて出來ることです。吾々も可なり長い間人を教へて居りますが、それは實に難かしい。どうしても其の時に適當な顔つきを一つすることが出來ない。適當な聲一つ出すことが出來ない。己れに囚はれていけないといふことを深く感じます。

今この一切衆生喜見菩薩は、長い間苦行をして後に現一切色身三昧を得たとあります。何時でも適當な姿をし、適當な顔つき、聲つきをして、向ふの心にシツクリ嵌るやうな教を説く力が出來たといふのであります。これは自分達が少しばかり人を教へて見ますと難かしい事であるといふことが能く解ります。

得此三昧已。心大歡喜。即作念言。我得現一切色身三昧。皆是得聞法華經。

力。我今當供養日月淨明德佛及法華經。

此の三昧を得已りて、心大に歡喜して即ち念言を作さく、我現一切色身三昧を得たる、皆是れ法華經を聞くことを得る力なり。我今當に日月淨明德佛及び法華經を供養すべしと。

感謝の念

そこで此の三昧を得已つて、大に歡喜した。これは自分の力ではない、自分が現一切色身三昧を得たのは皆これ法華經を聞いた力であると、斯う思つたといふのです。本當に悟つた人は、自分の力ではないといふことに氣が付く。少しばかり解つた者は、俺が解つたのだと思つて居る。本當に解つて見ると、斯んなことがどうして自分に解るのだらう、是れは迎も自分の力ではない、佛様のお蔭だ、尊い教のお蔭だといふことに思ひ當るのであります。だから本當に佛に感謝するやうになつた人は、本當に解つた人である。『俺が俺が』と言ふ者は解らない輩です。本當に解らないで、中ぐらゐしか解つて居ない者が『俺が／＼』と言ふのです。本當に解つて見れば、これは佛様のお蔭だ、佛様の教を受けたお蔭だと思ふから、そこで何とかして此の御恩に報いようといふ、報恩の念が必ず起つて來なければならぬのであります。兎角私共は感謝の心が足りない。少しばかり物を習つて見ると、物がスツカリ解つたやうな氣になる。少しばかり人に話をして『あなたの話は面白い』などと言はれると自惚れが起るといふのは、本當に解つて居ないからです。本當に解つて見たら自惚などの起るものではない。どうしてこんな尊い教が解るのか、とても自分の力では行くものではないといふ所に心が向かなければならぬ筈であります。何時でもそこを目標にして行くに就ては、前



に申すやうに過去の修行者の跡を學んで吾々の修行を勵むより外はない。これから後もさういふ意味で讀んで行きますと、過去の色々の人の修行の一々が、皆自分の身に適切に考へられて參ると思ひます。

此の一切衆生喜見菩薩（それが即ち藥王菩薩なのであります）が、法華經を聞くことに依つて大きな力を得たことを感謝して、今自分が現一切色身三昧を得たことは、皆是れ法華經を聞くことを得たところの力である、だから『我今當に日月淨明德佛及び法華經を供養すべし』といふのですが、此の法華經の教は何處から出たかといへば、佛様の御力から出たのである。だから之に對して供養するといふ時には、唯だ經に供養するといはずして、佛及び法華經に供養すると、佛を先に言つて居るのです。

佛が中心

これは大に注意すべきことです。佛があるから法がある、法があるからその法の利益が得られるのだからどうしても中心は佛様でなければならぬわけです。宗教であればどうしてもさうでなければならぬ。佛を離れて法もなければ教もない。さういふことは到る處に見えて居りますが、斯ういふ經文を見ても能くわかりません。だから法華經を聞いたおかげだと斯う考へると共に、佛様に供養しなければならぬといふのです。佛があるから法華經があるのである。斯様な經文は、極く簡単に讀んでしまへばそれ迄でありますけれども、宗教といふものの眞實の性質を理解する上に於てはこれは非常に大切なことです。苟くも吾々が宗教生活に入らうといふのに、佛を中心にして物事を考へないといふことであれば、それは宗教生活といふものとは大分縁の遠いものになつて行きます。それは教といふものだけを中心にし、或は道といふものだけを中心としても、考へられないことはありませんが、それなら倫理道德といふやうなもので宜いのであつて、宗教といふものの本質として、どうしても活きた佛様の御心と、活きた吾々の心とが直接に通ひ合つて行かな

ければ、信仰といふものにはなり得ないわけです。この頃はいろ／＼な宗教がありまして、いろ／＼な教を説きますので、ウツカリすると頭がクラ／＼する虞れがあるから、チツト諄いやうだが申して置きますが、佛教に於てはどうしても佛様といふものを中心を立てない以上は、眞の佛教にはなり得ないのであります。無論さうでなくても理窟は立つけれども、佛を中心としないで立つた理窟は、それは倫理道德とか、或は哲學とか、さういふものになるのであります。佛教にはなりにくい。佛教であればどうしても佛様といふものを中心としなければならぬ。これは佛教全體を通じての話であります。こゝの所もよくさういふ點に氣をつけて讀むべきだと思ひます。

そこで『日月淨明德佛及び法華經を供養すべし』で、先づ佛様に感謝の意を表し、それから佛のお説きになりました教に感謝の意を表する。それには自分の身を捧げて報恩の意を表さうと、斯う思ひ定めたといふのです。

即時入是三昧。於虛空中。雨曼陀羅華。摩訶曼陀羅華。細抹堅黑梅檀。滿虛空中。如雲而下。又雨海彼岸。梅檀之香。此香六銖。價直娑婆世界。以供養佛。

即時に是の三昧に入り、虚空の中に於て曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、細抹堅黒の梅檀を雨し、虚空の中に満て、雲の如くにして下し、又海彼岸の梅檀の香を雨す。此の香の六銖は、價直娑婆世界なり。以て佛に供養す。



『是の三昧』といふのは、自分の一身をいろ／＼にあらはして、さうして大勢の人を濟ひ得るのは、全く佛の御力であるといふことを深く思ふことです。それから虚空の中に於て曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、これは前にもありましたやうに白い蓮の花と大きな白い蓮の花です。それから細抹堅黒の梅檀、細かくして堅い黒いところの梅檀といふ香のある木を雨ふらしたといふのです。供養といふのにもいろ／＼な形があつて、華を供養するとか、香を供養するとか、或はその他いろ／＼な物を供養するといふのは、みなこれは感謝の心持をあらはすのです。その香といふのは、六銖くらゐな極く目方の少いものでも、その香の價値が娑婆世界全體に匹敵するくらゐだといふ、そんな貴い香を佛様に供養した。まアこれだけでも随分大きな供養でありませう。

作是供養已。從三昧起。而自念言。我雖以神力供養於佛。不如以身供養。是の供養を作し已りて、三昧より起ちて自ら念言すらく、我神力を以て佛を供養すと雖も、身を以て供養せんには如かじと。

これは實に意味の深いことです。有難いと思つて、その有難いといふ心持をあらはすために、華を供養するとか、香を供養するとかする。さうすると是れではまだ足らぬといふ氣が起つて来る。こんなに有難いと言つてお禮を言つても、いろ／＼有難いといふ氣が強くなつて、どうしてもお禮の言ひやうがなくなつて来る。これが宗教上の本當の心持です。吾々でもさういふことはあるでせう。非常に嬉しい時に、嬉しいと言つたら相當に心持を言ひあらはせるやうに思ふけれども『嬉しいナ』と言つてみると、斯んなあらはし方ではとても現はせないと思ふ。現はしてみるとまだ／＼現はし盡せないと、斯う思ふのです。佛の御恩が有難いから華を供養し、香を供養する。これで氣がすむかと思つてやつて見ると、まだ斯んなことでは仕様がな

感謝の念は現はし盡せぬ

い。佛様の御恩は絶對のものだから斯んなことでは仕様がな、モット何かお禮の仕方はないだらうかと思ふ。これは人情をよくあらはして居て面白い。だから三昧より起つて自ら思ふのに、どうも是れではいかぬ、自分は不思議な力を以て、華だの香だのを佛に供養して來たけれども、そんな事くらゐでなか／＼佛の恩に報じ盡せるものぢやない。自分の身の全體を捧げて、自分の身を犠牲にしても佛に御供養するといふことではなければならぬ。斯う思ひついたのです。

即服諸香。梅檀薰陸。兜樓婆。畢力迦。沈水膠香。又飲瞻蔔。諸華香油。滿千二百歲已。香油塗身。於日月淨明德佛前。以天寶衣。而自纏身已。灌諸香油。以神通力願。而自然身。光明徧照八十億恆河沙世界。

即ち諸の香、梅檀薰陸、兜樓婆、畢力迦、沈水、膠香を服し、又瞻蔔、諸の華香油を飲むこと千二百歳を滿て已りて、香油を身に塗り、日月淨明德佛の前に於て、天の寶衣を以て自ら身に纏ひ已りて、諸の香油を灌ぎ、神通力の願を以て自ら身を然して、光明徧く八十億恆河沙の世界を照す。

それから諸の香、例へば梅檀薰陸といふやうなもの——前にも『海此岸の梅檀』といふことがありました。何れでも宜いことではありますが、これは殊に勝れた梅檀といふ意味です。印度の舊い傳説として世界の



身を以ての  
供養

中心に須彌山といふ山があつて、その山の四方に海がある、その海の中に陸がある。その陸の一つが吾々の住んで居る陸だと、斯ういふことをいふのです。海此岸といふのは、この須彌山に近い方の海岸です。その海岸に大變に香の高い梅檀といふ木が出るといふ言傳へがあるものですから、それをこゝにもいつてある。要するに最も價值のある、最も珍らしい香や華を御供養申上げたと斯ういふことです。それではまだく足りないものですから、又考へるのに、どうもいろく品物を以て御供養申上げたけれども、とてもそれでは佛の恩に報いたといふ心持になれないから『身を以て供養せんには如かじ』と思つた。それは自分の身を焼いて佛の前にお燈明を上げるといふことで、自分の身を燈明にして佛に供養しようと、斯ういふことを考へたのです。それからいろくな香のある木『梅檀』だの『薰陸』だの『兜樓婆』だの『畢力迦』だのを服した。これは昔の人がいろく穿鑿したやうですが、どうもよく判りませぬ、要するに皆香木です。法華經を譯した羅什三藏なども、要するに何か香のある木だらう、今日これを想像して見ても想像がつかないといふやうなことを言つて居ります。要するに香のある木と思つたら宜しいでせう。それから『沈水』これは水に沈むやうな重みのある香木。それから『膠香』これは何か楓のやうな木の中から出る香の高い液ださうです。要するにこれは昔大變に貴ばれた香のある木です。それを自分が服しまして、それから『沈水』といふのはこれは香のある草です。その香のある草から採つたいろくな香のある油を飲んだりした。千二百歳といふのは唯だ永い間といふ形容です。それから香油を身に塗つて日月淨明德佛の前に於て『天の寶衣』非常に美しい着物を自分の身に纏うて、諸の香油を自分の身に灌いで『神通力の願』どうか自分が佛様の御恩に報いるだけのことを、此の身を以てあらはしたいといふ願を立てました。さうして自分の身を然したところ

が、その光明が徧く八十億恆河の沙の數ほどの世界に至つて、普く周圍を照したといふのです。

其中諸佛。同時讚言。善哉善哉。善男子。是真精進。是名眞法供養如來。若以華香瓔珞。燒香抹香塗香。天繪旛蓋。及海此岸梅檀之香。如是等種種諸物供養。所不能及。假使國城妻子布施。亦所不及。善男子。是名第一之施。於諸施中。最尊最上。以法供養諸如來故。作是語已。而各默然。其身火燃。千二百歲。過是已後。其身乃盡。

其の中の諸佛同時に讚めて言はく、善哉善哉、善男子、是れ眞の精進なり。是を眞の法をもて如來を供養すと名く。若し華香、瓔珞、燒香抹香塗香、天繪旛蓋及び海此岸の梅檀の香、是の如き等の種々の諸物を以て供養すとも、及ぶこと能はざる所なり。假使國城妻子をもて布施すとも、亦及ばざる所なり。善男子、是を第一の施と名く。諸の施の中に於て最尊最上なり。法を以て諸の如來を供養するが故にと。是の語を作し已りて各默然したまふ。其の身の火然ゆること千二百歲、是を過ぎて已後、其の身乃ち盡きぬ。

眞の供養の  
精神

この説明で供養といふことの精神が能くわかるのです。今日から考へて見ると、何故身を然すといふやうな不思議なことをするのか、現に吾々がどんなに佛様の御恩を報じたいといつても、自分が香の油を飲んで身に油を塗つて火をつけるにも及ばないでせう。ところが經文にさういふことが書いてあるのです。香油を



飲んで、それから身に香油を塗つて火をつけて焼いた、その光が周囲を照したと斯うあるのです。これは一見不思議なこと、チョット解釋の出来ぬやうなことです。能く考へると解釋がつくのです。つまり法を以て佛に供養するのだと斯うある。佛様の御恩に報ゆるのはどうするか。それは自分の身を苦しめ、自分を犠牲にして法を世に弘め、その法の光を以て世の中を照すやうにする、これより外に御恩に報ゆる途はない。是れならば今の吾々でも出来ることです。それにはどうしても佛様に對して感謝するといふ至情がなければならぬわけです。たゞこれは貴い法だ、面白い教だ、これを弘めたら世の中の役に立つだらうといふ位な考へでは、なか／＼一生懸命にはなれない。こんな貴い佛様の御恩をどうして報じよう。モウ此の身などはどうなつても宜い。この小さい身などは實にいふに足らぬものだから、此の身を投げ出して、どんな苦しみを得ても、さうして自分が學び得たところの法を世の中に弘めて、この法の光を以て世の中を照し、一人でも多く明るい生活の出来るやうにしてやらう。これが本當に佛恩に報ずる途である。斯ういふことでありませう。是れならば今の吾々にも、チャンと理解が出来るのです。

報恩の唯一の途

それには前にも申したやうに、恩を知るといふことが根本です。深く恩を知れば其の恩に報いようといふ心持がどうしても起らなければならぬわけです。それから恩に報いるといふ心持が起れば、佛様から受けた恩を佛様に返したいといつても、佛様は別に人から報酬を受けられる方ではないわけです。その恩に報いる途としては、自分が佛の貴い教を世に弘めて行くより外に仕方がないわけです。何故なら佛様の本當に望まれることは、一切衆生を濟ふといふことです。佛の御恩に報いるには、法を弘めるより外はないわけです。譬へば自分の世話になつた人にお土産を一つ持つて行くとするならば、向ふの人の好きな物を持つて

て行かなければならぬでせう。お菓子の好きな人にはお菓子、お壽司の好きな人にはお壽司を持つて行かなければならぬ。向ふの嫌いな物を持つて行つてもしやうがない。そこで佛様は何がお好きかといへば、佛は一切の人間を濟ふことのみを喜ばれる。さうすれば報恩の途といふものは、自分が佛法を世に弘めて人を濟ふこと。此の濟ふといふ中に一切を含んで居りますから、自ら法を弘めることに依つて佛の恩に報いるといふより外に仕方がないわけにせう。だから佛恩に報じようと思へば、自分が佛の教を世に弘めることに力を盡すより外はない。

自己の完成

併しながら幾度も言ふやうに、教を弘めようとしても、自分に其の力がなければ教は弘まらないわけにせう。だから自分を完成し、自分を佛に近いものにするといふことが恩に報いる途と考へられるわけです。そこが大事な所です。そのことは幾度も／＼前から繰返してあるので、塔を建て、呉れるには及ばない、此の法の中に自分の魂が籠つて居るのだから之を世間に弘めて呉れ。或は後の世に至つて法華經を弘める者は、佛と同じに看做さなければならぬといふやうなことも、幾度も繰返してあります。併しさういふ所ばかり見て、これを淺はかに解釋して『法を弘めさへすれば佛恩に報ぜられるのだ』と斯う決めてしまつて、自分の修養を放つて置いて、法を弘めることばかりやつて、これで御恩に報ずることが出来ると思つては大變な間違ひでせう。自分が煩惱だらけの心持で教を説いても、それはたゞのお取次になつてしまふ。自分が本當に解つて、自分のものにして説くのでなければ、本當に教を弘めるといふことは出来ない。だから自己を完成するといふことに努めなければ、恩に報ずることも出来ないわけです。このことは日蓮上人のお書きになつた『報恩鈔』といふものの中などには、随分丁寧に説かれてあります。



眞の精進

それで此處はさういふやうな心持で讀めば宜いのです。自分がどんなに苦くても、どんな辛い思をしてでも修行をして、さうして教を世に弘めて、その教の光を以て世の中を照すやうにして行かうといふのであります。だからその光に照された世界の佛様がみなお讚めになる。善哉々々、善男子、それが本當の供養である。眞實の法を以て佛に供養するといふのはそのことであると仰せられた。『是れ眞の精進なり』とある。精進といふのは幾度も言ふやうに、雜りの無い心を以て進むといふことで、本當に佛様の教を弘めよう、又自分が佛の教を修行して佛に近いものにならう。この事ばかりを一心にやるといふことが、それが眞實の精進である。さうであつて初めて眞の供養が出来るのである。若し華香とか、瓔珞とか、燒香、抹香、塗香、或は美しい絹の幡天蓋といふやうなもの、それから海此岸の梅檀の香といふやうな、斯ういふ諸の物を以て供養しても、それは及ぶ能はざる所である。自分が佛の道を修行して、これを世に弘めるといふ、この供養には到底及ぶものではない。

それでこの所にはその意味が力強くいつてある。どんな物を持つて行つても、自分の身を苦しめて法を世に弘め、世の中を明るくしてやるといふ此の供養に及ぶものは無い。たとひ國を皆佛に上げてしまつても、自分の妻子を皆佛に仕へさせるといふやうな事をして、それでも及ぶものではない。自分が身を苦しめて世の中を明るくするといふことが第一の布施である。これより大きい布施といふものはありはしない。何故なれば是れが法を以て諸の如來に供養することである。法を弘めて世の中に其の法が弘まれば、佛の御心が世の中に行きわたるわけで、それは佛の一番お喜びになることである。これより外に佛に對する最上の供養はないわけです。『是の語を作し已りて各默然したまふ』モウたゞ感歎して黙つてしまつた。たゞ有難いこ

とだ、結構なことだといふのでお互に喜んで居たのです。それで其の身の火の然ゆるること千二百歳あまり、それから此の歳月を過ぎ已つて後、身がスツカリなくなつた。

一切衆生喜見菩薩。作如是法供養已。命終之後。復生日月淨明德佛國中。

於淨德王家。結跏趺坐。忽然化生。即爲其父。而說偈言。

一切衆生喜見菩薩、是の如き法の供養を作し已りて、命終の後、復た日月淨明德佛の國の中に生じて、淨德王の家に於て、結跏趺坐して忽然に化生し、即ち其の父の爲に、而も偈を説きて言く。

それから又新しい事實が起つて来る。自分の身を然して佛に供養し、周圍を明るくするといふことをやつて、それで一切衆生喜見菩薩の一生涯が終つたのですが、それから後に日月淨明德佛の教の弘まつて居る國の中に於て、淨德といふ王の家の中に、その王の子となつて生れ、さうして其の父のために偈を説いたといふのです。唯だ其の一生涯だけでなく、後の後の世までも、いくらでも生れ更り／＼して、さうして佛に仕へ佛の教を弘めるといふ働きを續ける。これが報恩の途である。たゞ身を苦しめて世を明るくするといふことを生涯やつたのではまだ濟まない。また幾度でも出て来て又教を弘めるのであります。

これは大變に貴い話です。その教を弘めるにはたゞ口に説くだけではない。自分が心から歸依する佛に禮を盡して仕へて、自分もこの通り佛に歸依して居るから、あなた方も歸依しなさいと言つて勧めるのです。これを何遍でも繰返す。六十年や七十年の一生で佛の恩に報じ盡せるものではないから、其の一生涯を終つ

生をかへても盡す



て後の世に於て、又佛に歸依して其の佛の教を弘める。それが終つたら又次の生に於てやる。斯ういふことを繰返して行くので、佛の恩を眞に報ずることが出来る。又此の恩に報ずる爲の働きに依つて、自分も結局は佛の境界に近づいて行くに違ひない。此の修行が一度だけでないといふことが大變に深い考へです。

大王今當知。我經行彼處。即時得一切。現諸身三昧。勤行大精進。捨所愛之身。

大王今當に知るべし、我彼の處に經行して、即時に一切現諸身三昧を得、大精進を勤行して、所愛の身を捨てにき。

そこで其の父のために偈を説いて言ふには、大王當に知るべし、自分は彼の佛の御許に於て經行して――一體は道を歩きながら今までに聽いた教を考へることを經行といふのでありますが、こゝでは修行するといふやうな意味です。其の佛の教を信じてそれに就ていろ／＼自分で考へて、さうして現諸身三昧を得た。有らゆる相手に應じて各々適當な姿を現はして教を説くといふ、さういふ力を得ました。それからなほ大精進を勤行して、一生懸命に力を盡して、自分の愛するところの身をも捨て、佛の恩に報いることに努めたのです。此の貴い佛の教を普く一切の人にも勧めたい。斯う父に向つて申したのであります。

說是偈已。而白父言。日月淨明德佛今故現在。我先供養佛已。得解一切衆生語言陀羅尼。復聞是法華經。八百千萬億。那由佗。甄迦羅。頻婆羅。阿閼婆

等偈。大王。我今當還供養此佛。白已即坐七寶之臺。上昇虛空。高七多羅樹。

往到佛所。頭面禮足。合十指爪。以偈讚佛。

是の偈を説き已りて父に白して言さく、日月淨明德佛今故ほ現に在す。我先に佛を供養し已りて、解一切衆生語言陀羅尼を得、復た是の法華經の八百千萬億那由佗、甄迦羅、頻婆羅、阿閼婆等の偈を聞けり。大王、我今當に還りて此の佛を供養すべしと。白し已りて即ち七寶の臺に坐し、虛空に上昇すること高七多羅樹にして、佛所に往到し、頭面に足を禮し、十の指爪を合せて、偈を以て佛を讚めたてまつる。

此の偈を説き已つて父に申すには、日月淨明德佛は今もやはり世の中にもゐらつしやる。自分は先に佛に供養して、佛の恩に報いる心を起したのだから、それで一切衆生語言陀羅尼を得た。一切衆生の言葉を聞いて能く其の心を察して、之に適切な教を説くところの力を得た。斯ういふところで陀羅尼といふのは、人に勧めて善を行せしめ、人に勧めて惡を止めさせる力です。陀羅尼といふのは自分のためにも他の爲にも言ひますが、こゝでは人の爲に盡すことを言つて居る。大勢の人に勧めて出来るだけ善い事を行はせ、又大勢の人に勧めて出来るだけ惡い事を止めさせる。その力をいふのです。その大勢の人に善を勧め惡を止めさせるのには、一切衆生の言葉を聞いて其の心のあるところを知るといふことが必要です。そこで初めてこれは斯ういふ人間だ、こゝに間違ひがある、こゝに善い所があると判りますから、そこで善い所を勧め勵まし、其の惡い所を止めさせることが出来るのです。さういふやうな一切の人間の心の底を見透すといふ力がどうして出来るかといへば、それは佛に供養したから出来たといつてある。佛の御恩に感じて、佛の恩に報いよう

人の心を知つて説く



といふ誠心があつたから、それで人を見た時に其の人の心持がよくわかるやうになつた。それで善い事を勧める力も悪い事を禁ずる力も出て來たと、斯ういふのであります。實際佛の恩を知り佛の恩を感じ、佛の恩に報いようといふ誠心が凝つて集る時には、自分の智慧も自ら開け、人に説く力といふものが自ら養はれて來る筈であります。この中心をシツカリ立てないで置いて、巧く教を説かうとか、佛の道を弘めようとかいふのは、それは本末顛倒であつて、さういふことは本當に出來るものではない。この所はよく考へなければならぬ事です。

讀む度に内容が多感ぜられる

それから一切衆生を濟ふやうになつたからそれでお終ひかと思ふと、又更に教を聞いたといふのです。最初に教を聞いて、其の教が能くわかつて、その教を人に説いて人を濟つたのだから、モウ聞かないで宜いかといふと、まだ充分でないと思つて、人に説くやうになつてから又繰返しこの法華經の教を聞いたといふ。此處が非常に貴い所です。八百千萬億那由佗、甄迦羅、頻婆羅、阿閼婆等、これは何れも非常に多い數で、億の何百倍といふやうな數で、殆んど無限といふやうな事です。さういふ澤山の偈を聞いたとあります。これは吾々共のやうな、物の數でない者でも能く感ぜられることです。お經といふものは繰返し／＼讀んで行く間に、其の内容が殖えて行くのです。これは不思議なものです。初めは少しの文字だと思つたが、今度また讀んで見ると、其の中に含まれた意味の洪大なのに感ずる。又讀むと又殖える、幾らでも殖える。私などは法華經を初め讀んだ時に、宜い加減に讀み過した所でも、二度目に讀むと『これはウツカリ出來ないナ』と思ふ。三度目には尙ほさうです。今斯うして皆さんに對しお話をして居つても、この次に考へると『この間の話し方はお粗末でいけなかつたナ、こんな大事な所を見落して居つた』といふやうなことがあるに相違

ない。いつまで經つてもだん／＼深くなつて、だん／＼殖えて行くものです。食物ならば食べればだん／＼減るのだけれども教は與へれば與へるほど殖えるのです。だから法華經を深く信じて、之を世の中に弘めて大勢の人間を濟つて、又考へて見ると法華經の内容が殖えて行く。何億何萬倍の法華經といふものになり、いよ／＼以て其の意味が深くなつて來て、いよ／＼以て有難くなつて來る。斯ういふことであります。

それで自分は前にも佛に供養したのですけれども、いよ／＼有難くて、今までの供養ぐらゐるでは自分の感謝の心持があらはし盡せない。又どうか此の佛に供養したいと、斯う申しました。さうして七寶の臺に坐して空に昇つて行つて、佛の所に到り、頭を地に擦りつけて佛の足下にひれ伏しまして、兩方の掌を合せて偈を以て佛を讚めました。

容顏甚奇妙。光明照十方。我適曾供養。今復還親近。

容顏甚だ奇妙にして、光明十方を照したまふ。我適曾供養し、今復た還りて親近したてまつる。

佛のお姿といふものは實に美しくして、光明は十方を照してゐらつしやる。自分は前の生に於て佛に御供養申上げたのだが、佛に縁が深くして今また佛に會ひ奉つて教を學び、又御供養申上げることの出來るといふのは有難いことだ。斯う申しました。

幾たびも佛にあふ

吾々にはどうも斯うは言へさうもない。現に私なども今法華經を讀んでお釋迦様のことを考へて見て、前にも佛に供養して、此處で御供養申上げるなどといふことはとても言へない。前は全く零です。これから新規に始めて、この次モウ一遍佛に値つた時に、前に御供養申上げたが又値ひ奉ると言へれば宜いのですが、



今のやうなやり方ではどうもそれは難かしいものです。前に御供養申上げたところではない、前に散々御迷惑をかけたが、又御迷惑をかけます：位な話です。なか／＼吾々はさうはいかぬのですが、眞實の信仰生活に入つた人は、前にも佛に値つて供養したが、又此處で佛縁があつてお目にかゝつたといふことが言へるでせう。天台大師が青年時代に慧思といふ人の所に行つて教を聞いた時に、慧思にさう言はれました。昔靈鷲山に在つてお前と一緒に、膝を交へて佛様の教を聞いたのだらうが、今又縁があつて、よく教を聞きに來て呉れたナと慧思が言つたといふ話があります。さういふことが出来れば、又さう言つて貰へれば、どんなに嬉しいかわからない。それはなか／＼容易なことではないでせう。しかし信仰が深くなつて自分の智慧が進んで行けば、そんなやうな心持になることもあり得るのです。そこまでお互ひに自分達の信仰を勵まなければなりません。

爾時一切衆生喜見菩薩。說是偈已。而白佛言。世尊。世尊猶故在世。爾時日月淨明德佛。告一切衆生喜見菩薩。善男子。我涅槃時到。滅盡時至。汝可安施牀座。我於今夜。當般涅槃。又敕一切衆生喜見菩薩。善男子。我以佛法屬累於汝。及諸菩薩大弟子。并阿耨多羅三藐三菩提法。亦以三千大千七寶世界。諸寶樹寶臺。及給侍諸天。悉付於汝。我滅度後。所有舍利。亦付屬汝。當令流布。廣設供養。應起若干千塔。如是日月淨明德佛。敕一切衆生喜見菩薩。

已。於夜後分。入於涅槃。

爾の時に一切衆生喜見菩薩、是の偈を説き已りて佛に白して言さく、世尊、世尊猶ほ世に在すと。爾の時に日月淨明德佛、一切衆生喜見菩薩に告げたまはく、善男子、我涅槃の時到了り、滅盡の時至りぬ。汝牀座を安施すべし。我今夜に於て當に般涅槃すべしと。又一切衆生喜見菩薩に勅したまはく、善男子、我佛法を以て汝に屬累す。及び諸の菩薩大弟子、并に阿耨多羅三藐三菩提の法、亦三千大千七寶の世界、諸の寶樹寶臺、及び給侍の諸天を以て悉く汝に付す。我が滅度の後、所有の舍利、亦汝に付屬す。當に流布せしめ、廣く供養を設くべし。應に若干の千の塔を起つべしと。是の如く日月淨明德佛、一切衆生喜見菩薩に勅し已りて、夜の後分に於て涅槃に入りたまひぬ。

一切衆生喜見菩薩は佛様に對して、佛様はまだらつしやる。前にも自分は佛の御恩を受けたのですが、又佛にお眼にかゝりました。今度も亦教へ導いて下さるのでせう。斯う言つてお禮を申した。その時に日月淨明德佛が一切衆生喜見菩薩に仰しやるのには、善男子よ、よく聞いて呉れた。自分は此の世に出て教を説いて、モウ説くべき事は説いてしまつて涅槃の時が來た。この世を捨てる時が今まさに來て居る。今此處で自分がこの世を去るのだから、汝は自分の最期の安らかであるやうに、自分の最期の場所を此處に仕度せよ。自分は今夜の夜半に於てこの世を去つて行かうと言はれた。

これは佛様の入滅なさることのお告げであります、その事が一段終つて、又再び一切衆生喜見菩薩に言はれるのには、自分が今此處で亡くなつてしまつたからといつて佛法は滅びはしない。自分は佛法を以てお

佛法は滅びぬ



前に屬累する。お前が今度は自分に代つて教を弘めることを命ずる。屬累の累はこの前申したやうに、煩ひをかけるといふ意味です。骨が折れるだらうがやつて呉れ。骨が折れるだらうが、その骨折を覺悟して佛法を世に弘めることをお前に頼むぞ。それから諸の菩薩大弟子、并に阿耨多羅三藐三菩提の法、亦三千大千七寶の世界、諸の寶樹寶臺、及び給侍の諸天を以て悉く汝に付する。斯ういふのは、一言で言へばお前は將來必ず佛になるといふことです。多くの菩薩等をみな自分が教へたが、その通り、今度はお前が教へるのである。自分は美しい臺の上に坐つて、美しい樹の下で教を説いたが、それも皆お前に譲る。自分には天上界に居る者がみな侍つて居たが、それも皆お前に譲る。つまり汝は佛の教を弘めることに依つて、佛と少しも變らないものになるだらうといふので、これは特に授記と言つてはありませぬけれども、正しく授記なのです。これは深く味ふべき所で、教を弘めることを命ずるのが即ち授記なのです。身心の力を打込んでこの教を弘めて行けば、結局は佛様と同じものになれるぞといふことを告げられたわけです。

弘教の命が  
即ち授記

それから自分が亡くなつてその骨が残るが、それもやはりお前に委せる。佛に代つて一切のことをお前がやり、佛の受くべきところの一切の報いもお前が受けるのだから、スツカリ自分の身代りとなるわけである。それだから廣く世間のものが自分の遺骨に供養をするやうに力を盡すべきである。それから又澤山の塔をも起てるやうにせよと命ぜられた。塔を起てるといふことはその徳を記念することでありませぬ。塔を起ると命ぜられるのは、佛の心持を少しも損はずに世の中の人に普く知らせよといふことです。教を弘めようといふ心持がなく、佛の徳を記念しようといふ心持がなくて、唯だ塔を建てたところで、それは唯だ形式のことになつてしまつて一向つまらない。日本の平安朝以下になると藤原氏一門の人が隨分塔を建てました。

それは塔を建てたその功德に依つて、自分の一家が繁昌するやうにと思つて建てたのでありますが、そんな料簡で塔を建ててもそれは眞の塔ではない。塔といふのは佛なり菩薩なりの徳を顯はして、世の中の人にこれを仰ぎさ瞻せる。斯ういふことが塔を建てる精神でなければならぬ譯です。だから塔を建てると命ぜられるのは、何も佛様が自分で塔を建て、貰ひたくはないのだけれども、さういふやうにして佛の精神を世の中に示し、さうして世の中の人を教に歸依せしめるやうにせよと、斯う命ぜられたのであります。

是の如く日月淨明德佛が一切衆生喜見菩薩に後のことをスツカリお委せになつて、それから夜の後分に於て——即ち夜半を過ぎてから御入滅になつた。

爾時一切衆生喜見菩薩。見佛滅度。悲感懊惱。戀慕於佛。即以海此岸梅檀爲  
積。供養佛身。而以燒之。火滅已後。收取舍利。作八萬四千寶瓶。以起八萬  
四千塔。高三世界。表刹莊嚴。垂諸旛蓋。懸衆寶鈴。

爾の時に一切衆生喜見菩薩、佛の滅度を見て、悲感懊惱して、佛を戀慕したてまつり、即ち海此岸の梅檀を以て積と爲し、佛身を供養して以て之を燒きたてまつる。火滅して已後、舍利を收取し、八萬四千の寶瓶を作りて、以て八萬四千の塔を起つること三世界より高く、表刹莊嚴して諸の旛蓋を垂れ、衆の寶鈴を懸けたり。

その時に一切衆生喜見菩薩は佛の滅度を見て非常に悲しみを懷いて、心から佛を戀慕したてまつた。佛が



居なくなつても、佛の教が自分に傳はつたのだから、自分が佛の教を弘めさへすれば佛様が居ると同じことだ……といふやうに、冷く考へては居なかつた。それは成るほど自分が命にかけて教を弘めようといふ決心はして居るけれども、又自分の恩を受けた佛様と假の別れだけでも、兎に角お別れをするのだから、モウ堪へられないほど悲んだといふことはこれは師弟の情としてさもあるべきことであります。さうでなければ恩に報いようといふ心持が強くは起らない。たゞ自分が恩を受けたのを覚えて居るといふだけでは本當に恩に報いようといふ心持は起つて來ない。別れの悲しみに動かされて、こんな遣る瀬ない悲しみをどうしようかと思ひつめた時に、あゝ仕方がない、せめては佛の遺命を果して、恩に報いることでもしよう、佛の恩に報いる爲に如何なる困苦をも忍ぼうと自分を勵ますことになりす。この悲しみが強ければ強いほど、恩に報いたいといふ感じも強く起つて來るわけでありす。これは親に對する心持でも同じことであります。

それで海此岸といふ、須彌山の下の海の側に生えて居る、一番良い梅檀を以て薪として佛に捧げて、それに火をつけて佛の遺骸を焼いて、それから火滅して後にその佛の骨を收め、八萬四千の寶の瓶に入れて、さうして又八萬四千の塔を建てた。この塔を建てるといふのは、前に申したやうに、その佛の徳を記念し、世の中の人にその高い徳を仰ぎ瞻させるといふ心持からであります。さうしてその塔は三世界よりも高く、表刹莊嚴して——表刹といふのは塔の上に立つ竿のことでありますが、要するに美しい高い塔を造つたといふことです。それから諸の旛や天蓋を垂れ、いろ／＼な寶の鈴を懸けた。塔には必ず鈴を懸けるのであります。鈴を懸けるといふと、風に揺られて鈴の音がするから、道を通る時にウツカリして居る人でも必ずその塔を見上げる。やはり亡くなつた佛様の徳を出來るだけ大勢の人に想ひ出させるために、鈴を懸けるのです。

追慕の至情

爾時一切衆生喜見菩薩。復自念言。我雖作是供養。心猶未足。我今當更供養舍利。便語諸菩薩大弟子。及天龍夜叉等。一切大衆。汝等當一心念。我今供養日月淨明德佛舍利。作是語已。即於八萬四千塔前。然百福莊嚴臂。七萬二千歲。而以供養。令無數求聲聞衆。無量阿僧祇人。發阿耨多羅三藐三菩提心。皆使得住現一切色身三昧。

爾の時に一切衆生喜見菩薩、復た自ら念言すらく、我此の供養を作すと雖も、心猶ほ未だ足らず。我今當に更に舍利を供養すべしと。便ち諸の菩薩大弟子、及び天龍夜叉等の一切の大衆に語らく、汝等當に一心に念すべし、我今日月淨明德佛の舍利を供養せん。是の語を作し已りて、即ち八萬四千の塔の前に於て、百福莊嚴の臂を然すこと七萬二千歳にして、以て供養す。無數の聲聞を求むる衆、無量阿僧祇の人をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめ、皆現一切色身三昧に住することを得しむ。

その時に一切衆生喜見菩薩が又自ら申されるには『是の供養を作すと雖も心猶ほ未だ足らず』塔を建て、も、どうしても佛の御恩に報いることは出來はしない。まだ／＼何だか知らぬが物足らぬ。此の上は自分の身を以て佛に供養し、さうしてこの追慕の心持をあらはさう。斯う思つたものですから、諸の菩薩大弟子及び天龍夜叉といふやうな一切の大勢に自分の志を告げた。これは寶塔を建てたり何かするので、其處に大勢の人が集つたわけでありませう。その大勢のものに言ふには、お前等シツカリ考へるが宜い。自分は今日月



淨明德佛の舍利を供養する。自分が供養するのはどうして供養するかといへば、自分の身を焼いてその光で周囲を照すのである。其の心持は先刻申したやうに、自分の身を苦しめて難行苦行を重ねて、世の中に佛の教を弘め、世の中を照してやるといふことです。斯ういふことを今自分の身に形を以て現はすから、お前達シツカリ見て居れといった。此處に『汝等一心に念ずべし』とあるのは注意すべきです。唯だよく見ろといふのではない、よくシツカリ考へよといふのです。たゞ眼で見たのみではいけない、よく考へて見なければならぬ。佛に供養するといふのは一體如何なる意味か、シツカリ考へて見るが宜い。今此處で自分が其の手本を見せてやるぞといふのです。

この語をなし已つて、八萬四千の塔の前に於て百福莊嚴の臂を然した。『百福莊嚴の臂』といふのは、其の人が高い徳を具へて居るので、本當に誰も仰ぎ見るやうな美しい姿になつて居るのでせう。その美しい相の臂を然すこと七萬二千歳にして、以て佛に供養した。之によつて無数の聲聞を求むる衆、無量阿僧祇の人をして阿耨多羅三藐三菩提の心、即ち佛智を求むる心を發さしめた。成るほど佛の恩といふものは重いものだ、佛といふものは有難いと思ふから、自分達も大に努め勵んで佛の智慧を具へるやうになるまで修行したいと、斯ういふ心持を起したといふのであります。これが本當の報恩の途であります。さうして大勢の人人も此の菩薩と同じやうに、現一切色身三昧といつて、一切の人々の前に種々なる相をあらはして教を説くやうな、不思議なはたらきの出来るやうになり、多くの人を教へ導いた。

爾時諸菩薩。天人阿脩羅等。見其無臂。憂惱悲哀。而作是言。此一切衆生喜

見菩薩。是我等師。教化我者。而今燒臂。身不具足。于時一切衆生喜見菩薩。於大衆中。立此誓言。我捨兩臂。必當得佛金色之身。若實不虛。令我兩臂還復如故。作是誓已。自然還復。由斯菩薩福德智慧淳厚所致。

爾の時に諸の菩薩、天人阿脩羅等、其の臂無きを見て憂惱悲哀して、是の言を作さく、此の一切衆生喜見菩薩は是れ我等が師、我を教化したまふ者なり。而るに今臂を燒きて身具足したまはずと、時に一切衆生喜見菩薩、大衆の中に於て此の誓言を立つ、我兩の臂を捨て、必ず當に佛の金色の身を得べし。若し實にして虚しからずんば、我が兩の臂をして還復すること故の如くならしめん。此の誓を作し已りて、自然に還復しぬ。斯の菩薩の福德智慧淳厚なるに由りて致す所なり。

苦行の報

そこで他の者が今度は心配をし初めた。諸の菩薩、天人、阿脩羅といふやうな者が、喜見菩薩の臂が焼けちぎれて居るのを見て斯う言つた。一切衆生喜見菩薩は吾々に佛の恩に報いる手本を示して呉れた有難い師である。それが今臂を焼いて不具になつた。どうも困つたことだとみな心配をした。さうすると一切衆生喜見菩薩が大勢の中に於て言ふには、いやチツとも心配するには及ばない。自分はこの兩方の臂を捨てたが、臂を捨てた爲に佛の金色の相を得て、今自分は佛と同じやうな境界に達して居る。だから若し自分の智慧が進んで佛に近いものになつたといふことが虚しくなければ、一度無くなつた臂も再び故に戻ることが出来るだらうと斯う言つた。ところが其の言葉が終ると共に兩方の臂がまた故に戻つた。斯ういふことであります



が、有らゆる苦を冒して教を世に弘める人の境界はこの通りであります。外から見るとあゝお氣の毒だ、ああ苦しからうと思ふが、當人はチツとも苦しいことはない。實に有難い、これで佛の境界に達することが出来るのだ。自分は何の心配もない、何の不足も無いと、斯う思つて居るのであります。

日蓮上人が其の通りでせう。日蓮上人が殺されかけたり、島流しになつたりした時に、四條金吾や富木常忍を始め多くの弟子は歎いた。然るに日蓮上人御自身は『かねて存じの旨なれば今更驚くべきにあらず』といつて居る。自分は苦しんで修行を重ねて、自分を佛に近いものにするのだから、何も歎くことはないと言つて居る。他所からはあゝ悲しいことだと思つても、當人は少しも悲しいことはない。これで佛に近くなるのだといふ確信をもつて居るのであります。だから日蓮上人の『開目鈔』の中には、『當世日本國に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華經にたてまつる、名をば後代に留むべし』とある。開目鈔は四條金吾に與へられたものですが、お前は自分が佐渡に流されて寒さと飢と闘ひ、風に吹き曝らされて居るのを歎いて居るだらうが、自分は日本國に於て自分ほど幸せな者は無いと思つて居る。何故なれば生命は法華經にたてまつり、法華經の行者の名を後の世に残し、日蓮が苦しむことに依つて法華經が世の中に弘まる機運を作るのであるから、少しも歎くことはない、斯う言つて居られる。外から見るとはお氣の毒だが、當人はそれに満足する。これが貴い仕事をする人の心の持ち方であります。

極く小さい例をいへば、夏の盛りになつて九十度、百度の暑さの時に、母親が子供を膝の上に抱き上げてボタ／＼汗をたらしながら乳を飲まして居る。外から見るとさぞ暑いだらう、苦しいだらうと思ふが、當人はチツとも苦しいと思はない。ニコ／＼笑つて喜んで乳を飲まして居る。よそから見るとは暑いだらう、苦し

日本國に於て第一に富める者

からうと思ふけれども、其の子が乳を飲んで満足することが、母親に取つては大なる悦びである。だから献身的といふのは外から言ふことで、『私は献身的に働きます……』などと自分で献身的といふべきものではない。自分は悦んでやつて居る、よそから見た時にあゝ献身的だといふのです。これを自分で献身的だと言ふ人がよくありますが、それは魂を打込んでやる人ではない。此の菩薩の事蹟は實に貴い教訓でありまして、大乘を學ぶ人の心持は誰も斯うあるべきでせう。外から言へばお氣の毒なことだが、當人から言へば大なる悦びである。たゞ自分が佛の境界に近づくといふこと以外に眞の悦びもないわけです。

それでは何故姿が元に還つたといへば、これはこの菩薩の福德智慧の淳厚の致す所であつて、だん／＼と信仰も深くなり智慧も進み、又教を世に弘めるところの働きも洪大であつて、福も徳もスツカリ具はつて来たから、さういふ結果になつたのである。

當爾之時。三千大千世界。六種震動。天雨寶華。一切天人。得未曾有。

爾の時に當りて三千大千世界六種に震動し、天より寶華を雨して、一切の天人未曾有なることを得たりと。

その時に當つて三千大千世界が六種に震動し、天より寶の華を雨らし、一切天人が未曾有なる悦びを得た。天地が震動するとか、華が雨るとかいふことは、この場合のみならず、いろ／＼な場合にありますが、これは天地間のものが皆感動したといふことを現はすのです。人間ばかりでなく、天地間の凡そ生命のあるものはみな佛の教に依つて救はるべきものだといふのが佛教の根本の思想でありまして、法華經の序品から此の

天地間のもの皆感動す



ことは現はれて居ります。人間だけではない、生命のあるものはみな佛性を具へて居るものだから皆救はるべきである。涅槃經の中に『一切衆生悉有佛性』とある、その前後をよく読んで見ますと、人間だけではない、苟くも生命のあるものはみな佛性を有つて居る、佛に近づくべき性質を有つて居ると、斯ういふ意味に取らなければならぬ。それが佛法の眞實の精神です。だから佛の教が必ず世に弘まるといふ時には人間が悦ぶのみならず、天上界から地の下から、苟くも生命あるものはみな悦ぶ筈である。それが大地が震動するとか、天から華が雨るとか、音楽が聞えるとかいふことになつて經文にあらはれて來るのであります。以上が藥王菩薩はどういふ過去の難行苦行の跡があるかと問うたのに對しての、お釋迦様のお答へであります。

佛告宿王華菩薩。於汝意云何。一切衆生喜見菩薩。豈異人乎。今藥王菩薩是也。其所捨身布施。如是无量百千萬億那由佗數。宿王華。若有發心欲得阿耨多羅三藐三菩提者。能然手指乃至足一指。供養佛塔。勝以國城妻子。及三千大千國土。山林河池。諸珍寶物。而供養者。

佛、宿王華菩薩に告げたまはく、汝が意に於て云何、一切衆生喜見菩薩は豈に異人ならんや、今の藥王菩薩是なり。其の身を捨て布施する所、是の如く無量百千萬億那由佗數なり。宿王華、若し發心して阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲すること有らん者は、能く手の指乃至足の一指を然して佛塔に供養せよ。國城妻

子及び三千大千國土の山林河池、諸の珍寶物を以て供養せん者に勝らん。

佛に成るまでの修行

努力が報恩の第一

そこで以上の長物語を終つて、こゝに佛とあるのはお釋迦様のことです。お釋迦様が初めに問を發した宿王華菩薩に告げて言はれる。お前の心に於てどう思ふか。その時の一切衆生喜見菩薩といふのは別の人ではない。今お前の尋ねた藥王菩薩といふのがそれである。人間が佛に成るといふには、永い間の修行を経なければならぬ。生を更へ世を更へて、身を以て佛に捧げ、身を以て教を弘め、さうしていろ／＼苦を凌ぎ難を冒し、その行を重ねることに依つて、結局佛の境界に達するのである。前に善根を積んだその菩薩が、今は又藥王菩薩となつて居る。その身を捨て、布施したことは斯の如くで、無量百千萬億那由佗といふやうな非常に長い間善根を積んだ。その善根を積んだのが今の藥王菩薩であるから、自在の力を具へて居る筈である。であるから宿王華よ、若し發心して佛智を具ふるやうになりたいと思ふ者があるならば、手の指か乃至足の指なりとも佛塔に供養せよ。それは國城妻子及び三千大千國土の山林河池といふやうなもの、或はいろいろな美しい寶を以て供養するよりも勝つて居るぞと言はれた。自分の努力を惜まぬといふことより以上の大きい供養はない。品物を差上げて恩を謝すとか、自分の有つて居る物をみな上げるとか言つても、自分の手の指一本、足の指一本でも無くすことを惜まぬといふやうに、己れを苦しめ、己れの身を犠牲として御恩に報ずるといふことほど大きい御恩報じはない。斯ういふ意味であります。要するに佛教に於ては、自分の心の問題が何より大切なのですから、自分が覺らないで人を覺らせようとしても、それは出來ぬことです。自分の身を苦しめることをしないで、人に努力をしるといつても出來ぬことです。どんなに品物を山ほど積ん



で供養しても、自分が吞氣にして居て供養したのでは眞の供養になりはしない。斯ういふ所は佛教を奉ずる者はよく考へなければならぬことです。自分が吞氣にして居て、金があるからといつて唯だ品物を供養して、それで以て極樂へ行けるだらうといつても、それは斷じていけない。自分で法の爲に盡すといふことが、何を供養するよりも一番功德が大きといふことが此處に丁寧に説いてあるのです。前にもお釋迦様が前の世に檀王といふ王様であつた時に仙人に仕へて、薪を拾ひ水を汲み、身を苦しめて法華經を聞いたといふことがあるが、やはりそれ以來ズット一貫した思想です。自分が骨折らないで何の覺りが得られるものか。斯ういふ思想でズット一貫して居ります。

若復有人。以七寶滿三千大千世界。供養於佛。及大菩薩。辟支佛。阿羅漢。是人所得功德。不如受持此法華經。乃至一四句偈。其福最多。

若し復人有りて、七寶を以て三千大千世界に滿て、佛及び大菩薩、辟支佛、阿羅漢に供養せん。是人の所得の功德は、此の法華經の乃至一四句偈を受持する、其の福の最も多きには如かじ。

法華經の僅かに四句を以て成る所の至て短い偈の一つも受持するならば其の功德は莫大である。此の受持といふのは、心に信じ身に行ふのでありますから、ウツカリして居て受持することは出来ない。一生懸命でなければならぬ。たゞ品物を佛に供養するとか、菩薩に供養するといふことをやるのは、お釋迦様が魂を打込んで説かれた此の法華經の一偈でも一句でも本當に信ずる、その福の多きには及ばないのである。

難を冒す覺悟

これは前にもよくいつてありますが、苟くも佛教の修行をしようといふ者が、骨が折れるから止めるとか、わからない所は後廻しにして、易しい所でまア濟まさうとか、さういふ考を起すべきではない。佛様がお前達は佛と同じに成れるぞと請合つて下さつたが、その代り佛と同じに成るのには骨が折れるぞと戒めて、『此の經は持ち難し』と言はれる。佛には必ず成れる、併しそれには非常な努力を要するぞと言はれる。こは深く味はなければならぬ。佛に成れるが、併し容易なことではなれないと斯ういふのですから、この二つの點を吾々は能く考へなければならぬ。一方には勵まし、一方には戒めて居られるのです。必ず佛に成れるぞ、併しそれには大變骨が折れるぞと斯ういふのです。だから大變難かしいことを覺悟して、その難かしいところを通り抜けたら佛に成れるのである。それを佛に成れるといはれて氣を弛めて、難かしいところが通り抜けれなければ、いつまで經つても唯だ向ふに遠く見えて居るだけの話です。併し又佛に成れるといつて、佛様の勵まされたお言葉を忘れて、難かしいぞと言はれた方だけ聞いて腰が抜けてしまふのではない。必ず佛に成れるといふ大きな希望をもつて之を忘れないやうに、又難かしいぞといふことをシツカリ覺えて居て、その難かしいところを越えて行く。此の覺悟が非常に大事です。

どんな種類の教でも、骨折らずに濟はれるといふことを説いたものは斷じて無い。これは少し言ひ過ぎるやうですけれども、斷じてありません。それなら念佛の教はどうか、念佛門では、少しも教を研究しないで、一切を思ひ捨て、佛様にお委せ申せば極樂に行けるといつて居るではないか。而も易行といつて、行じ易しと書いてあるではないかと言ふ人がある。併し一切を思ひ捨て、佛のことばかりを念ふといふことは、決して易しいことではない。なか／＼さういふ事が出来はしません。心中にはいつもいろ／＼な問題が起つて來

困難は避けられぬ



る。殊に今のやうな難かしい時代に、一切を思ひ捨て、佛を念ふなどといふことが容易に出来るものではない。それを易しいと思つては間違ひです。容易に一切を捨てられはしない。一分間だつて捨てられはしない、一秒間だつて捨てられはしない。絶えずいろ／＼な欲望が起つて来る。それを一切捨て、佛を信じて、どうぞ願ひますといつて頼むやうになるまでには、非常な苦心努力が要る、決して易しいものぢやないのです。一體人間がこの世の五十年や六十年ではなく、未來永劫の生命を幸福にしようといふのに、骨の折れる位なことが嫌ではしやうがない。何の事でも善いものはむづかしいものです。ですから易しいので間に合せて置かうナンといふことは、それはモウ斷じて宗教的生活に於ては許さるべきでない。たゞ誰でも人間だから力の足りないところがある、間違ふこともある。間違つたら直して行つたら宜い、轉んだら起きて行つたら宜い。轉んだり起きたりして行く間に、心の根本さへシツカリして居れば、轉びきりに轉ぶものぢやなく、起き上つて幾らかづゝ佛の境界に近づいて行ける。それを目標にして、骨の折れることは覺悟で進んで行かなければならぬ譯です。

精進が肝要

それならば例へば法華經のやうなお經ばかり初めから讀んで居て、他のお經は讀んではならないかといへば、それは其の人に依つては小乗の低い方のお經から始めるのもよろしからう。それは低い教を學んでも、それを手懸りとして終には佛の御本意が解るやうにもなれるのだから、いつ迄も努力を緩めまいといふ覺悟さへあれば、それは低い方の教からだん／＼讀んで行つても差支ないでせう。たゞ低い方を讀んでそれで満足して間に合せてしまふならば、いつ迄も佛の境界まで進むことは出来ないわけです。如何なる經典を讀むにしても、最も大切なのは心の持ち方です。法華經ばかり讀んで居るとは誰も言はない。日蓮上人が法華經

を弘められるのにも、どんな經典のことも自由自在に引いてあるから、博く讀まれたに相違ない。又弟子が他の經を讀んでいけないならば引用もされないでせうから、それは讀んでも宜いにちがいない。無論法華經を信ずる人でも他の經を讀んで宜いが、たゞ常に佛様の眞實の教といふものを目標にして、それが本當に自分のものになるまでは、どんなに骨が折れても修行しよう、どんなに苦しくてもそこは覺悟して行かうといふ此の覺悟はシツカリ立て、置かなければならぬと思ひます。兎に角難を冒さう、骨を折らうといふ覺悟だけはなければならぬ。尤も昔の人がやつて骨の折れたことで今骨の折れないこともありませう。昔の人が樂にやつた事で今骨の折れることもあるでせう。例へば大勢の前で題目を唱へれば、それで大きな功德だと日蓮上人は仰しやつた。それは鎌倉時代に大勢人の居る所で題目を唱へるといふことは命懸けです。誰がやつて来て首を斬るか、誰がやつて来て棒で殴るかわかりはしない。それだから大勢の前で大きな聲で題目を唱へるといふことは、これは本當に命懸けである。それは固く法を信ずる心の現はれであるから、大きい聲で高らかに題目を唱へるのは大なる功德だと斯う仰しやつた。併し今東京の大通りで聲高らかに題目を唱へても、誰も首を斬りにも來なければ、棒で殴りにも來はしない。誰でも聲高らかにやれる。斯ういふ時代に題目を唱へるだけでモウ佛に成つたと輕々しく考へてはいけない。

昔骨の折れたことで、今は骨の折れないことも随分ある。それだけを今やつて、モウこれで宜からう、他のことは御免蒙るといふやうな考へてはいけない。兎に角骨が折れても苦くても、自分が佛の境界に近づいために何でもやらう、教を弘めるお役に立つことなら何でもやらう。この決心、この覺悟が根本的に大事です。今時『自分は命は惜まない』と言つても、誰もお前の命を呉れといふ人はありません。首を取りに

根本の覺悟



來ないのを見越して、そんなことを言ふのは、これほど狡い話はない。そんな事を公言するには及ばぬが、どんな苦しい事があつても、どんな辛い事があつても乗切つて行かうといふ根本の覺悟が必要です。これは甚だくだいやうであります。そこをシツカリ捉まへませんと、信心といふものがたゞ形式になり、眞似事になつて、俳優が舞臺でやるのと同じになる。それでは佛に對してすまない。本當に經典の一字一句をよく味ひまして、その精神を自分のものにして行くといふことに努めなければならぬと思ひます。これは同じやうなことを大變にくどく申しましたけれども、大事な點でありますから、たゞこれを昔の夢物語のやうに見ないで、佛の恩の報ずるといふ事が如何に命懸けの事であつたかといふ、その點をよく味うてお互ひの模範としたいと思ひます。

宿王華。譬如一切川流江河。諸水之中。海爲第一。此法華經亦復如是。於諸如來所說經中。最爲深大。

宿王華、譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し。諸の如來所說の經の中に於て、最も是れ深大なり。

川や溪の水がどんなにあつても、海に比べると到底及ばない。この海が第一だといふことは、海が唯だ廣いといふだけの意味ではないので、何處の川の水でも何處の溪の水でも、結局はみな海に注いで、海に依つて纏められるのでありますから、さういふ意味が含まれて居るのであります。法華經が唯だ他の經よりも勝

法華經に依つて統一せらる

れて居るといふだけでなしに、法華經の中に説かれた教、つまり佛様の本當の心持を打明けられた教に依つて、一切の教が統一される。斯ういふ意味が含まれて居る筈であります。人間がいろ／＼の事を習つた所が、それは結局何の爲か、結局何に歸するののかといふ縮括りがなければ、徒らに多くを學ぶといふことは善い事ではない。海に總ての水が注ぐ如くに、佛の御心持を自分の心持として、大慈悲を以て一切の人に接するといふ、さういふ所に一切の教、一切の修養が纏められなければならぬ。それを此處に言つてあります。法華經は諸の經の中に於て最も深大である。さうして有らゆるものを纏める力を有つて居るのだと言はれるのであります。

又如土山黑山。小鐵圍山。大鐵圍山。及十寶山。衆山之中。須彌山爲第一。此法華經亦復如是。於諸經中。最爲其上。

又土山黑山、小鐵圍山、大鐵圍山及び十寶山、衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し、諸經の中に於て最も爲れ其の上なり。

土山黑山、小鐵圍山、大鐵圍山、十寶山といふのは、これは印度にある重なる山でありませう。その山の中に於て須彌山といふものが第一であると同じやうに、法華經も亦諸經の中に於て最も其の上に位するものである。これも須彌山が一番高いといふだけでなくて、世界の中央に須彌山が在るといふことが昔から印度には言ひ傳へられて居るのであります。今では世界は圓いといふので、何處が中央といふこともないでありま

法華經が中心



せうが、昔の印度人の考へでは、世界の中央が須彌山である。須彌山が中央にあつて、その周圍に山があり海があるといふやうに考へて居た。須彌山が唯高いといふだけでなく、世界の有らゆる土地を統一する中央になつて居るといふ考へです。法華經も亦その如く、有らゆる教を統一し、有らゆる教の中央となつて、總ての教を纏め上げて行く力があると思はれて居るのであります。法華經が貴いといふことを考へるには、やはりさういふやうな意味をよく味つて行かないと、唯だこれが上だと言つて、法華經を信するものが一人で威張つて居るやうなことでは至て詰らぬことでもあります。何故法華經が上であるか。これは有らゆる教を統一し、有らゆる思想の中心になつて行けるから、さういふ所に貴さがあると考へなければならぬのです。

又如衆星之中。月天子最爲第一。此法華經亦復如是。於千萬億種諸經法中。最爲照明。

又衆星の中に、月天子最も爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復た是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て、最も爲れ照明なり。

法華經は人の心を明るくする

又天には星が數限りなくあるけれども、その中で月が一番明るいものであるやうに、此の法華經も亦あらゆる經法の中に於て最も明かである。これは又法華經の特色を能く現はして居るので、この法華經は人の心を明るくして行くものだ、斯ういふのです。教の力といふものは、人の心の闇を除いて、人の心を明るくするものであります。世間では動もすると宗教といふものを兎角暗つぱいものゝ如くに思つて居る。世の中

が厭はしいとか、人生は夢のやうなものであるとかいふやうなことが屢々經典の中などにも見えて居ますが、法華經を読んで見ればさういふことは更にない。非常な明るい教であつて、人間に最も大なる希望を與へ、人間に最も大なる力を與へ、最も大なる悦びを與へるものである。まことに人生の照明である。一切の闇を除いて、人の心をも世の中をも本當に明るくするものだといふことは、よく本文を読んで見ますれば解ることでもあります。そのことを譬へて、數限りなく星があつても月が一番明るいやうに、この法華經の教もいろ／＼な教の中に於て一番明るい教である、世の中をも人の心をも明るくするものであると、斯う言はれるのであります。

又如日天子能除諸闇。此經亦復如是。能破一切不善之闇。

又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此の經も亦復た是の如し。能く一切不善の闇を破す。

それから又太陽が東の空に出れば、闇がなくなつて世の中が明るくなると同じやうに、此の經も亦能く一切の不善の闇を破る力を有つて居る。『不善の闇』といふのは面白い言葉であります。明るいとは何處が違ふかといへば、暗いといふのは明るさが足りないことです。その如くに悪いといふのは善が足りないこととて、まるで根本から異ふのではない。だから『不善の闇』であります。悪い事をするといふのは、善い性質が足りないからである。暗いといふのは明るさが足りないのだから、明るさを増して行きさへすれば、幾らでも善くなつて行く筈である。それで要するに悪人を憎まないで、寧ろ慇懃といふ思想はそこから出て

法華經は闇を除く



來る。『可哀さうに、智慧分別が足りないのだから、智慧を足してやれば、だん／＼善くなつて行くだらう』といふことを考へなければならぬ。佛様が一切の人に教をお與へになるのは皆それであつて、暗い心持を明るくする、力の無い者、智慧分別の無い者に力を與へ智慧分別を與へる。その爲にいろ／＼な教をお説きになる。チヨウド太陽が出て闇がなくなるやうに、この法華經の貴い教が弘まつて行くと、人の心の闇を打破つて、世の中をモット明るいものになることが出来るのであります。

又如諸小王中。轉輪聖王最爲第一。此經亦復如是。於衆經中。最爲其尊。

又諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く、此の經も亦復た是の如し。衆經の中に於て最も爲れ其の尊なり。

法華經に導かれる

又諸の小さい國王の中に、轉輪聖王といふ非常に徳の高い王が出れば、その王が有らゆる國を皆統一することが出来る。さうしてその轉輪聖王が最も第一と言はれて居るのと同じやうに、此の法華經もその通りである。いろ／＼な經の中に於て最も貴いものである。一番上に立つものである、多くのものを導いて行くべきものである。この『尊』といふのは唯だ上に立つといふだけではなくて、他の者を導いて行くといふやうな意味がある。佛様を『世尊』といふのは、世の中の人が皆尊ぶといふことであるが、尊ぶといつても唯だお辭儀するのではなく、世の中の人間をみな率ゐて行く、導いて行く力があるといふ意味で、これを『尊』と言ふ。吾々も自分の國が善い國だ、自分の奉ずる教が善い教だと言つて、他を抑へ付けて一人で偉がつて

居るといふのは非常に狭い考へ方である。日本が木當に善い國ならば、日本が先へ立つて他の國を導いて皆を善くすべきである。佛教が一番善い教であれば、他の教を統一して、みな一緒に救はれるやうにしてやるべきである。他の者を捨て置いて自分だけ善くならうといふことは、それは決して本當の尊い道ではない。法華經を信ずる人はそこを能く考へて置かなければならぬ。動もすると法華を信ずる人はすぐ喧嘩腰になつて、他の者を追拂つて自分の方だけ偉くならうといふやうに傾き易いけれども、さういふことは本當に尊いことではない。であるから法華經が最尊だといふのは、一番上に立つて總ての者を導いて行く力があると斯ういふ意味に解すべきであります。

又如帝釋於三十三天中王。此經亦復如是。諸經中王。

又帝釋の三十三天の中に於て王なるが如く、此の經も亦復た是の如し。諸經の中の王なり。

諸經の王

それから又帝釋天といふ神様が三十三天の中に於て王であると同じやうに、此の法華經も諸經の中の王である。これも他のものを統一する、又導いて行くといふやうな意味が無論含まれて居る譯であります。

又如大梵天王。一切衆生之父。此經亦復如是。一切賢聖。學無學。及發菩薩心者之父。

又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此の經も亦復た是の如し。一切の賢聖、學無學、及び菩薩の心を



發す者の父なり。

法華經は父

大梵天王といふ天上界の神が一切衆生の父であるといふのは、これは印度の舊い時代からの言ひ傳へでありまして、梵天王といふものは人間をみな支配し、人間の禍福吉凶その他のことをみな梵天王が定めるのであるといふやうな言ひ傳へがありますから、それに基いて大梵天王が一切の衆生の父であると言つたのであります。その如くにこの法華經も、一切の賢聖、學無學及び菩薩の心を發する者の父である。『賢聖』とは智慧のある、徳の勝れた者のこと。學無學といふ中で、『學』とは是れからまだ學ぶべき餘地のある者。『無學』とはもう學ぶべき必要もない、スツカリ解つた者。それから『菩薩』は佛様と同じやうに大慈悲の念を以て一切の者に接するものでありますから、その菩薩の心を發して、一切衆生のために力を盡す者には、此の法華經の教といふものがその父となつて、それを教へ導いて行くのである。

又如一切凡夫人中。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。辟支佛。爲第一。此經亦復如是。一切如來所說。若菩薩所說。若聲聞所說。諸經法中。最爲第一。有能受持是經典者。亦復如是。於一切衆生中。亦爲第一。

又一切の凡夫人の中に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、爲れ第一なるが如く、此の經も亦復た是の如し。一切如來の所說、若は菩薩の所說、若は聲聞の所說、諸の經法の中に最も爲れ第一なり。能く是の經典を受持すること有らん者も亦復た是の如し。一切衆生の中に於て亦爲れ第一なり。

一切の凡夫人に比べて見ると、須陀洹とか、斯陀含とか、阿那含とか、阿羅漢とか、辟支佛といふものが勝れて居る。これは前に一二度申上げたことでありますから、一々の説明は略しませう。要するに須陀洹から阿羅漢までは所謂聲聞です。辟支佛といふのは縁覺です。以上は皆小乗の教を學んで、凡夫の境界を離れることの出來たものです。

斯ういふやうな者は菩薩などには及ばぬけれども、普通の迷ひだらけの人間の中に入つて見ると、非常に勝れて居る。それと同じやうに、法華經も是の如く、一切の佛のお説きになつた事、或は菩薩の説いた事、或は聲聞といふやうなものの説いたことなど、つまり大乘小乗有らゆる經典の中に於て、この法華經が最も第一である。これに上越すものはない。

經も持者も共に貴し  
さういふやうに佛様のお心持を有體に打明けられた教といふものは非常に貴いものであるから、能く是の經典を受持する者も亦一切衆生の中に於て第一である。こゝに此の經典を研究する者ともなければ、此の經典の説明をする者ともなければ、又此の經典に就て本を書いた者ともない。『受持すること有らん者』とある。受持とは心に信じ身に持つことです。心に本當に此の經を信じ、又其の信を自分の身の行ひに現はすことの出来る者、それが第一だと斯う言ふのであります。これは短い言葉でありますけれども、他の讀誦とか解説とかいふ言葉を省いて、たゞ受持といふことだけを此處に掲げてあるのに注意すべきであります。本當に教を受持しなければ、物の用には立たぬのであります。

一切聲聞辟支佛中。菩薩爲第一。此經亦復如是。於一切諸經法中。最爲第一。



一切の聲聞辟支佛の中に、菩薩爲れ第一なり。此の經も亦復た是の如し。一切の諸の經法の中に於て最も爲れ第一なり。

大乘經の中  
の第一  
一切の聲聞とか辟支佛（緣覺）これは前にあつたやうに佛の小乗の方の教を修行して悟つた者であります  
が、さういふ者の中に入ると、『菩薩爲れ第一』で、菩薩の方が優れて居る。菩薩は佛の御心持を以て自分の  
心持とし、大きな慈悲心を具へて居る者でありますから、菩薩が第一である。それと同じやうに此の法華經  
も亦一切の諸の經法の中に於て最も爲れ第一である。法華經の中に本當の佛の心持が打明けられて居るとい  
ふのであります。

如佛爲諸法王。此經亦復如是。諸經中王。

佛爲れ諸法の王なるが如く、此の經も亦復た是の如し。諸經の中の王なり。

佛の全身此  
經の中に在

それから佛が諸法の王である如く、此の法華經も亦諸經の中の王である。何故なら前の法師品にもありま  
したやうに、此の中に如來の全身があると云つてあるのでありますから、佛様の全身がスツカリ佛のお遣し  
になつた此の法華經といふ貴い經の中に入つて居ると信すべきです。これは佛様御自身が明言されたのだか  
ら間違ひはない。だから佛の魂を籠めて説かれたこの經の最も貴いことを知らなければならぬ。この教を學  
んで之を實行さへして行けば、佛の御心と自分の心とが通ひ合つて、所謂心に於て佛を見ることが出来るの

であります。そこで佛の最も尊きが如く、佛の魂を打込んで説かれたこの教も尊い。一切の經の中で一番上  
であると斯う言はれて居るのであります。

宿王華。此經能救一切衆生者。

宿王華、此の經は能く一切衆生を救ひたまふ者なり。

一切を救ふ  
そこで又繰返していはれるのですが、此の經には能く一切衆生を救ふ力がある。その救はれるのはどうし  
て救はれるかといへば、佛のやうに心持を持つ時に自分が救はれるのである。大慈悲の念を心に懷いて、世  
の總ての惱める者、苦しめる者に對するやうになれば、心の中に一切の煩惱が無くなるから、自分が救はれ  
て居るのです。だから佛の御心持を本當に説かれた、此の法華經のみが一切の人を救ふ力のあるものだとい  
ふことを言はれて居るのであります。

此經能令一切衆生離諸苦惱。

此の經は能く一切衆生をして、諸の苦惱を離れしめたまふ。

一切衆生の苦み悩みを離れしめるとあるが、其の苦み悩みといふものは何處から起きるのであるか、互ひ  
に小さい自己を中心として、利害損得の打算ばかりをやつて居るから、だん／＼世の中が面倒になつて、苦



苦惱の根源

みや悩みが多くなるのであります。だから苦みや悩みを除かうと思つたら、いろ／＼な利害損得の行掛りを捨てなければならぬ。私共が中學校の生徒だつた時に體操をやつて、鐵棒につかまつたり飛降りたりする。さういふ時に一遍鐵棒に飛附いて、ウンと前の方へ飛ぶのですが、その時に早く鐵棒へかけた手を放せば宜いだけでも、なか／＼危くて放せないものです。先生が『手を放せ／＼』と言ふがなか／＼放せない。それでうまく飛べない。思ひ切つて手を放せば體が前へ出るのだけれども、なか／＼放せない。これを放すといふことがなか／＼難かしいのです。それと同じやうに、小さい利害損得を離れてしまへば、ピユーツと自分の體が前へ出て、本當の明るい天地がそこに開けるのでありませう。ところがこれを口で言ふことは易しいが、實際にやつて見ればなか／＼出来ないのです。いろ／＼な利害損得の關係が自分に付き纏うて居る。これをスツカリ離れ切るといふことは難かしい。併し佛の大慈悲の心持を自分の心持として、自分が一人で生きて居るのではないといふことが本當に考へられるやうになれば、一切の苦惱を離れることが出来る。だからこの法華經の教は一切衆生をして諸の苦惱を離れしめるといふのです。

此經能大饒益一切衆生。充滿其願。

此の經は能く大に一切衆生を饒益して、其の願を充滿せしめたまふ。

心の底の願

一切衆生の願を充滿せしめるといふが、『其の願』とは何であるか。人間は自分で氣の附かない間に、心の底には大きな願が動いて居る。その大きな願とは何かといふと、一切の人と共に生きたいといふ願です。これを皆誰でも持つて居る。唯だ多くの人は自分で氣が附かないのです。『人はどうでも俺さへ宜ければ……』と言つて居るけれども、腹の底にはやはりさういふ願を皆持つて居る。だから人と自分と考へが一致した時に嬉しい。雨の降る日に道で人に逢つて、『降り出しましたネ』と言ふと、向ふの人も『降り出しましたネ』といふ。わかり切つたことを言つて居るけれども人と自分と考へが一致するから氣持がよい。それをこつちが『蒸暑くて困りますネ』と言ふのに、『イヤ僕はチツとも暑くない』ナンと言へば、『變な奴だナア』と不快を感じる。人間は本來さういふもので、何でも一致することが嬉しい。自分が右と言ふのに人も右と言へば嬉しい、自分が左と言ふのに人も左と言へば嬉しい。これは誰でも生れながらにして有つて居る性質です。『人はどうでも……』といふことを言つて居るけれども、本當は『人はどうでも……』ではない。人も自分も考への一致することが望ましいのです。だから大きく言へば一切衆生と共に生きて、共に悦んで、共に幸福になつて居たらこれほど善い事はないでせう。それがなか／＼出来ないから、いろ／＼人生に問題もある譯ですけれども、それが人間の心の底に横つて居る一つの願であります。その願が遂げられない時には寂しい氣持です。人と自分との心がバラ／＼になつて、同じ屋根の棟の下に一緒に住んで居ながら、心は別だといふことを經驗致しました時には、非常に寂しみを感ずるといふのが人情の常であります。だから自分が佛様のやうな心持になつて、他の者の苦しみを一緒に心配してやる、他の者の喜びと一緒に喜んでやるといふやうになれば、それに依つて心の底にある願を満足させることが出来る。斯ういふことを教へるものが法華經の教であると言ふのであります。



如清凉池能滿一切諸渴乏者。如寒者得火。如裸者得衣。如商人得主。如子得母。如渡得船。如病得醫。如暗得燈。如貧得寶。如民得王。如賈客得海。如炬除暗。此法華經亦復如是。能令衆生離一切苦。一切病痛。能解一切生死之縛。

清凉の池の能く一切の諸の渴乏の者に満るが如く、寒き者の火を得たるが如く、裸なる者の衣を得たるが如く、商人の主を得たるが如く、子の母を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く、貧しきに寶を得たるが如く、民の王を得たるが如く、賈客の海を得たるが如く、炬の暗を除くが如く、此の法華經も亦復た是の如し。能く衆生をして一切の苦、一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめたまふ。

法華經の功德

譬へて言へば、清らかな良い水の溢れて居る池の所へ行くと、咽喉が渴いて困つて居る者も皆その水を飲んで、咽喉を潤して満足することが出来る。又寒くて凍えさうな者が火を得れば大變嬉しい。裸の者が着物を得れば非常に嬉しい。また商人が主を得るといふのは案内者のことです。これは印度の昔の習慣でありまして、隊をなして貿易して歩く。よくアフリカの沙漠を駱駝に乗つて行くといふ西洋のお伽噺があります。が、さういふやうな事は印度にもありまして、商人が何十人、何百人も隊を作つて、他の國へ行つて貿易して来る。その時に道が明かでないといふ何處へ行つて何を賣つて宜いか、何を買つて宜いかわからないで困りま

すから、それで適當な案内者、先導して皆を連れて行つて呉れる人が得られた時には、非常に嬉しいわけですから。それと同じやうに法華經を學び得ることも非常に有難いといふのです。又赤ん坊が母を得たるが如く、河を渡るのに船を得たるが如く、病氣の時に醫者を得たるが如く、暗闇に燈を得たるが如く、又貧しい時に財寶を得たるが如く、又人民が王を得て平和な生活に入ることが出来るが如く、賈客の海を得たるが如くである。これも商賣する人が他の國へ行つて貿易をしようと思つた時に、チヨウド良い船に乗込んで海を渡ることが出来れば、その商賣が無事に行きますから有難い。又炬の火が暗を除く如く、この法華經も亦是の如く、能く衆生をして、一切の苦、一切の病痛を離れさせる。之によつて苦みが無くなり、又心の惱みが無くなる、さうして一切の生死の縛が解ける。

生死の縛

『生死の縛』といふのは、前にも屢々言つたやうに、人生の變化の爲に自分の心の自由を失ふことです。唯だ生きる、死ぬと云ふだけの事ではない。世の中には常にいろ／＼な變化が起る。其の度に吾々には直ぐ心に動搖を來すのであります。例へば損をすれば悲しい、ガツカリする。得をすれば嬉しいけれども、又人に憎まれたり嫉まれたりするので煩ひが多くなる。身分が宜ければ卑しまれるから厭だけれども、身分が高くなれば周圍から目を聳て見られる。貧しければ他から侮られるから厭だけれども、金持になれば世間から嫉まれる。だから人生の變化ある度に、善くても悪くても必ず吾々は種々の煩ひを受ける。腹が減つては飢じくていけない、食過ぎれば又苦しくていけないといふやうに、始終變化がある毎に煩ひを受けない者はありませぬ。だから互ひに文句を始終言つて居る。夏になると『どうも暑くて堪らぬ、冬の方が宜い』と言ふ。冬になると『寒くて仕様がな、夏の方が餘程宜かつた』といふやうなことを言つて居る。その内に一生涯



終つてしまふ。それが即ち生死の縛です。人生の變化に依つて始終煩ひを受ける、始終惱みを受ける。善くても悪くても煩ひを受ける。それは凡夫の常であるけれども、どんなつまらぬ境界に身を置いてもそれに安んじ得るやうに、又高い地位に居つたら高い地位に安んずるやうに、富んだ境界に安んずるやうに、種々の境界に在つて、いつも悠々自適の生活が送れるといふには、心の根本の建直しが出来なければならぬことでもあります。然るに法華經の中に教へられて居る教は、さういふ力を與へるものです。生死の縛を遁れしめる力を有つて居るのであります。

若人得聞此法華經。若自書。若教人書。所得功德。以佛智慧。籌量多少。不得其邊。

若し人此の法華經を聞くことを得て、若は自らも書き、若は人をしても書かしめん。所得の功德は佛の智慧を以て多少を籌量すとも、其の邊を得じ。

若し人があつて此の法華經を聞くことが出来て、自からも書き、若くは人をしても書かしめ、さうして此の教を深く味ふやうになれば、その得る所の功德といふものは、佛の智慧を以てどれほど多いか少いかといふことを計算しても、到底計算し切れないほどの大きな功德がある。

若書是經卷。華香瓔珞。燒香抹香塗香。旛蓋衣服。種種之燈。蘇燈油燈。諸香

油燈。瞻蔔油燈。須曼那油燈。波羅羅油燈。婆利師迦油燈。那婆摩利油燈供養。所得功德。亦復無量。

若し是の經卷を書きて、華香瓔珞、燒香抹香塗香、旛蓋衣服、種種の燈、蘇燈油燈、諸の香油燈、瞻蔔油燈、須曼那油燈、波羅羅油燈、婆利師迦油燈、那婆摩利油燈をもて供養せん。所得の功德亦復た無量ならん。

此のお經を書いて、それにいろいろのものを供養する。いろいろの香とか、旛とか、天蓋とか著物とか、種々の燈、其の中には牛乳の油で點した燈、木や草から取つた油で點した燈、或は香のある油で點した燈、それは瞻蔔とか、須曼那とか、波羅羅とか、婆利師迦とか、那婆摩利とか、此等は香のある草や木の名前で、一々穿鑿する必要もないでせうが、さういふやうな香のよい油を以て燈を點してさうして供養するならば、得る所の功德は亦無量であらう。

經卷に供養するといふことは、要するにその經卷の中の教に對する自分の感謝の意を表はすことであります。感謝の意を表はすといふことは、世の中の多くの人々に感激を與へて、共にこの教を信するやうな氣分を起させるのです。それだから供養するのが貴いといふのであります。ですから佛様に御供養申上げる時には、必ず佛様は『善哉々々』と言つてお讚めになる。佛様ともあらう者が、人に物を貰つたからといって嬉しい筈はない。併し佛に供養しようといふ心持は佛の恩に感謝する心持であつて、佛の恩に感謝すれば必ず自分で善い行ひをしようといふことになるのだから、そこを捉へてお讚めになる。そのお讚めになるのは、



供養の貴き  
所以

佛様御自身の爲にお喜びになるのではない。供養する人の心持が清らかになつて佛に近いものになつたから  
お讚めになる。子供が遠足などに行つて家へお土産を買つて来る。私の子供なども學校から方々へ遠足に行  
くと、よく羊羹などを買つて来る。私は羊羹など餘り好かないからどうでも宜いと思ふけれども、親に羊羹  
を買つて来ようといふ心持が善いから、『よく買つて来て呉れた、有難う』と言つて喜ぶ。それと全く同じこ  
とです。佛様は讚められるから嬉しいのではない。『佛を讚めるやうな心持になつたのが結構だ、その心持で  
大に信仰を勵め』と、斯ういふ心で、佛に供養することを非常にお讚めになる。それで今法華經に供養する  
のも亦その通りでありまして、法華經の中に説かれて居る精神が能くわかれば、これに感謝する心持が必ず  
起るのであります。そこで所得の功德は亦無量であると言はれる。

宿王華。若有人。聞是藥王菩薩本事品者。亦得無量無邊功德。

宿王華、若し人有りて是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦無量無邊の功德を得ん。

宿王華よ、若し人が有つて此の藥王菩薩本事品を聞いて、藥王菩薩が自分の臂を焼いて佛に供養し、佛に  
對して感謝の心を現したといふことを本當に聞かざらば、其の功德は莫大なものであらう。此の聞かざらばといふ  
のは唯だ耳に聞くだけではない、それを聞いてその心持が能くわかりますれば、自分も佛の功德に感謝して、  
佛の御心持を以て自分の心持とし、世の中の多くの人を救ひたいと思ふやうになりますから、その心持に依  
つて無量無邊の功德を得るといふのです。

若有女人。聞是藥王菩薩本事品。能受持者。盡是女身。後不復受。

若し女人有りて、是の藥王菩薩本事品を聞きて能く受持せん者は、是の女身を盡して、後に復た受けじ。

若し女の人が有つて此の藥王菩薩本事品を聞いて、これを能く受持し、これを心に信じ又身に實行する者  
があるならば、今の一生涯は女で終るだらうけれども、後に女の身には生れないであらう。この事は前にも  
申しましたやうに、大乘を學んで菩薩の行を積み佛に成るといふ上に於ては、男とか女とかいふ區別はない  
譯でありますから、もう一遍女にならないといふことは、本當を言へば男にも女にも拘はらないといふこと  
です。唯だ女にならないといふ簡単なことではない、男女といふ區別を超越して、もつと勝れた所の生活を  
ズット続けることが出来るだらうと、斯ういふ意味に取ればよくわかるのであります。

若如來滅後。後五百歲中。若有女人。聞是經典。如說修行。於此命終。即

往安樂世界。阿彌陀佛。大菩薩衆。圍繞住處。生蓮華中。寶座之上。

若し如來の滅後、後の五百歲の中に、若し女人有りて是の經典を聞きて、説の如く修行せば、此に於て命  
終して、即ち安樂世界の阿彌陀佛、大菩薩衆の圍繞せる住處に往きて、蓮華中の寶座の上に生ぜん。

後の五百歲といふことは、これは大體『大集經』などの中に説かれて居ることに基くのでありまして、お



釋迦様が御自分の亡くなられて後の時代のことを豫め洞見されて、五つの五百歳に分けて居られるのであります。

五百歳

- 第五百歳——解脱堅固時——正法
- 第四百歳——禪定堅固時——
- 第三百歳——多聞堅固時——像法
- 第二百歳——多造塔寺堅固時——
- 第一百歳——闢諍堅固時——末法

解脱堅固の時

先づ第一の五百歳、佛が入滅せられてから後の最初の五百年の間は解脱堅固の時であらうといはれる、此の堅固といふのは間違なしといふ意味です。お釋迦様が御入滅になつた後の五百年ぐらゐの間は、お釋迦様の直接の感化が世の中に及んで居りまして、お釋迦様の偉大なことが皆に記憶されて居りますから、大勢の人々がお釋迦様の仰しやつたことを疑はずに實行して、さうして世間の苦しみや悩みを脱れることが出来る。これは確かである。即ちこれが解脱堅固の時代で、所謂實行時代であります。お釋迦様のやうな偉大な方が出て右向けと言はれ、ば皆右を向く、左向けと言はれ、ば皆左を向く。何故だらうと言つて考へる必要はない。佛様は非常に徳の高い方でありまして、さういふ方が教へられることは皆その通り實行する。だから釋尊の御入滅になつた當座の所は解脱堅固で、理窟を言つて居る者はない。皆佛をお手本にして實行を主にする。さうして苦みや悩みを除くといふ時代が暫く続くのであります。これは佛様でなくても、總ての偉大な人の感化といふものはさういふものでせう。

禪定堅固の時

それから第二の五百歳、即ち佛滅後五百年から千年頃までの間。この時代になりますと禪定堅固の時になる。此の第二の五百歳といふ頃は、モウ佛の時代を去ること大分遠く、又世の中がだん／＼複雑になつて、いろ／＼面倒な問題が多くなりますから、どうしたら心の悩み、心の煩ひを除くことが出来るかと考へ、心を整頓し、心を静める工夫を凝す時代、それが即ち禪定堅固の時です。斯うなるとお釋迦様のなされた事をその儘習ふといふことで満足しないで、自分で種々工夫する。どうしたら斯んなゴタ／＼した世の中を靜かにして、こんな面倒な問題を解決することが出来るかと、思案工夫を凝すのです。これが所謂禪定堅固の時代であります。

多聞堅固の時

それから第三の五百年、即ち佛滅後千年を過ぎて後の五百年間となれば、今度は多聞堅固の時代となる。愈々世の中が複雑になり、愈々以て問題が多くなるから、多くいろ／＼な人の説を聞いて、さうしてあの説やこの説を引比べて研究することが主になる時代です。今までの宗教の發達を見ると正しくその通りであります。だん／＼理窟の方に偏つて行き、比較研究が主になつて實行は二の次になる。『誰は何と言つて居る、彼は何と言つて居る』『あの本には斯うあつて、此の本には斯うある……』そんなことばかり比べて、その穿鑿に目を暮す。斯ういふ時代が来るだうと言はれて居るのですが、正しくその通りです。今まで佛教發達の筋道を見ますと、正しく斯うなつて來て居る。人々はいろ／＼な事を知つて居るけれども、結局何をしだ……』と論じあつて居る。甚しいのになると何枚目に虫喰ひがあるといふことまで憶えて居る人がある。斯ういふやうに比較研究をやつて居るが、結局自分に得る所は、何にもないといふやうな人が多いのです。



多造塔寺堅固の時

それを通り過ぎてしまつて第四の五百歳になると、多造塔寺堅固の時代になる。今度はモウ幾ら研究しても研究も研究し盡せないのだから、せめては塔を建て寺を建て、自分の一家一族の冥福でも祈らうかといふことになる。チヨウド日本の徳川時代までの間の大體の様子はさういふものであつたでありませう。これが多造塔寺堅固の時代であります。

鬪諍堅固の時

それからそれも過ぎてしまふと、モウそんな事さへもしない。形式的に寺を建てるとか塔を建てるとかいふことさへもしない。第五の五百歳になりますと鬪諍堅固の時代です。互ひに争ひあひ闘ひあふのですが、要するに人々が皆利己的になり、何でも自分の主張を通さうとする。みな『俺が……俺が……』といつて我を張る者のみになる。『俺は斯う思ふ。』『俺は斯う考へる。』『俺の立場は斯うだ』……皆自己を主張することばかりやつて居る。現代がチヨウドそれです。皆が一個人としては自己の都合ばかり考へる。又一つの宗旨としても自分の宗旨の擴張ばかりを主にする。又國としても自分の國の勢力ばかり伸さうとする。それが鬪諍堅固です。今の世は正しくそれです。皆自分の特色を發揮したいやうな氣分で、世間の人の言ふ通りになつて居たのではどうも氣が利かない、何か變つた事をして見ようといふ考へばかり起す。さうして人を驚かさなければ氣が濟まなくなる。『俺は斯ういふ意見を有つて居る、どうだ恐入つたか』といふやうに、人を驚かすことばかり考へて居る時代、それが鬪諍堅固の世の相です。互ひに眼前の驚かし合ひをするのみで、遠い先のことなどは考へない。斯ういふ風の時代です。

これが昔から五つの五百歳と言はれて居ります。さうして此の初の二つの五百歳を併せて『正法の世』と言ふ。正法といふのは教の實行されること。唯だ理窟を捏ねて居るのではない、その教をみな身に行ふとい

ふ心掛を失はない時代です。それから次の二つの五百歳を『像法の世』と言ふ。像はかたちで、形だけ教が残つて一向實行されない。形だけ綺麗に整つて、宗教の本などは澤山出来、宗派は澤山に分れて大層立派に見える。けれども魂が抜けてしまつて實行に疎くなつて居る。それが像法の世です。それから鬪諍堅固といふ一番終りの時代は所謂『末法の世』であります。末法とは法が無くなる時代といふことで、末といふ字は『すゑ』といふ意味ではない、ここは打消の意味で、法が無いといふことです。法といふものは無くなつてしまつて、たゞ利害損得の關係から恐ろしく激しい争ひばかりして居る時代です。

この頃世の中の様子を見ますと、まことに末法の世の鬪争堅固と思はれる事が多い。例へば吾々が子供の頃には、新聞の廣告を見ても『今度斯ういふ本が出来たからどうぞお買ひ下さい』、『今度斯ういふ新しい薬が出来たからどうぞお買ひ下さい』といふやうに、丁寧な廣告を出して居た。ところが此の頃はそんな丁寧な言葉で言つては居ない。『斯ういふ本を讀まない者は馬鹿だ』『この化粧品を使はなければ美人になれないぞ』といふやうに皆お互ひに威かしあつて居る。どういふ文句を使つたら人が吃驚するかと、そんなことばかり考へて居る。斯ういふ時代は實にどうも物騒な時代であります。國と國との關係でもさうです、世界中が皆さうです。正しくこれは末法の世であります。

末法の世の一轉機

併しさういふ末法の世に至つて、世の中が極度に險惡になつて、さうして人の心がズット緊張して來る時、それが法華經のやうな貴い教の行はれる時だといふことを佛様が言つてゐらつしやるのは、洵に尤もなことであります。斯うなると世の中が篩ひ分けられるのです。世の中が平和で穩かな時には、善い人でも悪い人でも大抵微温的な生活で濟んで行きます。大變な善人もなければ大變な悪人もない。互ひに宜い加減にやつ



て居れば、それで済んでしまふ。ところが今のやうな激しい時代になると、生温いことではやれない。それで悪い奴は思ひ切つて露骨に悪い事をする。『嘘を吐いて何が悪いんだ』といふやうなことになる。嘘を吐いて恥かしいなどといふ、そんな心は勿論起しはしない。酒を飲んで、ふざけて騒ぐのでも隅の方でやらないで、銀座の真中でやる。『そんなに酒を飲んではいかぬぢやないか』とでも言ふと、『ぐづ／＼言ふな、俺の金を俺が使ふのに何が悪い……』羞かしいとか、遠慮するとかいふ氣持が無くなつて、何でも大ぴらでやる。斯うなつて何事でも露骨になる。實に鬪諍堅固の世の中でありまして、淺ましい世の中だと思はれます。その併し斯ういふ時代に生れて、斯の如く淺ましい事を多く見せ附けられて、『是ではならぬ』と心から思ふ人も出る。『これではいかぬ、斯んなことをして居ては、人間が何の爲に生れて來たのか、世の中に生れた意味がわからなくなつてしまふ。何とかしなければならぬ』斯ういふやうな心持の人も出て來る。斯ういふ人が眞劍に教を求めぬ。

斯ういふ人は、『自分の家の宗旨が念佛だから南無阿彌陀佛だ』といふのでもなければ、『代々法華だから南無妙法蓮華經』だといふのでもない。心から何か本當のものが欲しいと思つて求めるのでありますから、本當に從來の行掛りを捨て、心から教を求めて居るのであります。

眞の求道者

これは眞劍な要求であります、命に懸けての要求であります。斯ういふ人を捉まへて、『お前は念佛の家に生れたから阿彌陀様にして置け』『法華の家に生れたから法華經にして置け』と言つても駄目です。さういふ人はお經を一通り讀んだからもう解つたといふやうな、淺薄なことは言つて居ない。今の世の中でも斯ういふ人は澤山は出ないけれども、此の人の要求は心の底から出る要求でありまして、これは名前の爲でもない

ければ利益の爲でもない。人に褒められる爲でも己れを示す爲でもないのでありますから、斯の如き堅固な、斯の如き眞劍な心を持つた人が、假令少數であらうとも、その心の貴い力が消える筈はない。それを法華經の中に言つてあるのです。佛の悪口は言つても、斯ういふ末の世の中で法華經を信する人の悪口を言つてはいかぬ。佛様を敬ふやうに敬つてやれといふのは、今申したやうな人のことです。斯ういふ人は最初は至つて少數でせう。併し日蓮上人も言はれるやうに、『火は多けれども一水に消えぬ、惡は多けれども一善に勝つことなし』であります。さういふ眞劍な要求を有つて居る人が次第に多くなつて正しい教が復活するので、これを吾々は念願とすべきだらうと思ひます。

根本の問題

本當に善根を植ゑるといふのは斯ういふ心持を作ることとせう。人に教を説いて聽かせるとか、或は人を誘つて正しい道に入らしむるとかいふことよりも、モウ一つ先決問題として、自分がさういふ眞劍な心持になれるかなれないかといふことをよく考へて見るべきでせう。どうしたら教が弘まるか弘まらないかといふやうなことは第二であります。お互ひが命に懸けて眞實の教を求めるといふ已み難いところの熱情から、どうしても佛様の眞實の御心持を掴まなければ承知しないといふ心持になれるかなれないか。そこが根本の大問題であります。甚だ悪口を言ふやうですが、今の世に法華經を弘めるといふ人が、此の根本の問題を後廻しにして、大勢の人を集めて、旗や萬燈を立て、騒ぐといふことをやつて居るから、正しい教といふものは弘まりませぬ。眞實のものは捨て、置いて、第二、第三の問題ばかり振廻しても、本當の教は弘まるものではない。併し末法の世に本當のしつかりした人が出ると、佛様の仰しやることに間違はないでせうから、吾は今の世の中は厭な世の中だと思ふけれども、さう失望することなく、後の五百歳に至つて、必ずさうい



ふ機運が開けて行くといふことを信じて宜からうと思ひます。

そこで『後の五百歳の中に若し女人有りて、是の經典を聞きて説の如く修行せば』とある。『説の如く』といふのはお釋迦様の仰しやる通りに修行することです。末の世は鬪諍堅固の世であるから宜い加減ではない。『説の如く』お釋迦様の仰しやる通りの心持で以てこの法華經を修行するならば、その修行することに依つて、『安樂世界の阿彌陀佛、大菩薩の圍繞せる住處に往きて』、これは前にも阿彌陀様のことがありましたが、要するに憂ひのない、惱みのない、共に喜んで居る世界を安樂世界、若くは安養世界とも申します。さういふ世界を此土に實現することが出来るだらうといふのです。蓮の華の寶座の上に生れるといふのも、即ち心の中にさういふ世界が開けるだらうといふことであります。

不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚愚癡所惱。亦復不爲憍慢嫉妬。諸垢所惱。

復た貪欲に惱まされず、亦復た瞋恚愚癡に惱まされず、亦復た憍慢嫉妬諸垢に惱まされじ。

憍慢と嫉妬

さうして貪欲に惱まされず、また瞋恚愚癡に惱まされないうやうになるだらう。これは前にも申しましたやうに、貪欲と瞋恚と愚癡とは、貪瞋恚の三毒と申しまして、一切の迷ひの根本でありますから、本當に佛様の御心持を以て自分の心持とする人であれば、貪欲とか瞋恚とか愚癡といふものには惱まされないうやうに違ひない。それから又憍慢嫉妬といふやうなろくな垢、此の『垢』といふのは迷ひのことです。斯ういふ迷ひにも惱まされないうやうになるだらう。憍慢嫉妬といふのは必ず相伴ふもので、憍慢は必ず嫉妬を生み、嫉妬

は必ず憍慢を生むのです。憍慢といふのは、自分の足りないことに氣が附かないで、何でも自分が善いと思ふことです。併しいかに自分が善いと思つても、そんなに人間の心がマルで痺れてしまふものではない。人間は兎に角物を考へる力を有つて居りますから、幾ら自惚れがあつても自分の足りないことに氣が附く。さうすると嫉妬の念が起る。チョット鏡の前で自分の顔を見て、鼻筋も通り、口許も尋常で、眼がバツチリして居て好いナと思つても、鏡をジツト見て居れば、どうも頭のこゝの所の毛が縮れて居て工合が悪い……といふことに氣が附く。さうすると今度は頭の髪の眞直な人を嫉妬するやうになる。憍慢は必ず嫉妬を生む。又嫉妬する者は何とかして自分の良いことを一つでも探し出して、人に誇りたいと思ふので、嫉妬は必ず憍慢を生む。要するに斯ういふ輩は所謂柔軟心が無い。憍慢嫉妬といふのは柔軟心が無い所から出て來るのであります。柔軟心といふのは飽くまで益を求めて已まない心持です。どうか佛様と同じやうになるまでは自分の缺點を直し、自分の足りない所を足して行かうといふ心持です。その心持がないと憍慢となり嫉妬となる。そんな心持の人が世の中を眞暗にして、面倒を多く起して行くのですが、此の法華經を信じ、法華經を説の如く修行しようとする者であれば、そんな憍慢とか嫉妬とかいふやうな、いろ／＼な迷ひに惱まされることはない。

得菩薩神通。無生法忍。得是忍已。眼根清淨。以是清淨眼根。見七百萬二千

億。那由佗。恒河沙等。諸佛如來。

菩薩の神通、無生法忍を得ん。是の忍を得已りて、眼根清淨ならん。是の清淨の眼根を以て、七百萬



二千億那由佉恒河沙等の諸佛如來を見たてまつらん。

無生法忍を得る

さうして菩薩の神通力を得るであらう。『神通力』は如何なる境遇にも自在な力で、煩惱がなくなれば通力が得られるといふことは前にも申しました。それから『無生法忍』といふのは『生』は生死のことで、『無生』は生死に惱まされないことです。生死といふのは前にも言ふやうに世の中の變化のことで、その世の中の變化に逢つて少しも心が動揺しないのです。『忍』といふのは續くことです。吾々は續かないからいけない。吾でも時々佛様のやうな心持も起きるけれども、それが續かないで、直ぐ又元の凡夫に戻つてしまふ。例へば子供が道に轉んで泣いて居るのを見れば、可哀さうだと心から思ふのです。その時には自分の心持は佛様と同じやうになつて居る。ところがその子供の傍を通り過ぎてしまふと直ぐ忘れてしまふ。それだからいけない、忍でなければならぬ。忍とは續くことです。生死といふ世の變化に少しも影響されないやうな心持が續いて持てるやうになるといふのです。『此の忍を得已りて眼根清淨ならん』。心が少しも動揺せぬから、何物を見ても其の眞實の相がわかつて、決して自分の都合や自分の勝手な方に偏るといふことはないから、この清淨の眼で七百萬二千億那由佉恒河沙といふやうな澤山の佛様を見ることが出来る。

諸法の實相を知る

このことは前にも簡單にお話したことがあるのですが、眼で物を見て、物の眞實の相が見え、耳で物の聲を聞いて、眞實の聲が聞えるといふのは、眼や耳を支配する心の働きが發達して居るからです。それでなければ見違へたり聞き違へたりするでせう。心に一切迷ひがなくなり、智慧が本當に發達してから、眼を見開いた時に、初めて物の眞實の形が見える。耳を聳てた時に、初めて物の本當の聲が聞える。斯ういふわけがありません。それであるから色や形以上のものがシツカリ捉へられて、そこで初めて本當の色や、本當の形を見ることが出来る。聲や匂ひよりも以上のものをシツカリ捉へ得て、初めて本當の聲を聞くことが出来る、本當の匂を嗅ぐことが出来る。それがお經の中には『諸法の實相』といつてあります。總ての物の本當の相が自分の心に映るといふのは、心が清淨であるからです。又心が清淨であれば佛様が見えるといふことは、ナニも佛様の姿が目の前に浮ぶといふことではない。心がそこまで清淨になれば、見る物はみな眞實の相、聞く物はみな眞實の聲といふことになりすから、毎日の生活といふものが皆意味を有つて來て、毎日が本當に有難い。即ち毎日佛と共に居る心持で送るので、吾々はなか／＼急にさういふ所には行きませぬが、さういふ風に解釋すれば、こゝの經文はスラ／＼と意味がわかると思ひます。

『六根清淨』といふのはさういふことでせう。六根清淨といふのは、唯だ迷ひが無くなるとか、欲が無くなるとか、いふだけの意味ではない。本當に人間の有つて居る智慧が遺憾なく發揮されて、初めて六根清淨といふことになる。さうなれば有らゆる物に佛様の力が現はれて見える。もと／＼佛の大きな力に護られて居る世の中だから、その根本がわかつて來れば、草の葉一枚にも、木の葉一枚にも、佛の力が現はれて見えなければならぬ筈です。さうなれば吾々が此の世に生きて居ることが大變な悦びに満ちたものになるべきでせう。だから『七百萬二千億那由佉恒河沙等の』といふのは大變な數を現はして居るのでありますが、要するに何處にも諸佛如來を見ることが出来るといふのです。

是時諸佛。遙共讚言。善哉善哉。善男子。汝能於釋迦牟尼佛法中。受持讀誦



思惟是經。爲他人說。

是の時に諸佛、遙かに共に讚めて言はん、善い哉善い哉善男子、汝能く釋迦牟尼佛の法の中に於て、是の經を受持し誦讀し思惟し、他人の爲に説けり。

さうなればその時に諸佛が遙かに共に讚められる。即ち『善い哉善い哉』といふ聲が聞える譯です。凡ての佛様が自分を讃めて下さる、東の方の佛様も、西の方の佛様も皆自分を讃めて下さつて居ると、斯ういふ心持になるといふのは、實に有難いことです。さうして『汝能く釋迦牟尼佛の法の中に於て、是の經を受持し誦讀し思惟し、他人の爲に説けり』と言つて讚められる。他人の爲に説くにはこれだけの準備をしなければならぬ。受持し、誦讀し、思惟しなければ人の爲に説けるものではない、思惟なんかチツトモしないで、唯だ巧みに説いても、役には立たない。

所得福德。無量無邊。火不能燒。水不能漂。汝之功德。千佛共說。不能令盡。

所得の福德無量無邊なり。火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず。汝の功德は千佛共に説けども、盡さしむること能はず。

自分が佛の境界に近づいて行き、又他の人々を同じ道に入れるといふその働きによつて福を得ること無限

である。その力といふものは、凡そ周圍から誰が邪魔をしようとしても出来ぬほど強いものである。火を持つて來て燒くことも出来ない、水を持つて來て漂はすことも出来ない。汝の功德は千人の佛が一度に説いても盡すことが出来ないやうなものであると、斯ういふやうに佛様がお讚めになる。

汝今已能破諸魔賊。壞生死軍。諸餘怨敵。皆悉摧滅。

汝今已に能く諸の魔賊を破し、生死の軍を壞り、諸餘の怨敵皆悉く摧滅せり。

『魔』といふことがありますが、吾々の正しい道に入る妨げをするものは皆魔であります。その惡魔の賊を破り、さうして『生死の軍を壞る』。生死は世の中の變化です。世の中の變化の爲にいろ／＼な悩みが起る。その悩みを皆打破つて、その他の妨げも皆悉く滅してしまへば、佛の教を實行して、この穢土を淨土にするといふこの働きが出来るわけです。

善男子。百千諸佛。以神通力。共守護汝。於一切世間天人之中。無如汝者。唯除如來。其諸聲聞。辟支佛。乃至菩薩。智慧禪定。無有與汝等者。

善男子、百千の諸佛神通力を以て、共に汝を守護したまふ。一切世間の天人の中に於て、汝に如く者無し。唯だ如來を除きて、其の諸の聲聞辟支佛、乃至菩薩の智慧禪定も、汝と等しき者有ること無けん。



善男子よ、澤山の諸佛は神通力を以て共に汝を守護して下さる。天上界及び人間界の中に於て汝に勝る者はない、唯だ如来は別である。これは非常に大事なことです。佛様がみな自分を護つて呉れるなど、言はれて已惚れてはいけない。いかに優れた者でも佛と比べられるものは無い。だから佛様に歸依し、佛様にいつも感謝するので、佛様は自分より上だといふことを決して忘れてはならぬ。これは多くのお經を讀んで見てもわかることですが、大變に智慧や徳を具へた者でも、佛様の前へ行けば小くなつて居る。佛様は全く別です。佛様の前で小さくならないやうな者は、決して大きな智慧を具へられるものではない。

佛は別として、諸の聲聞や辟支佛や菩薩の智慧禪定も、汝と等しき者はないであらう。斯う言つて佛様のお讃め下さる御聲が聞えるやうに思はれるといふのです。

宿王華。此菩薩成就如是功德智慧之力。若有人。聞是藥王菩薩本事品。能隨喜讚善者。是人現世口中。常出青蓮華香。身毛孔中。常出牛頭栴檀之香。所得功德。如上所說。

宿王華、此の菩薩は是の如き功德智慧の力を成就せり。若し人有りて、是の藥王菩薩本事品を聞きて、能く隨喜して善しと讚めば、是の人現世には口の中より常に青蓮華の香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん。所得の功德上に説く所の如し。

宿王華よ、此の法華經を信じ、さうして佛様の仰しやる通り實行しようといふ心の堅固な菩薩は、斯うい

説法者の感  
化力

ふ大きな力を具へて居る。若し人が有つて、今こゝで説いて居る此の藥王菩薩本事品を聞いて、能く隨喜してこれを善いと言つて讚めるならば、それは大なる功德がある。讚めるといふのは口先だけで讚めるのではない、口で讚めるやうになれば、心にも本當に信じて居るのでありますから、さういふ人が他の人に對して教を説く場合には、現世に於て口の中から常に青蓮華の香を出し、身の毛孔からも常に牛頭栴檀の香を出すであらう。香を出すといふことは、自ら周圍を感化する大きな力のことです。香のよい物に觸れると其の香がうつるものです。だから私は青年の人などによく言ふ。香のある物をつかむと其の香が手にうつる。佛様とか菩薩とか、徳の高い人とかに觸れさへすれば、必ずその香がうつる。初めから信ずることが出来なければ信じないでも宜い。研究でも宜い、攻撃でも宜い。何でも宜いから、兎に角觸れるが宜い。徳の高い者に觸つたら、キツト香のあるものに觸るとその香がうつるやうに、自分に何等かの感化を受ける。觸れずに遠のいて居るのが一番いけない。兎に角觸つて見るが宜いではないかといふことをよく言ふのであります。口の中からも香が出るだらう、毛孔からも香が出るだらうといふのは、自ら周圍を感化し、自ら周圍を動かす所の働きが生ずるので、その功德は實に廣大なものであるといふのであります。

無量義經にも多くの菩薩が釋尊をお讃め申す語の中に『一切に薰ず』といふことがあります。凡て香のあるものはその周圍のものに皆香を傳へるのでありますから、それと同じやうに法華經を心から信ずる者は、知らず識らずの間にその周圍の者に感化を與へる。さうして自ら周圍を清淨にして行くといふ意味に解すべきであります。



是故宿王華。以此藥王菩薩本事品。屬累於汝。

是の故に宿王華、此の藥王菩薩本事品を以て汝に屬累す。

藥王菩薩本事品を屬累するといふことは、ナニも今此處に讀んだお經の此の文句だけを世に弘めよといふことではない。藥王菩薩は佛の教に依つて悟りを開いて、さうして深くその佛の恩に感じて、自分の身を傷うても佛の教を世に弘めて、世の中を明るくしようといふ誓ひを立てた人でありますから、その藥王菩薩の精神を世に弘めることを汝に屬累する。後の世に生れて佛法を學ぶ者は皆此の心持でなければいかぬと、斯う言はれるのであります。

どうしても恩に報ずるといふ心持でない、本當の事は出来ない譯です。自分が酬ひを得たいとか、自分が世の中に知られたいとかいふやうなことは本當の事は出来ませぬ。藥王菩薩が自分の身を焼いて周圍を明るくして、さうして佛恩に感謝する意を表したといふ、それと同じ心持を以て、末の世に至つて此の教を弘めよといふことを命ぜられるのであります。それが藥王菩薩本事品を以て汝に屬累するといふ意味であります。

我滅度後。後五百歲中。廣宣流布於閻浮提。無令斷絕。惡魔魔民。諸天龍夜叉。鳩槃荼等。得其便也。

我が滅度の後、後の五百歲の中に閻浮提に廣宣流布して、斷絶して惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃荼等に其

の便を得しむること無かれ。

廣宣流布の時

お釋迦様の生きてゐらつしやる間は、お釋迦様御自身の感化の力が偉大であるから、自ら周圍の者もその教を實行するであらうが、だん／＼末の世になつて來ると世の中が險惡になり、人の心に迷ひを挑發するやうな出來事が多くなる。その時に至つて本當にこの教を弘めるといふのでなければ、折角教を説かれた甲斐がない譯であります。そこで『我が滅度の後に、後の五百歲』——これはこの前にあつた通り、佛滅後二千年を過ぎまして、所謂末法の世になつて、世の中が極度に險惡になるといふその時に『廣宣流布して』廣く世の中にこの教を弘めて、さうして『閻浮提』即ち吾々の住んで居るこの世界に於て、これを斷絶せしめてはいけない。此處が大變に大事な所で、若し斷絶すれば、惡魔魔民、諸天龍夜叉、鳩槃荼といふやうなものがその便を得るのであります。これは前にも申上げた通り、世の中が平穩無事でありますと、善人といつてもそんなに思切つて善事も出來ず、惡人といつた所で思切つて露骨に自分の惡を恣にすることが出來なくて、世の中が先づ無事に濟みますから、多くの人はどつち附かずで通れるのです。ところが世が末になつて世間が非常に險惡になつて來ると、宜い加減なことでは通れない。だから心の正しい者は思切つて善い事をしなければならぬ。又悪い人間は遠慮して居ては自分の望みが果されないので、全く遠慮を捨て、思ふまゝの事を勝手にやるといふやうになります。だから世の中が末になると人間が篩ひ分けられて、善人が惡人か何れかになるのです。真中どころの生溫いことは出來なくなる。そこが大事なのです。法華經が弘まつて、皆が佛の大事な教を實行するといふことになれば必ず世の中は善くなるが、此の法華經を弘めることを怠つ



てやらなければ、悪い方の奴が便を得て、自分の勝手をやるやうになるだらう。だからお前達はシツカリやれ。お前達が此の法華經の貴い教を世の中に廣宣流布して弘めるやうにやつて呉れなければならぬ。それが出来なくなれば悪魔が便を得て、いろ／＼な鬼とか夜叉とかいふものも之に助力して、世の中が眞暗やみになつてしまふ。こゝが大事な所だから、お前達の骨折によつて悪魔や夜叉が便を得て世の中が險惡になるやうな事のないやうに、大いに奮發してやつて呉れといふことを言はれたのであります。

其の功德大なる所以

斯ういふことは、前の方からだん／＼何遍となく繰返して説かれて居ることでもあります。末の世に至つて法華經を弘める功德は大きい、末の世に至つて法華經を弘める人の尊さは佛と同じだといふことを幾度も説かれてあります。さうして一番終ひに此處へ来て、何故その功德が大きいかといへば、若しこれの中に弘まらなければ、世の中は悪魔の世の中になるのだ。何れかに片附く時なのだから、それを悪魔の世の中にしないで佛の國にして行くといふことに力を打込んで盡さなければならぬ。それだからその人の功德は大きいと言はれるのであります。こゝの處を讀みまして、前の法師品以下ズツと末の世に法華經を弘める功德が力説されて居つたのが如何にも尤もだといふことに思ひ當る譯であります。

ところが、これは少し露骨なことを言ふやうですが、今まで佛敎を弘める人が、此の功德が大きいといふ方ばかり讀んで、骨折らなければならぬといふ方を宜い加減にして居るのはこれは困つたものです。佛は唯だ功德が大きいぞといふことを言つて居られぬ。功德が大きいぞ、その代りに其の大なる功德を得る爲には、命懸けでやれ。悪魔と闘つて、悪魔に負けないやうにやれと言はれて居るのであります。それを人間は兎角狡いものだから、骨折の方は宜い加減に考へて、功德の方だけを見て、『宜い加減に居眠り半分に題目を唱へて居ても功德だけは大きいだらう……』斯う思ふのでありますけれども、それは我儘な話でありまして、お經の中には何時でも兩方言つてある。功德が大きいぞ、その代り骨が折れるぞ……とある。又骨が折れるぞ、その代り骨折れば功德があるぞとあつて、此の二つの事はいつでも列べて言つてあるのでありますから、その處を間違へないやうに、シツカリと捉まへなければならぬでせう。兎角人間は我儘が多いものでありますから、旨いことはしたい、併し骨折りたくはないといふ心持になるのですが、さういふ心持では本當の事は出来ない筈であります。それで悪魔にその便を得せしめないやうにするのは大變な事です。非常な努力をしなければ出来るものではない。その努力をして、いろ／＼な悪魔にその便を得させないやうにせよと言はれるのです。

宿王華。汝當以神通之力。守護是經。

宿王華、汝當に神通の力を以て、是の經を守護すべし。

神通の力を以て守護しろといふことは、自分に具へて居る有らゆる力を皆傾け盡して守護しろといふ意です。神通の力といふのは、要するに普通の力では駄目だといふことです。この經の中に幾度も神通といふことを言つてあるが、神通といふのはナニも不思議な事といふのではない。普通の骨折ぐらゐでは駄目だ、特別に非常な骨折をしなければならぬといふことを言ふ時に、神通の力といふ語が始終使はれて居る。並大抵では駄目である。世の中が末になつて来て、世間が險惡になれば、弛んだ心持でも逆も敎を弘めることは出



來ぬ。有らゆる力を打込んで、逆も平生は出来ないといふやうな、非常な骨折を以てやらなければ、この經は弘まらないといふことを言はれるのであります。

所以者何。此經則爲闍浮提人病之良藥。若人有病。得聞是經。病即消滅。不老不死。

所以は何ん。此の經は則ち爲れ闍浮提の人の病の良藥なり。若し人病有らんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

法華經は良藥

何故さういふことをしなければならぬかといへば、是の經は闍浮提の人の病の良藥である。この病といふのは無論心の病です。これは壽量品に『是の好き良藥を今留めて此に在く、汝取りて服すべし。差えじと憂ふること勿れ』とありまして、この良い藥を此處に在くぞ、お前達この藥を服んだら、どんな病氣でも癒らない筈はないといふことを言つてありました。その意味を此處に繰返して、この教は一切の人間の良き藥だ、この教に依つて救はれない者はないと、斯ういふことを言はれるのであります。若し人病があつて、即ち心に悩みがあり、又迷ひがあつて、何だか無意味なやうに毎日を送つて居るのであつても、此の法華經に於て説かれた、此の教を本當に聞いて、心に深くこれを信ずることが出来れば、病即ち消滅して不老不死であらう。

此の『即ち』といふのは幾度も申すやうに、離れないといふ意味であります。この經の教だけでよい、これを離れて他の教を受けないでも、これで行けるのだといふことが『即』といふ字の意味です。『すぐに』といふことでは決してない。決して直ぐに出来るものではない。吾々がやつて見てもさうです。少しばかり讀んで見ても本當の事はわからず、少しはわかつたやうでも本當に信ずることが出来ぬ。なか／＼直ぐに行くものではない。人間の心の病といふものは、この經で行けば、これを離れて他の教を求めなくても、必ず癒るぞと斯ういふ意味で『即』の字を使つて居るのであります。『病即ち消滅して不老不死ならん』といふことは、つまり佛様と同じやうな智慧を具へるやうになるであらうといふことであります。

宿王華。汝若見有受持是經者。應以青蓮華。盛滿抹香。供散其上。散已作是念言。此人不久。必當取艸。坐於道場。破諸魔軍。當吹法螺。擊大法鼓。度脫一切衆生老病死海。

宿王華、汝若し是の經を受持すること有らん者を見ては、應に青蓮華を以て抹香を盛り滿て、其の上へ供散すべし。散じ已りて是の念言を作すべし。此の人久しからずして必ず當に艸を取りて道場に坐し、諸の魔軍を破すべし。當に法の螺を吹き、大法の鼓を撃ちて、一切衆生の老病死の海を度脱すべしと。

法華經の護持

末の世に至つて正しい信仰を持つ者は極めて稀でありますから、稀にでもさういふ者があつたならば、之を保護し之を奨励して、その信仰を失はせないやうに、しなければならぬといふことを言はれるのであります。



宿王華よ、お前は菩薩であるが、若し世の中に出て、此の法華經の教を心に信じ、身に行はうとする者を見るならば、假令その者は、智解に於て、又行ひに於て、お前に劣る者であらうとも、(さういふ意味を補つて見るとよくわかります)本當に法華經の教を實行しようといふ者があるならば、あゝ有難いことだと思つて、それを讃めて、それを獎勵して、さうしてその善い行ひを續けさせるやうにして呉れと、斯ういふのであります。さうして青い蓮華の花の上に香を一ぱい盛つて、その人の上に散じて、さうして『この人は久しからずして佛の境界に到達する者であらう』と斯う思つて、假令今は完全でなくても、兎に角末の世に至つて法華經を信する者であるから、之に感謝し、之を獎勵して、同じ道を怠らないやうにしてやるが宜からうと、斯う言はれるのであります。これは非常に大切な事であつて、自分に智慧があつても徳があつても、決して自分を世間と段のちがふ者のやうに考へてはいけません。自分より智慧も足らず、徳も足らぬ者であつても、正しい道に向つて居る者を見出したならば、この人を十分に保護して、この人に感謝して、これを育ててやるといふ心持がなければならぬ。そのことを此處に言つて居るのであります。實際佛の大事な教を弘めようといふ人は、その位な優しい心持がなければならぬ譯であります。

花の愛護者

佛蘭西革命の頃に一人の貴族がありました。この人は革命を起した方の者に實際反對はしなかつたのであります。反對をしたといふ嫌疑を受けて、牢屋に入れられて居た。モウ長い間牢屋に入つて居て、唯だ毎日三十分づゝの散歩が三度だけ許される、あとは一つの部屋に閉ぢ込められて居た。ところがその人が毎日三十分づゝ牢屋の前の二坪か三坪の庭を歩いて居て、或る時フト氣が附いて見ると、地面に小さな草花の芽が出て居る。これは牢屋の庭などに草花を植ゑる譯がないのですから、風に吹かれるか何かして、種子が其

處に落ちて芽をふいたのでせう。それを見てその貴族は、あゝこんな處に綺麗な草花の芽生えがあるといふので非常に喜んで、それから毎日三度づゝ與へられる食事の時に貰ふ水を少しづゝ餘して置いて、散歩のたびにその草に掛けてやつた。ところがそんなに世話をしてやるものですから、その草花の芽がだん／＼伸びて葉が出て、さうして花が咲くやうになつた。その花を、新しい革命政府の相當な地位にある人が監獄を見廻りに來た時に、見付け出して大に驚いた。『どうしてこの庭にこんな花が咲いて居るか』と、それから監獄の取締の役人に聞いて見ると、實は斯ういふ譯で、この人が始終世話をして、毎日自分の飲む水を節約して此の花に掛けてやつた。そのお蔭で斯ういふ花が咲いたといふことでした。此の話聞いて、流石に一方の首腦の人だけあつて、それ程小さい草の花でも惜んで、それを育てゝ花を咲かせるやうな心持の人であれば、これは國の爲に役に立つ人であらう。いふかう人を牢獄に閉ぢ込めて置くべきものではないといふことで、その草花一つを育てたことに依つて、この人を釋放して重く用ゐて、後にナポレオンが皇帝になつた時になつても、その人は可なり重要な地位を占めたといふ言ひ傳へがあります。これは面白い話です。小さい草の芽一つでも善い花が咲くものだと思つて、之を大切に育てゝやるといふ、その心持が國家にも役に立てば、社會にも役に立つのであります。凡て善いものを育てゝやらうといふことは非常に貴い心持です。それが佛の道であり、それが菩薩の道であります。

そのことを此處に言つてある。たとへお前達より劣つて居る者でも、此の教を本當に實行しようといふ者があるならば、これを保護し、これを獎勵して、さうしてその善い心持を續けさせるやうに骨折つてやらなければいかぬといふのであります。



『艸くさを取りて道場だうじやうに坐し、諸もろの魔軍まぐんを破す』。これはお釋迦様のことをいふので、お釋迦様が成道の時に、佛陀迦耶の菩提樹の下の石の上に草を敷いて坐つて、最後の冥想をして、さうして悟を開かれたといふことでもあります。そのお釋迦様の通りに、この人もやがて悟を開くやうになるだらう。さうしてその前に悪魔を打破るであらうといふのです。

降魔と成道

この成道の前に降魔があるといふことは非常に意味の深いことであります。人間は何の仕事をして、モウ一步といふ所で所謂魔がさすものです。骨の折れる時は兎に角シツカリして居る。しかしモウ大丈夫といふ所でグラ／＼と氣が弛むものです。その弛むのが所謂魔です。だからお釋迦様がお悟りになる前にも、さまざまな悪魔が來て妨げをしたのを退治されたといふのは實に面白いことでもあります。山などを歩いて、非常に嶮峻な所は却つて怪我をしないけれども、その嶮峻な所を通り過ぎて、モウ大丈夫だといふ時に尻餅をついて怪我をするといふやうな事が始終あるのであります。苦しい時は却つて耐へ易いのでありますが、その苦しんだ効果の現れたといふ所がなか／＼難しい所です。お釋迦様の場合に於ては、言傳へに依れば、悪魔がお釋迦様のお悟りになるを妨げようと思つて、いろ／＼に手を盡したと申しますが、その悪魔の形は、印度などへ行つて見ますと、いろ／＼畫に描いたり彫刻などになつて澤山あります。その悪魔の姿は概して言ふと二種です。その一つは誘惑の形です。美しい女になつて樂器を持つて來たり、美しい花などを捧げて、誑かして心を弛ませようとするのです。それからモウ一つは戈を揮つたり劍を揮つたりして脅かして妨げをするので、この二種です。吾々が世の中に立つてもさうです。魔といふのは結局はこの二種しかないのです。一つは『迫害』であつて、一つは『誘惑』です。例へば吾々が法華經なら法華經の正しい道を弘めやう

二種の魔

と思つた時には、第一に迫害のことを考へる。世間からひどい目に遭ひはしないか、何か苦しい目に遭ふだらう。斯ふ思ふと自分の勇氣が挫ける。ですから悪魔の一つは迫害であります。日蓮上人の如きも長い間の迫害に耐へて來られたのでありますが、迫害に依つて自分の信念を挫げたり、自分の決心を鈍らせたりする者が澤山あります。

それから今一種の魔は誘惑です。人が自分のことを褒めてくれて、そんなに骨折らないでも斯ういふ旨い事があるぞと言ふと、心がグラ／＼となつてその方へ向く。ですから迫害に耐へ、誘惑に耐へさへすれば、それはどんな事でも出来るでせう。少し何かやつて人に讃められるといふことは、これは實に恐ろしいことです。少し讃められると、『これだけ讃められるのだから、まあこの邊で宜からうぢやないか』といふやうな氣になつて怠けてしまふ。印度であの降魔の圖を見まして、私はつく／＼思つた。悪魔といふものには二つの形がある。劍を以て脅かす悪魔と、花を持つて來て横目をつかつてお世辭を言ふ悪魔と二つある。吾々にもこの二つの悪魔を撃退することが出来れば確かなものだと思ひました。

お釋迦様もだん／＼修行を積んだ結果、それをお考へになつたのでせう。自分は今成道に近いのだが、自分の悟つた事を世に弘めたら、どんな迫害が來るかとお考へになつたかも知れない。或は又これを世に弘めたら、皆が非常に感激して讃める者もあらうし、歸依する者もあるだらうとお考へになつたかも知れない。しかしお釋迦様はそれはいかぬと氣がついて、迫害を恐れてもいかぬし、歸依する者があるだらうといふことを期待してもいかぬ。そんなことなしに、自分が眞實と思ふことを世に弘めるのでなければならぬ。これを弘めたら皆が妨げるだらうとか、或は歸依する者があるだらうとか、そんなことを先に考へるのは本當

魔はいつも  
近くに居る



ではない。それを一切打破つて、唯だ眞實のものを求めるといふ心持のみになられた時に、所謂成道が出来たのです。是れが所謂魔を降すといふことであります。吾々がチツトした小さい仕事をして見ても、どうも此の二つの悪魔が妨げを致しまして、工合が悪いのであります。お釋迦様はそこを越えられたのです。即ち草を取つて道場に坐して、いろ／＼の魔軍を打破つて悟りを開かれたのであります。

魔軍を打破つて、悟りを開いた上は、法の螺を吹き、大きな法の鼓を撃つて、世の中の有らゆる人を老病死の中から救ふことが出来る。是れは世間の有らゆる變化を老病死といふ言葉で、代表せしめて言つてあるので、要するに凡ての世間の變化のことです。そのさまざまに變化する所の世の中に住んで、苦みや迷ひの中に揉まれて居る人々を度脱する。即ちその苦しみや迷ひの中から濟ひ出す。これはお釋迦様の御一代の事績であるけれども、末の世に至つて此の法華經を信ずる者は、お釋迦様と同じ道を行つて、同じやうに世の中の迷へる者や、悩める者を救ひ出すことが出来る。斯う思つて、此の法華經を信ずる者を大事にして、これを保護してやらなければいかぬといふのであります。

是故求佛道者。見有受持是經典人。應當如是生恭敬心。

是の故に佛道を求めん者、是の經典を受持すること有らん人を見ては、應當に是の如く恭敬の心を生ずべしと。

それだから本當に佛道を求める所の者は、是の經典即ち法華經に説かれて居るやうな教を受持する人があ

つたならば、その人間に對して恭敬の心持を起して、これは實に有難い人だ、こんな人は世の中に容易にありはしないといふやうに考へ、これを保護し奨励してやるが宜からうと言はれるのであります。

說是藥王菩薩本事品時。八萬四千菩薩得解一切衆生語言陀羅尼。多寶如來於寶塔中。讚宿王華菩薩言。善哉善哉宿王華。汝成就不可思議功德。乃能問釋迦牟尼佛如此之事。利益無量一切衆生。

是の藥王菩薩本事品を説きたまふ時、八萬四千の菩薩、解一切衆生語言陀羅尼を得たり。多寶如來、寶塔の中に於て宿王華菩薩を讚めて言はく、善哉善哉宿王華、汝不可思議の功德を成就して、乃ち能く釋迦牟尼佛に此の如きの事を問ひたてまつりて、無量の一切衆生を利益すと。

さういふ御心持でお釋迦様はこれをお説きになつた。だからお釋迦様がこの藥王菩薩本事品をお説きになつた時に、皆大に感動しましたので、八萬四千の菩薩達も『解一切衆生語言陀羅尼』といつて、大勢の人間の言葉によつて其の意を能く察し、これを救ふ所の力を具へるやうになつた。

それから又これは極めて貴い事でありますから、多寶如來も寶塔の中に於て宿王華菩薩を讚めて、善哉善哉洵に結構である。宿王華よ、お前は不可思議の功德を成就したと、斯う言はれた。是れはチヨットをかしい事です。何故なら既に屬累といふことがあつて、末の世に此の經を弘めるといふことを命ぜられ、又之を弘めることを皆が誓つたのですから、多寶如來のお役目は已に濟んで居る譯です。多寶如來は、此の法華經

多寶如來の稱讚



の教が眞實だといふ證據人に出て來たのです。ところが法華經が眞實だといふことがわかつて、いろいろな菩薩が末の世に之を弘めるといふことを請合つたのだから、多寶如來の職務は濟んでしまつた譯です。その職務の濟んだ多寶如來が、又善哉々々などと言ふのは、チヨット餘計な事のやうにも一通りは見えるのであります。けれども能く考へて見ると、何と言つても末の世に教を弘めるといふ人は實行を主としなければならぬのでありますから、實行の手本となることを説かれたのに對して、再び多寶如來が善哉々々と言つてお讚めになつたといふことに、深い意味があるのです。理窟だけではいけない、實際やらなければいけない。だから藥王菩薩といふ實行者の手本が此處に示されて、又其の實行を學ぼうといふ決心をした者があれば、多寶如來が再び現はれて、それは結構だ、その通りやつて呉れと言つて奨勵されるといふことは、大變深い意味があると思ひます。

## 問ふ者の功德

さういふ譯で、よく釋迦牟尼佛に斯ういふことを問うて呉れた。問ふことがなければ答へる機会がないのであるから、お釋迦様に斯ういふことを問うて過去の世に於て身を以て佛恩に報じたその事績を皆に知らしめて呉れたといふことは、非常に大きい功德であると、斯う言つてお讚めになつた。さうして是れは無量の一切衆生を利益するほどの功德がある。大變に貴いことだといはれた。これは前から申すことでもあります。一つの事が成就するにはさまざまの役目がある。説くといふことは非常な功德だけでも、説くべき機会が與へられなければ説けない。だからお釋迦様が教を説かれるにも、よく説かして呉れたナといつてお禮を言はれることが度々ある。佛様が教をお説きになるのに、お禮を言はれる筈はないのですけれども、説く機会を與へられなければ説けないのだから、佛に問うたことをお讚めになる。よくさういふことを問うて呉れ

た。お前が問うたから皆が注意する、皆が注意すれば自分の説くことが皆の心に入るであらう。斯ういふので、佛に對して問ひ掛けたのをお讚めになる。これは面白いことです。

世の中の事はみなさうです。何か大きな仕事をするといつても一人では出來ない。その仕事をするやうな仕組を立てた人は、自分では何の仕事をしなくても、仕事をしたと同じ價値がある譯です。世の中の事といふものは、表に現はれた事だけで、評すべきものではない。表に現はれた仕事をさせる爲に、蔭に隠れた骨折の貴いことをも考へなければならぬ。斯ういふことが佛教の根本の精神から見て大切な事でもあります。それでありますから何時でもさういふことをお讚めになる。よく佛に問うた。お前が問うたから佛も説くことが出來た。説いたので皆がわかつた。詰り問うたのが善い事であつたと、斯う言つて屢々お讚めになるのは、大いに味ふべきことであらうと思ふのであります。

藥王品はこれで終りますが、要するに身を捨て、佛の恩に報ずる爲に努める、その光は世の中を照して世の中を明るくするものであるといふことを、過去の事實に依つてハッキリと示された譯であります。



妙音菩薩品第二十四



妙音菩薩品第二十四

### 妙音菩薩品第二十四

此より妙音菩薩品に入るのでありますが、此の菩薩は三十四身を現じたといふことが説かれてあります。これは前の藥王菩薩の事と關係があります。前の藥王菩薩はいろ／＼の苦行を重ねた結果として、普現色身三昧を得たといふことであります。これは法を説くに當つて、其の相手に應じて自由自在に種々なる姿をあらはし、相手に適切なる教を與へる力をいふのであります。今妙音菩薩が三十四身を現ずるといふのも、それと同様のことであります。如何に高尚なる教を與へても、それが相手に適切でなければ何にもならぬ。それ故に佛は方便といふことを非常に重んぜられるので、種々の身を現ずるといふのも亦方便に外ならぬのであります。此の妙音菩薩は東方に在り、次に出て來る觀世音菩薩は西方に在つて、一方は三十四身、一方は三十三身を現じて教を説き、佛の化導を賛げらるゝと申すことであります。

爾時釋迦牟尼佛。放大人相肉髻光明。及放眉間白毫相光。徧照東方百八萬億那由他恆河沙等。諸佛世界。

爾の時に釋迦牟尼佛、大人相の肉髻の光明を放ち、及び眉間白毫相の光を放ちて、徧く東方百八萬億那由他恆河沙等の諸佛の世界を照したまふ。



東方と西方

東の方の澤山の世界をお釋迦様の身の光を以て照された、斯ういふ風にお釋迦様の光明東の方の世界を照すといふことは序品にもあります。東の方といふのは、つまり物の初めといふ意味です。それは太陽が東から出て西に没するものでありますから、それを本にして東は初めといふことを意味する。そこで何か新しい機運を作らうとか、新しい氣分を起させようとか、新しくやり始めるといふ時には、必ず東の方といふことになつて居る。それから物事が收まるといふ時には西の方といふことになる。だから西の方に淨土があるといふ考へも自然に發達したわけで『極樂は西の方に在るといふけれども、地球は圓いものだから、西へく、と行くとまた元へ戻つて來るぢやないか』といふやうな、そんな理窟を言はないでも宜い。東といふ時には物のはじまる意味、西といふ時には物の收まりのつく意味で言ふので、必ずしも世界が圓いか四角か、そんなことに拘泥する必要はない。そこで今こゝでも東の方と言つてあるのは、これは新しき氣分を作る意味からであります。

過是數已有世界。名淨光莊嚴。其國有佛。號淨華宿王智如來。應供。正徧知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛世尊。爲無量無邊菩薩大衆恭敬圍繞。而爲說法。釋迦牟尼佛白毫光明。徧照其國。

是の數を過ぎ已りて世界有り、淨光莊嚴と名く。其の國に佛有す、淨華宿王智如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊と號けたてまつる。無量無邊の菩薩大衆の

恭敬し圍繞せるを爲て、爲に法を説きたまふ。釋迦牟尼佛の白毫の光明、徧く其の國を照したまふ。

その限りなく廣い所を過ぎて彼方に世界があつて、その名を淨光莊嚴世界といふ。佛の淨らかなる光を以て周圍を美しくして居るといふ意味です。その國に佛があつて、それは淨華宿王智如來といふ名の佛様であつた。(こゝに如來とか應供とか正徧知といふやうな佛の十號がありますが、これは前に幾度もありましたから説明を省略します)その佛様が大勢の人々に敬はれ取圍まれて、さうしてその爲に法を説いて居らつしやる。お釋迦様の身から出た光で、其の佛様の教を説いて居らつしやる所が、ズット見えたといふのであります。

これは方便品以來ズット續いて居ります所の諸佛道を同じうするといふ思想であります。佛様といふものは皆同じである。どれほど多くの佛があつても、その佛のお覺りになつたことは皆同じである。佛がどれほどあつても佛の覺られた所は同じである。さうしてどの佛様でも、吾々凡夫を佛と同じやうな境界に導いてやらうと思召して居らつしやるので、何れの佛様のお考へも同じである。佛様の教をお説きになるそのお言葉は、場合に依つて異うでありませうけれども、その教の歸著する所は同じである。お釋迦様であつても、何佛であつても、佛と佛とは皆同じ心である。お釋迦様の光が東の方を照して、東の方の佛様が教を説いて居らつしやる所が見えたといふことは、何處の世界にどんな佛があつても佛の御心はみな同じである。それはお互ひに相通ずるものであるといふことを現はしたものであります。

これは私共の身の上にも引較べて考へなければならぬと、常々思ふのであります。斯ういふことは法華經

諸佛道を同  
うす



以外のお經に於ても出て來ること、釋迦牟尼佛の教を信じて居る者が他の國の佛様に逢つたとか、他の國の菩薩がこの世界へ來たとか、此方から向ふへ行つたとかいふことは、多くのお經の中にあることであります。つまり佛の教といふものは同じだから、互ひに行つたり來たりして、向ふから此方へ來る、此方の者が向ふへ行くといふことは少しも不思議ではない。是れだけでは吾々共の境界とはチョット懸離れた事のやうですけれども、吾々の境界にこれを引下して考へることも出來ます。一體人間の悦びがいろ／＼あるが、何が眞の悦びであらうかといふことを考へて見ませう。先づ物質的の満足が眞の悦びでないことはわかつて居ます。うまい物といつても、腹が張つてしまへばうまくない。綺麗な著物でも久しく著て居れば汚くなる。大きな家でも自分の寝る所は六尺と三尺しか要らない。大きな部屋だといつて、あまり手足を伸ばして寝れば翌日くたびれてしまふ。さういふ物質的なことが人間に満足を與へないといふことは、少し考へればわかるのでありますが、そんなら自分が本當に淨らかな心持になつて、物質のことを離れて獨り行ひ澄して居るといふことで、眞に満足が出來ようか。それは一應は出來ます。けれども能く考へて見ると寂しい。自分だけしか此の事はわからない。周囲は皆他人だけと思つた時には寂しい。若し同じく道を求め、教を求め、心持の人が自分より以外にもあつて、その心と自分の心とが相照すといふことになれば、これほど嬉しいことはない。これは人間に於ける最上の悦びでせう。自分も物質を離れて本當の道を求めて居る。自分以外にも自分と同じやうに物質的の欲を離れて教を求め道を求めて居る人がある。その人の心持と自分の心持とが相通つて居る。斯う思つた時に、これが人間の一番上の悦びでなければならぬ。なか／＼さういふ悦びにあふことは容易には得られないでせうが、それに近いものは吾々でも略想像がつくのであります。

吾等の期待

それで此方の佛様と向ふの佛様との光が照し合ふといふのはまことに貴いことであります。まことに程度度の低い者であるけれども、その事を此處に引下げて考へることは出来る。自分が佛様の教を本當に實行しようと思ふ時に、本當に佛様の教を實行しようといふ者に出逢つたら、その悦びといふものは何にも換へられないであらう。これを吾々の理想として、力及ばずと雖も自分達の修行を勵んで行きたい。私は常に斯う思ふのであります。他の悦びは之に較べれば小さい。今自分が凡夫だからといつて、サウ自分を馬鹿にしても行きたいのでありますから、マア一生懸命に修行して、さうして同じやうな心持の人に出逢ふやうになつて行きたいものです。

ところが惜しいことには、斯ういふ心持を起しかけた時に、この芽生がチョン切られてしまふことで、それを防ぐといふことも非常に必要です。誰でも年の若い時には純な心持があるのですけれども、世の中の荒波に採まれる間に、そんな心持がなくなつて、互ひに争ひあひ闘ひあふやうになる。それは實に惜しい事です。だから私共聊かなりとも佛の教を學ぶ者は、無論自分の信仰を進める爲に餘力を注ぎ、絶えず自分の修行をしなければならぬが、出來ることならば多くの人の心の中にある、さういふ淨らかな信仰の芽生を育て、行くやうに力を用ゐることが出來たら、これは大變に嬉しい事だと思ふのであります。これは附けたりの話であります。さういふ心持で讀んで行くと、此方の佛様の光が向ふを照し、兩方の光が照し合つて一つになるといふことがまことに貴く思はれるのであります。

爾時一切淨光莊嚴國中。有二菩薩。名曰妙音。久已植衆德本。供養親近無



量百千萬億諸佛。而悉成就甚深智慧。得妙幢相三昧。法華三昧。淨德三昧。宿王戲三昧。無緣三昧。智印三昧。解一切衆生語言三昧。集一切功德三昧。清淨三昧。神通遊戲三昧。慧炬三昧。莊嚴王三昧。淨光明三昧。淨藏三昧。不共三昧。日旋三昧。得如是等百千萬億恆河沙等諸大三昧。

爾の時に一切淨光莊嚴國の中に一の菩薩有り、名を妙音と曰ふ。久しく已に衆の徳本を植ゑ、無量百千萬億の諸佛を供養し親近したてまつりて、悉く甚深の智慧を成就し、妙幢相三昧、法華三昧、淨德三昧、宿王戲三昧、無緣三昧、智印三昧、解一切衆生語言三昧、集一切功德三昧、清淨三昧、神通遊戲三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧、淨光明三昧、淨藏三昧、不共三昧、日旋三昧を得、是の如き等の百千萬億恆河沙等の諸大三昧を得たり。

諸徳の本

その時に其の一切淨光莊嚴國といふ佛のゐらつしやる國に一人の菩薩があつて、名を妙音といつた。その菩薩は『久しく既に衆の徳本を植ゑ』是れは前にも申したことです、佛様を信ずるといふことが一切の徳の本です。人間は不完全なものではあるが、深く佛様を信じて、佛様の御足の跡を自分も歩いて行かうといふ心になれば、いろ／＼な善い事が出来るのであります。だから徳の本といふ、善の本といふのは、要するに佛を信じ佛に歸依するといふことであります。さうして無量百千萬億の佛を供養し、又親近したてまつつて、その佛の教を受けて、だん／＼に甚深の智

慧を成就したとあります。この『深い』といふことはお經の中に始終言つてありますが、深く考へないでは何の事もわかりはしませぬ。表面だけ見たのでは、どんな物でも本當にわかるものではない。佛の教を深く味つて、さうしてこれを體得する、それで初めて眞の智慧を得るのです。さうして種々の三昧を得たとあります。

三昧といふこと

この『三昧』といふのが此處に十六擧げてありますが、これは要するに『法華三昧』といふことを種々の方面からいつたものです。三昧といふことは、心が一つの所に集中して亂れない、他に向かないといふことで、印度の言葉では『三摩耶』といふ。それを略して三昧と言ふのであります、三摩耶といふ言葉の意味は『善に住して散せず』といふことです。善い事に心が落着いて外に散らないといふことです。これを口に言ふのは譯はないけれども、實行はなか／＼難かしい。吾々は善い事を時に思ひ着くけれども、ぢきに他へ心が移つてしまふ。善い事に心がヂット落着いて、周圍の出來事の爲に惹かれなれないといふこと、それが即ち三摩耶で、これを略して三昧とも申します。何事をするにも三昧が得られなければ仕様がなない。いくら經卷などを餘計讀んで、いろ／＼な學說などを列べたところが、三昧を得なければ仕方がない。心が一處に住して散らないといふ所まで行かなければ、唯だいろ／＼な事を知つて居つても、ぢきに又心が他へ移つて行くのでは何にもならない。だから三昧を得ることを努めろといふことが始終言つてあります。

法華三昧

そこで『法華三昧』といふことは、法華經の教を聽いて其の最も貴い教であることを知り、これより外には心を向けまい、どんな事があつても大に努力してこれを自分で體得しようと思ひ定めることです。此の決心がなくて、たゞ一通り習つて居るといふだけなら、人間の一生涯の六十年や七十年に毎日本を一冊づつ讀



んでも多寡が知れたものです。有らゆる經論を残らず讀み盡せるものではない。よし盡く讀んで見ても、讀んだといふだけでは仕様がな。若し一つの事に本當に心を打込んで行きますれば、日蓮上人も仰しやるやうに、『一切經讀まざるに従ふべし』で、讀まないでも讀んだと同じことです。大事な所を一つ捉まへて居れば、その他は讀まないでも讀んだと同じで、一切の意味が皆わかつて來ると、斯う言つて居られるのは尤もなことであります。徒らに博學を競うてもそれは役に立たぬ話です。といつて固陋になつて、法華經以外は一切役に立たぬと排斥するにも及ばぬ話で、そこが難かしい所です。役に立つものならば取入れても宜い。何でも一つが大事だといつて一つに固まつてしまつて、他のものは皆質物のやうに思ふのも間違つて居る。何れも同じ佛の教です。又佛の教でなくても、聖人賢人の教ならば、それ／＼の價値があるのでありますから、自分の心の中心が定まつて居れば、これを扶くるものとして他の教を取入れても決して差支ない。そこは廣い心を持たなければいけない。餘り固陋になつて、法華經以外のものは何も讀まない。他のものを讀むのは穢らしいといふやうになつても亦困ることではありません。要するに三昧といふのは、心が一所に住して亂れない、所謂心の中心が動揺しないといふことであります。

それを茲に十六も擧げてありますけれども、第二番目にあります『法華三昧』といふのが主でありまして法華經の中に説かれて居るその教を深く味はうて心に信じ身に行ひ、之を以て終始一貫するといふことであります。その法華三昧といふことを、たゞ法華といふだけではその意味が充分にわからぬ者もありますから、さまざまな方面から十六にも分けて言つて居るのです。これは此處だけではありませぬ、多くの經典の中に於て其の例があります。一つ事を右から言つたり左から言つたり、前から言つたり後から言つたり、十にも

種々なる説  
明の様式

二十にも分けて、疊みかけて説明するといふ例は少しも珍らしくない。一つの事を何故そんなに十にも二十にも分けていろ／＼に言ふのかといふと、それは人の性質や境遇がそれ／＼異なるからです。例へばこゝに三昧が十六擧げてありますから、之に就て一通りの説明を申し上げようと思ひますが、あなたの方の中の或るお一人は、此の十六の中の或ものを特に適切だと思ひになるでせう。又他の方はさうでなく、他の一つを特に適切だと思ひになるでせう。これは人々の年頃に依つて、身分境遇に依つて、又その時の氣分に依つて、同じ本を讀んでも感ずる所がちがふのは已むを得ないことです。だから佛様が吾々をお教へになる時に、一つの事をいろ／＼に言はれる。其のいろ／＼に言つてある中で、各自に最も自分に適切なものを捉まへれば宜い譯です。ですから決して一いろでなく、いろ／＼に言はれる。そのいろ／＼に言はれたものを、みな平等に有難く感じなければならぬといふのではない。それは無理です。そんな無理なことを言はれはしない。此方からも言ふ、彼方からも言ふから、人々の感ずる所によつて何れかをシツカリ捉まへて、之を實行せよと、斯ういふ意味で、疊みかけて言はれるのであります。此處でもさう思へば宜い。本來は法華三昧といふだけで宜いのですが、其の法華三昧といふことは、モウ一つ他の言葉で言へば斯うだ、といふやうに、十六並べられて居るのでありますから、その十六の説明を味うて見て、自分の境界に特に適切なものを、『ハハア此處だナ』と捉まへれば、それで宜いのであります。

それで十六の中の第一は『妙幢相三昧』これも法華に就ての一つの考へ方です。妙幢といふのは非常に美しい旗です。或る大軍が出陣を致します時に、其の大將の本陣に一番美しい旗を立てる、それを妙幢といふのです。何萬人かの間が進軍すればいろ／＼な旗がありますけれども、その一番美しい旗のある所が大將

妙幢相三昧



の本陣であります。それと同じやうに佛の教は一代の間五十年も種々に説かれてあるけれども、その中で殊に勝れた教、即ち佛の御本意を打明けられたといふものは、チヨウド大將の本陣の如きやうなものでありますから、それが本當にわかつた時には、旗を見て大將の本陣を知るが如くに、その教によつて、佛の御本意のある所を知ることが出来る。それを妙幢相といふのであります。旗の色を見て大將の本陣を知るが如くに此の法華經に説かれた貴い教をよく味うて、さうして佛の御本意の在る所は此處だナとわかる筈である。それがわかれば即ち妙幢三昧を得たと言へる譯であります。つまり法華三昧といふ言葉の異名であります。さういふやうな點から之を解するのも一つの考へ方であります。

それから『法華三昧』は前に申すやうに、法華經の中に説かれた所を體得することありますから、委しくは申しませぬ。

淨徳三昧

それから第三には『淨徳三昧』徳といふのは身の行ひの勝れた所でありませんが、淨徳を具へるといふことはむづかしい。淨徳といふのは、自身に勝れた徳を具へて居つて、その勝れた徳を具へて居る自分と、他の徳の無い者との差別を一切考へないことです。聊かなりとも斯ういふ差別心のある間は、まだ至れるものではない。『自分は覺つて居る、彼等は迷つて居る……』『自分は立派な行ひをして居る、彼等は淺ましい行ひをして居る……』とその間に區別を立て、居る間は、その人の徳は完全無缺なものではない。『自分は救つて居るのだ、彼等は救はれるのだ』といふ風に、救ふ者と救はれる者との間に區別を存して居ては本當に教へるものではない。本當の親子の仲はさうでせう、親と子の間は區別はない。子供が喜べば親と一緒に喜んで居る、子供が苦しめば親と一緒に心配して居る。町のおかみさんでもさうですが、お祭なんかの時に浴衣

の一枚も縫つて著せてやれば、子供は外へ出て喜んで居る。親は却て迷惑な譯ですが、子供が喜べば親も一緒に喜んで笑つて居る。その時には、子供の喜びが全く親の喜びとなつて居て、チットモその間に區別はない。『徹夜で縫つて浴衣を著せてやつたからお禮を言へ』といふ母親はない。それが即ち淨徳です。斯ういふ心で一切の人に對して、全く自他を離れて、與へる者と與へられる者との區別を離れてしまつて、大勢の者の救はれることを救ふその人が大なる喜びとする。斯うなるのが即ち淨徳であります。それは法華經を信じて、法華經に説かれたことを實行して行けば必ず得られる譯です。それを目標にして心の散らないやうに修行するならば、それが淨徳三昧を得たといふのであります。さういふ方から見ても宜い。

宿王戲三昧

それから『宿王戲三昧』これはチヨット字だけ見ると、何の事やら譯がわからぬのであります。王戲の『王』は『さかんなり』といふ意味です。一體『王』といふ字は『さかん』といふ字です。佛や菩薩が非常に勝れた徳を具へて居らつしやることを『王』の字で現はします。さうしてその勝れた徳を具へて居るといふと、それで一切の人を救ふ働きが自由自在に出来る。その自由自在に出来ることを『戲』といふ、戲は即ち、自在といふ意味です。だから『王戲』といふのは、自分に勝れた徳が具つて居て、その勝れた徳に依つて自由自在に一切の人が救へるといふことです。

自分に本當に徳が具つて居れば自由自在に人が救へるのだが、自分に徳が足りないから人を救ふことも出来なくて困る。困るといふのは、自分の力が足りないからである。よく世間の人は『どうも知つては居るが實行が出来ない』と言ふ。それは知つて居るといふのではない。本當に知つて居ないから實行が出来ないのです。どんなに間違つても帽子を足に穿いて下駄を頭に被る人はない。それはチャンとわかつて居るから、

己の足らざるを憂ふべし



どんなに逆上せて居る時でも、帽子は頭へ被る、下駄は足へ穿くのです。だから本當にわかればキツト實行が出来る。それを間違へるといふのは、本當にわかつて居ないからです。自分に徳が具はつて、物事が本當にわかつて居れば、所謂自由自在で、如何なる場合でも教ふべきやうに教へられる。如何なる場合でも説くべきやうに説ける。それが吾々に出来ないといふのは實は自分がわかつて居ないからです。わかつたつもりでも本當にわかつて居ない。だから時々間違つて、いろ／＼な失敗をやるのです。まことに王戲といふことは貴い、自分の徳がさかんであれば、自由自在のはたらきが出る。それから『宿』といふのは久しいといふことです。久しい間さういふ徳が具つて居るのです。宿といふ字は、菩薩の名前や佛の名前に幾らも出て来ますが、いつでも此の宿といふ字は久しいといふ意味に取れば宜しい。久しくさういふ徳を具へて、久しく一切の人を救ふはたらきを有つて居る。斯ういふのが本當の菩薩或は佛です。宿王戲三昧とは、斯ういふ徳の具はり力の具はつた人の境界を考へて、自分もさうなりたと思つて、他に心を向けずに修行する。これが宿王戲三昧と言ふことです。

無縁三昧

その次に『無縁三昧』これが又大事なことです。縁のある者だけ救はうといふのでは、まだ慈悲が足りない。縁のない者までも進んで救はうと思ふ。それが即ち佛様です。一切衆生を吾が子と見るといふ以上は、縁が有るの無いのといつて差別して居るべきものではない。だから、『請ぜざるの師』といふことがあります。向ふから頼まれて師となるのではない、頼まれなくても自ら進んで教へてやるのです。それが所謂無縁の慈悲です。縁が有るの無いのといふ區別は立てぬ、どんな人間をも救はうといふのであります。但しウツカリこんなことを考へると間違ひが起り易い。その請ぜざるの師になるには、佛に近いほどの徳を具へなければならぬ。自分が徳の足らぬ者でありながら請ぜざる師を以て自ら許して、招ばれもしないのに出掛けて行つて、『あなた法華の信者におなりなさい』と言つて勧めても駄目です。兎角自分を省みないで、自分を完全にすることに努めないで、『請ぜざるの師とあるから、何でも行つて勧めてやらう。』と、そんな事ばかり考へても、本當の事は出来はしない。請ぜざるの師といふのは理想でありまして、そこまで行くには絶えず自分の徳を養つて行かなければ出来るものではありません。なかく、難かしいことです。

智印三昧

それから『智印三昧』自分に智慧が具はつて居ると、その智慧を以て人の心に深い感化を與へる。『印』といふのは印を捺したやうに、深い感化を與へることです。自分に智慧が具はつて居れば、他の人に感化を與へて、他の人をも智慧の具はつた者にする。それが即ち智印です。『法印』といふ言葉がありますが、それと同じことです。自分が法を自得して居ればそれを人に教へて、さうして向ふの心にその法を深く打込むのです。人の心に深く打込まなければ何の力ともならぬ。吾々共が喋つて見てもなかく、打込めるどころではない。成程その時は一時間なり二時間なり、大して文句も言はないで人が聽いて呉れるけれども、後になれば何も残らぬ。『この間何を聞いたつけナ、雨の降る日に話を聞いたが：』雨に降られたことは覚えて居るが、話の方はスツカリ忘れてしまつて居る。それは打込む力がないからです。本當に智慧を具へて居れば人の心に深く打込める。さうして向ふの智慧を誘發することが出来る譯であります。さういふことを心に念じて始終修行して居るといふことが智印三昧であります。

解一切衆生  
語言三昧

それから『解一切衆生語言三昧』これは委しい説明を要しませぬ。一切の人間の言葉を解するといふのは一切の人間の欲求する所を解するといふことであります。言葉と言つても、ナニも言葉だけがわかるのでは



ない。あれが欲しい、これが欲しいといふことが皆自然に言葉に現はれますから、一切衆生の言葉に依つてその人の求むる所をよく理解して、さうしてそれ／＼に適當な教を與へ、それ／＼適當に導いて行かう。斯ういふことであります。

集一切功德  
三昧

それから『集一切功德三昧』この集といふことを知るのが難しい。世の中の爲に善い事をするのは、所謂功德を植ゑるのでありますが、その功德は結局集まつて、自分を佛にするといふ事の役に立つのだと理解しなければならぬ。何の爲だといへば皆自分が佛になる爲である。外に何の意味もありはしない。自分が佛になりさへすれば、一切衆生を救ふ所の力も具はるのである。今此の世の中でいろ／＼な功德を植ゑて、向ふの人に親切にするとか、隣りの人に親切にするとか、哀れな人を救ふとか、いろ／＼な功德を植ゑて居りますが、その功德が集つて一つになつて、己れを佛にする事の役立つのだと、斯う思つて努力する。それが集一切功德です。集といふのは唯だ寄せ集めるといふことではない、集めて一つにするといふことです。その一つにするといふ所に目を著けなければならぬ。世の中で随分慈善事業などに力を盡し、世間の爲に骨折つて居る人もありますけれども、たゞそれが善い事だからやるといふだけではまだ／＼浅い。その善い事は結局何の役に立つか、そこに見極めをつけないで善い事をするといふだけでは、折角の善い事が根柢をもたぬ。結局それは自分を佛にし、人を佛にするのに役に立つのである。結局この娑婆世界を淨土にして行くことに役に立つのであるといふ大體の目標を立て、善い事をして行くならば、どんな小善と雖も其の善は非常に貴いものになる。それが集一切功德三昧であります。一切の功德を集めて一つにするといふ點に心を打込んで行くのであります。

## 清淨三昧

それから『清淨三昧』これは申すまでもなく煩惱をスツカリ打拂ふことを清淨といふのであります。ところが、幾度も申すことでありますが、煩惱を打拂ふといつても、自分獨りで考へて、『俺は欲張りだな……俺は嫉妬深いナ……俺はどうも愚痴だな』と、いくら悔んで居ても、その煩惱が無くなるものではない。熱い物を冷たくするにはどうしたら宜いか、氷の上に置いたが宜い。冷たい物を熱くするにはどうしたら宜いか、火の上に置いたが宜い。だから自分の欲張りの性質を直さうと思つたらどうしたか宜いか。人を救ふことに力を用ひたが宜い。嫉み深い自分の心を直さうと思つたらどうしたか宜いか。人を寛容するやうに力を用ひたが宜い。それは非常に骨が折れるけれども、それを努めて居るとだん／＼改まつて行く。凡て自分の心の迷ひを去りたいと考へたなら、その迷ひと正反對の善い行ひに力を盡すより外はない。坐つて考へて居ても直りはしない。清淨にするといふのは煩惱を除くことだが、煩惱を除かうとするにはどうしたら宜いかといへば、佛の大慈悲の心を學んで、世の爲人の爲に力を盡すといふことより外に自分の煩惱を除く方法はない。たゞクヨ／＼考へて居ても直りはしない。たゞ懺悔するとか反省するとかいつて、蒼い顔をして部屋の中に坐つて考へて居てもつまらぬ。そんなことが佛教だといふならば、佛教は人生と没交渉になつてしまふ。清淨にするといふのは努めて佛の行ひを學ぶことです。己れの煩惱を除く爲には、煩惱と反對の慈悲の心持を養ふこと、佛の御心を我が心として世に立つやうにと、そのことに一心になるより外はない。それが即ち清淨三昧です。

## 神通遊戯三昧

それから『神通遊戯三昧』此の神通遊戯といふのは、如何なる境遇に身を置いてても、その境遇を制して行けることです。神通といふのは境に制せられないこと。遊戯とは前にもあつたやうに、自由自在といふ意で



す。私共が境に制せられて居る間は凡夫です。本當に自分の心が佛と通ずるやうになれば、境に制せられずして境を制して行く。それが本當の自由といふことで、そこまで行かなければいけない。人生は複雑でありますから、一生の間にはどんな目に遭ふかわかりはしませぬ。併しどんな目に遭つても、自分の心に覺悟のある人は、その境遇を取つて直ちに自分の修養の資もとにして行きます。順境に居れば順境を取つて自分の修養に資する、逆境に居れば逆境を取つて自分の修養に資する。それが即ち遊戯自在であります。

名人に失敗はない

むかし享保の頃、京都に觀世流の能の名人で寺田といふ人が居たさうです。この人は觀世の宗家ではないが、非常に藝が優れて居るので、大變評判が高くて弟子なども多かつた。そこで他の者が嫉んで、何とかして寺田に失敗をさしてやらうと計畫して居た。ところが寺田といふ人は酒は一滴も飲まない。本當の下戸であつた。だから彼奴に酒を飲ませれば失敗するに相違ない、何とかして酒を飲ましてやらうと巧んで居た。なか／＼その機會がなかつたが、皆が狙つて居るのだから何かしら機會はあるもので、或る時鉢の木の能をやつた。佐野源左衛門常世が花道に出て來て、『あゝら降つたる雪かな』と言つて雪のひどいのを嘆ずるところがあります。寺田がスツカリ支度をして、揚幕から花道へ出る時に、どうしたのか咽喉が非常に乾いたので、『誰か水を持つて來て下さい』と言つた。すると狙つて居た連中が此の時なりといふので、湯呑に一杯酒を入れて持つて來た。餘り咽喉が乾いて居たものだから、それをよく見る暇もなくグツと飲んでしまつた。ハツと氣がついても追ひつかない。マルデ飲めない者が湯呑に一杯飲んだのだから、揚幕を出て見るとフラ／＼としてしまつた。皆は喜んで、今日こそ寺田が失敗するだらう、これで彼奴の評判が落ちるだらうと喜んで居た。寺田はそれでも氣を勵まして出て來たが、花道を行つて舞臺に近い所でバツタリ倒れてしま

一切を善用する

つた。一方の連中は皆く行つたと喜んで居る、見物はどうしたことかと思つて居た。ところが寺田は酔つても氣はシツカリして居るから、やがて起上つて扇を以て靜かに雪を拂ふ形をして、『あゝら降つたる雪かな』と期々と謡ひ出した。それで其の倒れたのが却つて本當に雪に惱んだ様子になつて、一層引立つて見えたので、見て居る人はみな感嘆してしまつた。成る程藝も名人となると、あそこまで行くものかなと感嘆した。それで邪魔をしようと計畫した者も、彼奴にはとても邪魔は出來ぬといつて諦めてしまつたといふ話がありますが、藝が極度まで行くと失敗したのが却つて光彩を添へるやうになる。至れる者はそまで行くのです。これは藝の話ですが、人間の事は凡て此の通りです。眞に至れる人は逆境を轉じて自分の幸とすることが出来る。迫害でも誘惑でもそれを善用して却つて自分を進歩せしむることが出来る。努めて已まなければ、そこまで行けるのであります。人生は複雑でありますから、何時、どんな目に遭ふかわかりはしない。けれども本當に自分の心がシツカリして居るならば、如何なる境遇も己れをどうすることも出來はしない。自分を悪い方へ向けようと思ふ人があつても、その人の仕向けを善用して自分を善い方に向けて行くことが出来る。それが所謂神通遊戯です。それは私共の今の境界とは非常に遠いことではありますが、今の藝の話などを聞くと、私共はさういふものかなと思ひ當る。藝の至れる者がさうでありますから、その他の道に於ても至れる者は皆さうだらうと思ひます。さういふやうな心持を始終持ち續けるやうに努めるのを神通遊戯三昧と申します。

慧炬三昧

それから『慧炬三昧』若し自分に智慧が有り餘つて居れば自ら周圍を照します。チヨウドたいまつの火が燃えて周圍を明るくするやうに、自分に有り餘る智慧がありますれば、自然に周圍を明るくして、能く周圍の人



莊嚴王三昧

を教へ導くことが出来るでせう。智慧の炬ともしびを飽くまで盛んにしようと思ふ、それが慧炬三昧です。それから『莊嚴王三昧』この『莊嚴』は徳を以つて身をかがるといふことです。自分が優れた徳を具へて居れば、自ら人に仰ぎ慕はれ、自ら周圍に感化を及ぼすことが出来るのであります。『王』とは前に申すやうに、盛んであるといふ意味、自分の徳を以て自分の身をかがる、その徳が非常に隆くて、一切に良き感化を及ぼすやうになることを理想として、そのことを始終工夫して居りますのが即ち莊嚴王三昧です。

淨光明三昧

それから『淨光明三昧』これは自分の身から出る所の光が淨らかであつて、自ら周圍を照し、周圍を淨らかにするといふこと。これも詳しく説明するまでもなく、佛様がさうであり、又菩薩もさうであつて、自分の徳が自ら淨き光となつて周圍を照す、又周圍を淨めて参ります。このことを目標にして修行して行くのが淨光明三昧です。

淨藏三昧

それから『淨藏三昧』藏といふのは自分の心の内に貯へること。内に貯へたる所の徳が高くて、即ち心の持ち方が淨らかであれば、自ら周圍を淨らかにすることが出来る。それを努むるのが淨藏三昧であります。自分の心に穢れがあつて、行ひだけを淨らかにして人に示さうと思つても、それは一時は人を欺くことが出来ようけれども、長く續くものではない。己れの心中に思ふことが皆淨らかなもので、チツトモ煩惱が無くなれば、自然に周圍を淨らかにすることが出来る。それを理想として怠らぬのが淨藏三昧であります。

不共三昧

それから『不共三昧』といふのは、誰と較べて見ても逆も較べられないほどの徳を積まうと思ひ定めることです。不共といふのは佛様のことで、誰も比べることが出来ぬといふことです。その佛様の境界を理想として、誰と較べても較べられないほどの徳を積みたいと念願して常に修行致します。それが不共三昧です。

日旋三昧

それから『日旋三昧』日が旋まわり旋つて總てを照すやうになることを自分の理想として修行するのです。この日の旋るといふことには二つの重大な意味があります。一つは怠らないといふこと。太陽は決して怠らないで、必ず定まつた時間に定まつた處を照す。だから吾々も太陽を理想として、決して怠つてはいけません。佛様は五十年の間少しも怠けて居らつしやらなかつた。又そればかりではない。モウ一つは隔てないといふことも太陽の徳です。太陽はどんな物でも照す。犬の糞の上をも照す。泥溝の中をも照す、掃溜をも照す。穢い所だから照さないといふことはない。勿論綺麗なものも照す。王侯貴族の宮殿も照す。乞食の小屋も照す。何物をも少しも隔てない。吾々が人を救はう、世の中を導かうといふ時には、やはり此の心でなければならぬ。太陽は怠らず隔てないから、此の太陽の旋るのを理想として、吾々もさうありたいと思つて絶えず修行を致します。これが即ち日旋三昧です。

これ等は皆法華經に説かれたことに外ならぬのでありますが、それを十六に分けて其の名を列ねられて居りますから、先刻申上げるやうに、自分の境遇に引較べて、『成るほど之を實行しなければならぬ……』が自分には足りなかつたナ……』と思ひ當れば、そこから自分を完全にして行く道に入ることが出来ます。これから後もさういふやうな事が幾つもあるだらうと思ひますが、それを皆自分の身に引較べて、自分の手近い所から實行に勵んで行くといふことになれば結構だらうと思ひます。

釋迦牟尼佛光照其身。即白淨華宿王智佛言。世尊。我當往詣娑婆世界。禮拜親近供養釋迦牟尼佛。及見文殊師利法王子菩薩。藥王菩薩。勇施菩薩。宿王



華菩薩。上行意菩薩。莊嚴王菩薩。藥上菩薩。

釋迦牟尼佛の光、其の身を照したまふ。即ち淨華宿王智佛に白して言さく、世尊、我當に娑婆世界に往詣して、釋迦牟尼佛を禮拜し親近し供養し、及び文殊師利法王子菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、宿王華菩薩、上行意菩薩、莊嚴王菩薩、藥上菩薩を見るべしと。

釋尊の光が他の世界を照す

此處にも前の方便品以來屢々出ました『諸佛道を同じうする』といふ意味がハッキリ現はれて居ります。此の娑婆世界の佛様でも他の世界の佛様でも、佛様の覺りといふものは異ふものではない。又佛様の教といふものも異ふものでない。私共がお釋迦様の教へを信じさへすれば、十方の世界の佛様、また過去から現在から未來に亘つての有らゆる佛様の教を信することになるのだ。といふことが、屢々言つてあつた。それが此處にも現はれて居る。即ち他の世界の菩薩の身がお釋迦様の光にまつて照されたといつてある。

釋尊の大功德

殊に佛様が人を教へ世を導かれるのは、骨の折れることですが、其の骨の折れる度合の大きいほど功德も大きいといふことです。此の娑婆世界といふ所は土地も險惡であり、人間の心も險惡である。此處で教を弘めるのは非常に骨が折れることです。それだから同じ佛の努力の中でも、この娑婆世界で心の曲つた人間を相手にして教を弘めるのは、特別に骨の折れることである。それ故に十方の世界の佛様がお釋迦様の御苦勞を察して、『ア、御苦勞様だ、娑婆世界で教を弘めるといふことは大變な事だ』と斯う思つて、此の娑婆世界に教をお弘めになるお釋迦様の努力に對して特に感謝をされるに違ひない。斯ういふ思想が此處に表はれて居る。それは佛様ばかりではない、吾々も此の事をよく考へなければならぬ。若し世の中の人の心が皆平

和でありまして、何事にもそんなに骨が折れないのならば、修行をするのも至つて樂であるけれども、斯んな難かしい世の中に立つて自分の信仰を勵み、又自分の學び得た所を世に弘めるといふのは非常に骨の折れる事です。その骨の折れる事を思ひ切つてやる者の功德は極めて大きいものであるといふことを佛様が仰せられて居ります。これは前の法師品以來屢々説かれて居ることです。

そこでお釋迦様の光明がだん／＼と淨光莊嚴といふ國を照した時に、その世界の淨華宿王智佛といふ佛様に向つて、妙音菩薩が申すには、『世尊よ、自分は娑婆世界へ行つて、あの苦しい娑婆世界で教をお弘めになりました釋迦牟尼佛を供養し、さうして其の御苦勞に對してお禮を申し上げたいと思ひます。又これはお釋迦様御一人の努力ではない、文殊師利といふやうな菩薩もあるし、その他大勢の菩薩達もあつて、その人がお釋迦様をお輔け申して貴い教を世に弘めて居るのだから、その菩薩達にもお目に懸つてお禮を申し上げます。又娑婆世界に於て教を弘めるのには如何に苦勞が多いかといふことも伺ひたい』といふことを申しました。

妙音菩薩の歸依

娑婆世界に於ける努力の貴さ

これは前の神力品に於て、十方世界通じて一つになるといふことが言はれてあつて、決して私共は西の方や東の方に極樂淨土を求めるとは及ばない、吾々の住んで居る此の土の上に極樂淨土を實現するといふことを理想としなければならぬと言つてあります。その意味を更に強めて言つてあるのです。それが大事なことです。樂な所で修行するのは何でもありません。苦しい所で修行して、此の穢い土の上に極樂淨土を實現するやうに努めるのが最も貴いことである。その思想が此處にも明かにあらはれて居る。だから他の世界の菩薩がこの世界へやつて來て、お釋迦様にお禮を言つて、その外に此の世界で教を弘める人に御苦勞と挨拶をして下さ



るといふのです。吾々の如き、少しなりとも佛の教を弘めることに心を盡す者は、この事を忘れてはいかぬ、骨が折れるほど功德は大きい。骨が折れない事を宜い加減にやつて居たのでは本當の事は出来はしませぬ。吾々が常に正しい信仰を持つて、此の信仰を以て世の中に立たうといふ志を改めぬといふことは、容易なことではありませぬ。その容易ならざる事を敢てするならば、此處に書いてあるやうに、他の世界の佛様もお褒めになり、他の世界の菩薩も態々此處へ来て自分達を奨励して下さるのです、此の確信がなくては本當の事は出来はしませぬ。今の世の中は難かしい世の中です。此の世の中で正しい信仰を有つて居れば何かの損をするのです。其の損をしてもかまはないといふのには、十方の世界の佛が褒めて下さる、十方の世界の菩薩が自分の後押しになつて下さるといふ自信がなくては出来る事ではありませぬ。ですから斯ういふ所を讀む時に能く考へて見て、ア、これは自分達の爲の教であると思はなければならぬのであります。

爾時淨華宿王智佛。告妙音菩薩。汝莫輕彼國。生下劣想。善男子。彼娑婆世界。高下不平。土石諸山。穢惡充滿。佛身卑小。諸菩薩衆。其形亦小。而汝身四萬二千由旬。我身六百八十萬由旬。汝身第一端正。百千萬福光明殊妙。是故汝往。莫輕彼國。若佛菩薩及國土。生下劣想。

爾の時淨華宿王智佛、妙音菩薩に告げたまはく、汝彼の國を輕しめて、下劣の想を生ずること莫れ。善男子、彼の娑婆世界は高下不平にして、土石諸山穢惡充滿せり。佛身卑小にして、諸の菩薩衆も其の形亦小なり。而るに汝が身は四萬二千由旬、我が身は六百八十萬由旬なり。汝が身は第一端正にして、百千萬

の福ありて光明殊妙なり。是の故に汝往いて彼の國を輕しめて、若しは佛菩薩及び國土に下劣の想を生ずること莫れと。

娑婆を輕んずべからず

それで淨華宿王智佛が妙音菩薩に仰しやるには、『それは宜からう、併しながらお前が娑婆世界へ行つて見ると、娑婆世界といふ所は洵に淺ましい所で、間違つた人間の多い所だから、その國を輕んじてはいけな

い。下劣の想を生じてはいけない。娑婆世界といふものは高い所も低い所もあつて、土や石がゴロ／＼して居て、穢いものが充滿して居る。それから佛様といつたところが、其の身は小さい、菩薩の身も非常に小さい。ところがお前の身は大きい。佛の身はそれより尙ほ大きい。お前の身は非常に清淨で、姿も立派である。壽命も長い、その身の光も周圍を照すのである。だから此處の佛やお前達に比べると娑婆世界の佛や菩薩達は洵に情ないものだが、それに對して侮つたり馬鹿にしたりする心持を發してはならぬぞと仰しやつた。

此の娑婆世界の佛や菩薩や國土の様子を見て、下劣の想を起し、つまらない所だと思つてはいけないといふ思想は、前の地の底から寶塔が出るといふ時に、既に申上げました。寶塔が天から降つたのではない、地の底から出て來たのである。それから地涌の菩薩、即ち上行菩薩といふやうな菩薩も天から降つたのではない。地面の底から出て來た。この地底から出て來るといふことには深い意味が有る。

大地を離れ



ば、この世の中の苦み惱みの中を通り抜けて、初めて眞實の覺りが開かれる。そこで初めて眞實の智慧が成就するといふ意味を表はして居る。法華經に説かれたことは決して空想ではありませぬ。活きた世の中の苦み惱み、活きた世の中のいろ／＼な出來事を通り抜けて、そこで眞實の覺りが得られるのだといふことが、法華經の前後を通じた思想であります。それが此處にも表はれて居る。だから娑婆世界の穢い土の上に居る菩薩や佛を馬鹿にしてはいけないぞ、これが貴いのだぞといはれるのです。これは維摩經などにも同じやうな思想がありますが、此處にも明かに表はれて居ります。

妙音菩薩白其佛言。世尊。我今詣娑婆世界。皆是如來之力。如來神通遊戲。

如來功德智慧莊嚴。

妙音菩薩其の佛に白して言さく、世尊、我今娑婆世界に詣らんこと皆是れ如來の力、如來の神通遊戲、如來の功德智慧莊嚴ならんと。

そこで其の教を受けて妙音菩薩が申すには、世尊よ、私は今娑婆世界に參つて、お釋迦様及びそれに仕へて居る大勢の菩薩に御挨拶を申し上げようと思ひます。それは自分の力では出來ませぬ。佛様、あなたのお力が自分に加はつて、初めて自分は娑婆世界に行つて、さういふ佛や菩薩に御挨拶を申し上げることが出來るでありませうと言つた。

佛の力の加

此處に『如來の力』とありますが、この法華經の前に説かれた無量義經に於て、大勢の菩薩達がお釋迦様

をお讃め申上げた時に、

法に於て自在にして法王たり

とあります。如何なる境遇に於ても、如何なる場所に於ても障礙なく教を説く、斯ういふことが法に於て自在にしてといふことで、佛様はいつもさうです。相手が賢い人なら賢い人のやうに、愚かな人なら愚かな人のやうに、善人でも悪人でも、如何なる人を相手としても適切な教を説かれるから、法に於て自在であるといふのです。これは本當に煩惱を離れた者にして、初めて出來ることでありませぬ。今此處で、それを言つて居る。娑婆世界へ行つてお釋迦様にお逢ひ申し、菩薩にお逢ひ申すといふことは、並大抵の力ではない、佛様の御力であつて初めて出來ると言ふ。今の吾々もやはりその心持を有たないといけない。教を弘めるにはどんな人間でも相手に行かなければならぬ。善人であらうが悪人であらうが、皆相手にして教を説くといふのには、自分一人の力では出來ませぬ。佛の力を身に負うて、佛の自分を護つて居て下さると思つた時に初めてどんな悪人でも相手になれる、どんな馬鹿でも相手になれるのです。娑婆世界の穢い所に行くのは佛の力のお蔭であると言つた、此の心持をもつて、私共も如何なる悪人も相手にしなければいませぬ、如何なる罪の衆生も相手にしなければいませぬ。

無畏の心

自分は凡夫である、併しながら自分の後には佛の力が添うて居るのだ、佛の力が自分を護つて居るのだと思へば、何の畏れる所も無い。何の憚る所も無い。如何なる者をも相手にして教を説くことが出來る譯であります。今此の菩薩達は佛様のお力によつて、自分達は如何なる人間を相手にしても畏れない、如何なる人間を相手にしても憚らないといふ心持になつたから、これから娑婆世界へ行つてお釋迦様にお目に懸らう。



大勢の人間にも逢つて來やうといふのです。十方の世界を通じて佛様の教は一つのものである、又過去現在未來を通じて佛の教は一つのものであるのだから、その佛の教に歸依するといふ心持を自分達が釋迦牟尼佛に申上げようと、斯ういふ考へであります。

この所は所謂流通分でありますから、法華經の中心の問題を離れて居るやうな感じも致しませんが、併しながら凡夫である私共が法華經の修行をする上に於ては、寧ろこの流通分の菩薩が佛のお力に依つて自分の修行を勵んだといふ事實が、却つて私共の信心を勵む上に於て大きな力になるやうにも思はれます。それで此の所も決して輕々しく見ないで、やはり念を入れて讀んで行く方が宜からうと思ひます。

此の妙音菩薩が此の娑婆世界に來て、釋迦牟尼佛にお目に掛り、又釋迦牟尼佛の教を世に弘める爲に力を盡して居る多くの菩薩に會ひたいといふ望みを發したのに對して、淨華宿王智佛が戒めを與へられて、『汝往いて彼の國を輕しめて、若は佛菩薩及び國土に下劣の思を生ずること莫れ』と言はれたといふ。斯ういふことは種々の經典の中に現はれて居る思想であります。法華經には殊に明かに示されて居るのです。娑婆世界、即ち吾々の住んで居る此の穢ない土の上に於て、機根の劣つて居る人間相手に教を弘めるといふことは大變に骨の折れることであるが、骨が折れるだけに其の功德が大きいといふのです。もと／＼佛様は大きな慈悲心をもつて居られる。又菩薩は佛の御心を以て自分の心とするのが本來ですから、清淨な所に居て善人ばかり相手にするよりも、穢れた所に來て、間違つた人間を相手にして、多くの苦勞を積んでこそ初めて佛の佛たる甲斐もあり、又菩薩の修行も充分に出來ると思はれるのです。ですから娑婆世界が穢いからといって卑しんではいけないぞといはれるので、それは畢竟娑婆世界に現はれて教を説いたお釋迦様の功德が非常

## 佛菩薩の心

に大きいといふ意味です。

## 娑婆と淨土

此の思想は前から幾度も法華經に現はれて居るので、一番初めの序品に於て既に之を見ることが出来る。お釋迦様の身から光が出て東の方の世界を照した時に、その光の中に於て、此娑婆世界に居る者が他の淨土に於て種々の修行して居る者の姿を見たといふことがある。その時からモウ此の娑婆世界は、つまらぬものではないといふ思想が現はれて居るのであります。幾度も申すこととありますが、經典に於ては或る重大な事を教へられる時に、いきなりさういふ重大な事は出て來ない。前からいろいろ準備的の教が重なつて來てその後に至つて大切な事が説き示されるのであります。今の場合でもさうで、つまり三段に現はれて居る。一番初めは娑婆世界から他の世界を見るといふことです。此の娑婆世界に居て、他の世界のことと判るといふ。これが序品に現はれたことです。それからズツと進んで神力品になつて來ると、十方世界通じて一つだといふ。何れが主になつて居るといふことはない。此の娑婆世界も極樂淨土も通じて一つであつて、此の娑婆世界に極樂淨土が現はれるとも言へれば、他の淨土に於て此の娑婆世界のことと判るとも言へる。通じて同じだといふことです。それから此の妙音品になつて來ると、今度は他の世界から諸菩薩が此の娑婆世界に來るといふことになる。相通ずるといふことは同じだけれども、考へ方が三つある。此方で向ふの様子が判るといふのと、兩方が通じて一つだといふのと今度は他の世界から態々此の娑婆世界へやつて來るといふことです。即ち茲に至つて此の娑婆世界の最も貴いといふ心持がいよいよ明かに發揮される譯です。

尤も神力品に於て、十方世界の者がみな此の娑婆世界に向つて掌を合せて拜んで、『南無釋迦牟尼佛』と言つたといふことがありますから、そこに於て既に此の娑婆世界で、煩惱に充ちた凡夫を相手にして教を説



くことの貴いといふことが充分に見えて居りますが、今此處に至つて更にその思想が明瞭になつて來ます。清淨な佛の國に居る者が態々其の國土を離れて此の娑婆世界へやつて來て、釋迦牟尼佛の教を受けようといふのでありますから、此處に至つて此の娑婆世界の重んずべきことが特に強調されて居る譯であります。

佛の應現

この處は餘程注意すべき所で、文字は極く簡單でありますけれども、此の娑婆世界に於て修行して居る吾々には、特に大切な所です。殊に、だん／＼世の中が難かしくなりまして、いろ／＼困難な事や嫌な事の多い中で修行して居ります吾々共に取つては、常に大切なことであります。此の娑婆世界に於ては佛といつても身すがたが小さい、菩薩の形が小さい。何故娑婆世界に現れて居るところの佛の身が小さいかと言へば、それはこの世に應現した佛だからである。應とは大勢の人間が救ひを得たいと思ふから、その望みに應じて此の世に現はれたといふことである。それだから非常に凡夫と懸け隔れた姿で現はれたのでは、此の娑婆世界の者が取つ附きやうがないので、此の娑婆世界に應現する佛は小さな形で、普通の人間と異はないやうになつて現はれて來て、さうして手を執つて吾々を導いて下さるのです。之によつて佛の慈悲といふものが貫徹される譯です。それだから佛様があまり立派な姿でなくて現はれて來たといふことは、佛の慈悲の廣大なことを證據立てるものです。これは佛ばかりではない、一體人を教へるといふ者が誰も持たなければならぬ心懸けです。『自分は偉いぞ、貴様達はつまらない者だ』『貴様達は解らない、こつちは解つて居る』と、斯う段を附けて、高見から見下して教を説いて居たのでは、誰も寄り附く者は無い。自分が小さい、つまらない者となつて、高い所から降り立つて、凡夫の手を執つて引上げてやるといふのが本當の慈悲でせう。是れが本當に人を教へ導く者の態度でありませう。その意味が此處に能く表はれて居る。だから佛様の身も小さいし、

菩薩も小さい。それであるから之に對して侮つたり輕んじたりしてはいけません。

そこで妙音菩薩が申すには、自分が娑婆世界に行くことが出来るのはみな、佛様のお蔭です。自分の力で何も出来るものではない。佛様が自分を教へ、又自分を護つて居て下さるから、その如來の力に依つて、自分はこの娑婆世界へ行つて、娑婆世界の様子も見て來ることも出来る。此處に『如來の神通遊戯』とありますが『遊』といふのは自在といふ意味です。前にも『遊行して畏れ無きこと、師子王の如し』といふことがありました。遊ぶといふ字は、いつでも自在といふ意味。言ひ換へて見れば、囚はれない、限られないといふ意味です。遊といふのは、物事を宜い加減にするといふのではない。どんな境遇に在つても自在で、少もそれに囚はれないで、自分の爲すべき所はキツトやつて行ける。斯ういふことが遊、或は遊戯といふことでもあります。これは佛教以外にもあるので、孔子の語に『君子は器ならず』といふことがある、これはやはり自在といふことです。役人となつたら役人としてその職分を果す。併し役人を罷められても困りはしない。今度は商賣人になれば商賣でやはり世の中の役に立つ。商賣を廢めても困らない。商賣を廢めて何か他の事をやれば、又それで世の中の役に立つ。君子は器ならず、一度役人をやつたら役人でなければならぬ、商賣をやつたら商人でなければいけないと、一方に囚はれてしまつて、首も廻らないやうな人間は君子とは言へない。『君子は器ならず』といふことは、いつも其の境遇に安んじて自分の使命を果し、自分の勤めを盡す。所謂自由自在の心持を有つて居るといふ意味です。

無礙の人

王様になつたら王様で宜い。王として國を善く治める。賤しい庶民となつたら庶民でも宜い。立派に貧苦に耐へて世の爲に盡す。いつでも境遇に負けることはない。どんな境遇に居つても自分は自由自在だ。斯う

君子は器ならず



いふことが所謂遊戯或は遊行であります。吾々共は凡夫ですから、なか／＼さういふことは出来ないけれども、先づ理想としてはそこに眼を着けなければならぬ譯です。どんな境遇に居つても、境遇に負けてはいかぬ。得意の境遇に居つたら得意のやうに、失意の境遇に居つたら失意のやうに、各々その境遇を善用して自分の徳を積み、自分の責を果して行く。佛様は無論さうであります。いつの場合でも適當な教を與へて下さる。ですから如來の神通遊戯と言つたのです。

それから又『如來の功德、智慧の莊嚴』とありますが、佛の功德といふのは、一切の人を恵む力を有つて居らつしやることです。又無限の智慧を具へて居らつしやる。その智慧を以て佛は常に自分の身を飾つて、大勢の人間に仰ぎ慕はれる。その佛様の功德、佛様のお蔭で、自分達も教を受けて、娑婆世界へ行つて其の樣子を能く見ようといふ氣分になつたのでありますから、これは全く佛様のお徳に依ること、佛様の智慧が自分を教へ導いて斯うして下さつたのであるとお禮を申し上げたのであります。

於是妙音菩薩。不起于座。身不動搖。而入三昧。以三昧力。於耆闍崛山。去法座不遠。化作八萬四千。衆寶蓮華。閻浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶以爲其臺。

是に於て妙音菩薩座を起たず、身動搖せずして三昧の入り、三昧の力を以て耆闍崛山に於て法座を去ること遠からず、八萬四千の衆寶の蓮華を化作せり。閻浮檀金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、金剛を鬚と爲し、甄叔迦寶を以て其の臺と爲せり。

甄叔迦寶を以て其の臺と爲せり。

妙音の出現する前

そこで妙音菩薩は座より起たず、又身も動かさずして三昧に入つた。三昧は身も心も靜になつて動かぬ状態。その三昧の力を以て耆闍崛山、即ち靈鷲山で釋尊が法華經を説いて居らつしやる、その法座を去ること遠からざる佛様の居らつしやる直ぐ前の所に、八萬四千のいろ／＼な美しい蓮の華が現はれた。その蓮の華は閻浮檀金といふ勝れた黄金を莖とし、白銀を葉と爲し、金剛といふ勝れた寶石を以て花の鬚として、甄叔迦といふルビーのやうな紅い寶石を以てその臺として居る。斯ういふ美しい華が現はれたのは、今此處に勝れた人が現はれるといふことの前徴であるといふことです。

爾時文殊師利法王子。見是蓮華。而白佛言。世尊。是何因緣。先現此瑞。有若干千萬蓮華。閻浮檀金爲莖。白銀爲葉。金剛爲鬚。甄叔迦寶以爲其臺。

爾の時に文殊師利法王子、是の蓮華を見て佛に白して言さく、世尊、是れ何の因緣ありてか、先づ此の瑞を現せる。若干千萬の蓮華有りて、閻浮檀金を莖と爲し、白銀を葉と爲し、金剛を鬚と爲し、甄叔迦寶を以て其の臺と爲せりと。

その時に文殊師利菩薩が、今まで無かつた蓮華の現れて來たのを見て、これは何か此處に立派な人が出て來るのではないかと思つて佛に問うたのであります。文殊師利といふのはこれは智慧を掌る菩薩であります